

# **東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報**

**- 平成20年度 -**

**2 0 0 9 . 3**

**東大阪市教育委員会**

## はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成20年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、瓜生堂遺跡、山畠古墳群、水走氏館跡の調査概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成21年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

## はしがき

## 目次・例言

第1章 半成20年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 瓜生堂遺跡隣接地の試掘調査(瓜生堂遺跡第54次発掘調査)	5
第3章 山畠遺跡第31次発掘調査	43
第4章 水走氏館跡第4次発掘調査	73

# 例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額10,000,000円)で実施した、個人施行による開発工事に伴う発掘調査、及び遺跡隣接地の試掘調査の概要報告書である。
- 本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財團法人日本色彩研究所色監修「新版 標準土色帖」(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 本書の執筆は次のとおりである。  
第2章(4)は武田雄志、第3章(4)・第4章(4)は佐藤由美が担当した。その他の章項および図集は菅原章太が行なった。
- 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。
- 調査では、遺構名称に略号を使用している。略号は以下のとおりである。

S P	ピット・柱穴	S D	溝・濠・溝状遺構
S K	土坑	S E	井戸
S X	その他の遺構		

- 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

## 第1章 平成20年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成20年度の文化財保護法第93条・94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成21年2月28日現在で届出370件、通知57件で合計427件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅	66件	分譲住宅	132件	共同住宅	25件	その他住宅	1件	店舗	10件
その他建物	25件	道路	2件	学校	5件	電話	2件	ガス	60件
上水道	20件	下水道	65件	河川	1件	上地区画整理	1件	宅地造成	6件
その他の開発	6件								(※0件の調査原因は省略)

427件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査62件、工事立会110件、慎重工事255件であった。

平成18年度では届出(通知)が585件、19年度は583件であったことと比較すると、150件以上、25%の減少となっている。大幅な落ち込みで、最近の経済情勢の悪化に連動したものと考えられる。これを工事別に見ると、個人住宅・分譲住宅で併せて103件減少した反面、共同住宅は9件増加しており、好対照である。ただ今後共同住宅の件数が伸びるかどうかは不透明で状況を見守る必要がある。また去年との比較では、下水道が31件減少したこと大きな特徴である。

東大阪市教育委員会では、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設等に伴う確認調査と発掘調査について平成20年度国庫補助事業として実施した。昨年度の報告書の補遺とともに次ページ以下に掲げた。その内容は個人専用住宅建設に伴う確認調査が14件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が4件、個人の造成工事に伴う確認調査が1件、遺跡の範囲確認調査が3件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う発掘調査が1件、個人の造成工事に伴う発掘調査が1件で合計24件である(平成21年2月28日現在、予定も含む)。これも例年40件前後であったことと比べると、かなり減少傾向にある。

平成20年度の国庫補助事業では、例年と同じく、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が優位を占める。これらは基礎工事に地盤改良や柱状改良、杭打設を作りもので、国庫補助事業として悉皆的に確認調査を行ない、遺跡保護行政のための必要なデータを得ている。また昨年に引き続き遺跡の範囲確認調査を3件行ったことが特色である。範囲確認調査を積極的に実施し、埋蔵文化財についての基礎データを取得するとともに、保護行政の各種施策に資するよう努めていきたい。

次に、平成20年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。No.16で個人賃貸共同住宅建設に伴い瓜生堂遺跡の確認調査を実施した。2棟の共同住宅の建設を予定され、それぞれで届出書の提出があった。試掘坑は2箇所設定した。調査の結果、2箇所とも現地表下1.1mで奈良～平安時代前期の遺物包含層を検出した。またいずれも黄褐色極細粒砂～細粒砂をベースとしていた。遺物の出土量は多く、土器の内外面や断面の摩滅が少ないとから、細粒砂層の上面に遺構面が広がり、濃密に遺構が分布することが予想された。このことは第2章で詳しく述べる瓜生堂遺跡第54次調査のA地区の状況とほぼ符合するものである。瓜生堂遺跡第54次調査地とNo.16の調査地は北西～南東の方向に約150m隔たっており、この間には、奈良～平安時代の集落が点在する可能性が高い。

なお、平成20年度国庫補助事業として、東大阪市西石切町2丁目269番地に所在する塚山古墳について、墳丘現況の空中写真測量を実施した。塚山古墳は、市内で数少ない5世紀前半の円墳であるが、これまで発掘調査が実施されたことがなく、古墳の内部土体など全く不明であった。このため、まず、塚山古墳の基礎資料を得る目的で、墳丘の現況測量を行ったものである。

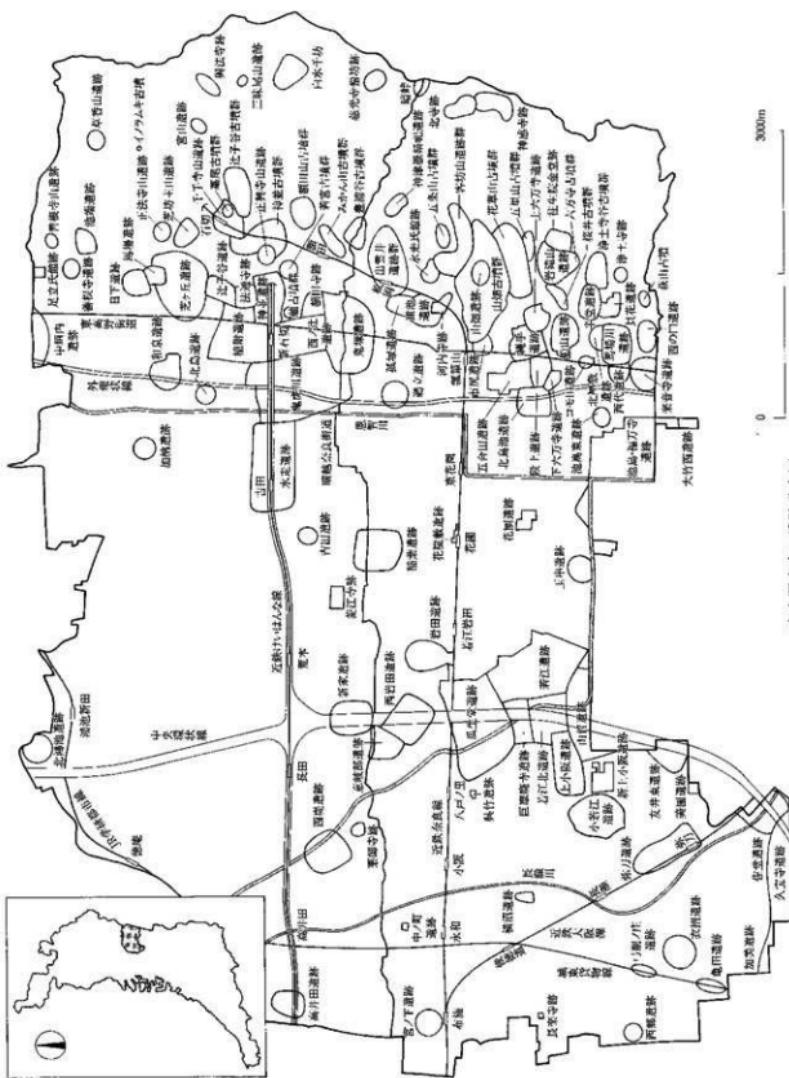
### 平成19年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況（補遺）

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1	本確認地試掘調査 (企業共同住宅)	下小阪5丁目41--2番地	菅原	平成19年10月31日～11月15日	158m <sup>2</sup>	本書第2章。 (調査後、瓜生堂遺跡第54次発掘調査とする)
2	水走氏館跡確認調査 (個人造成工事)	五条町1317-1,1322-1の一部番地	若松	平成20年3月6日	7.8m <sup>2</sup>	GL -0.7mまで確認。GL -0.15mで鎌倉時代の遺物包含層、遺構露出。平成20年度本発掘調査実施(No.6)。
3	山畠古墳群確認調査 (個人専用住宅)	讃軍山町97-9,97-17番地	菅原	平成20年3月13日	2.5m <sup>2</sup>	GL -1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
4	神並遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東石切町1丁目808-3,-6,-7,-13,810-2,810-1の一部番地	菅原	平成20年3月14日	1.2m <sup>2</sup>	GL -1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
5	西堤遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	西堤学園町2丁目17-5番地	若松	平成20年3月17日	3.2m <sup>2</sup>	GL -1.65mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
6	山畠遺跡第31次 発掘調査(個人造成工事)	上四条町1709番地	菅原	平成20年3月5日～3月25日	188.96m <sup>2</sup>	本書第3章。

### 平成20年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1	久宝寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	大瀬南2丁目417-95番地	菅原	平成20年4月17日	2.0m <sup>2</sup>	GL -1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	辻子谷遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町2丁目234-5,-7番地	菅原	平成20年4月21日	2.7m <sup>2</sup>	GL -1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
3	瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江北町1丁目47-21番地	若松	平成20年5月7日	2.0m <sup>2</sup>	GL -2.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
4	美園遺跡確認調査 (個人専用住宅)	友井4丁目833-14,-17番地	菅原	平成20年5月9日	4.0m <sup>2</sup>	GL -2.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
5	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町4丁目2141-1番地の一部	菅原	平成20年6月11日	4.0m <sup>2</sup>	GL -0.9mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
6	水走氏館跡第4次 発掘調査(個人宅地造成)	五条町1317-1番地の一部	菅原	平成20年5月26日～6月19日	288.51m <sup>2</sup>	本書第4章。
7	若江遺跡確認調査 (範囲確認)	若江本町4丁目984-3番地	菅原	平成20年6月20日	3.2m <sup>2</sup>	GL -1.25mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
8	山畠古墳群確認調査 (個人専用住宅)	四条町453-10,475-1番地の各一部	菅原	平成20年6月30日	3.6m <sup>2</sup>	GL -0.9mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。

調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
9 弓刀遺跡確認調査 (個人専用住宅)	友井2丁目146-8番地の一部	菅原	平成20年7月3日	2.3m <sup>2</sup>	GL -1.1mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
10 西ノ辻遺跡確認調査 (府史跡地理文化財確認)	弥生町2-47番地	菅原	平成20年7月4日	3.0m <sup>2</sup>	GL -1.5mまで確認。墳土のみ検出。今後の取扱いについて大阪府教育委員会ならびに東大阪市教育委員会と協議すること。
11 上小阪遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	若江西新町4丁目4-1番地	菅原	平成20年7月7日	4.0m <sup>2</sup>	GL -1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
12 弓刀遺跡確認調査 (個人専用住宅)	近江堂2丁目177-18,177-19番地	菅原	平成20年9月11日	2.3m <sup>2</sup>	GL -1.05mまで確認。中世期の整地層を検出。立会調査を経て工事実施。
13 水走氏館跡確認調査 (個人駐車場造成)	五条町1281-1,1285-1番地の各一部	菅原	平成20年9月22日	5.5m <sup>2</sup>	GL -1.05mまで確認。確認調査では遺構・遺物検出せず。撫養部の立会調査を経て工事実施。
14 植附遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町3丁目211の一部 212-1,212-2番地	菅原	平成20年9月25日	2.4m <sup>2</sup>	GL -1.05mまで確認。整地層を検出。立会調査を経て工事実施。
15 山畠遺跡確認調査 (範囲確認)	上四条町1709番地	菅原	平成20年10月20日	6.0m <sup>2</sup>	GL -1.05mまで確認。弥生土器を含む整地層を検出。立会調査の実施について協議中。
16 瓢生堂遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	下小阪4丁目33-1番地	菅原	平成20年10月29日	8.0m <sup>2</sup>	GL -1.55mまで確認。奈良～平安時代の遺物包含層を検出。基礎工事は遺物包含層に抵触しない設計で、立会調査を経て工事実施。
17 若江北遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江西新町4丁目12-4の一部番地	菅原	平成20年11月4日	2.3m <sup>2</sup>	GL -1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
18 小若江遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	小若江3丁目15番地	菅原	平成20年12月21日	4.5m <sup>2</sup>	GL -2.1mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
19 鬼塚遺跡確認調査 (個人専用住宅)	箱殿町469-38番地	菅原	平成20年12月15日	2.3m <sup>2</sup>	GL -1.65mまで確認。古墳時代の上部器を含む層を検出。立会調査を経て工事実施。
20 上小阪遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	若江西新町4丁目17-1番地	菅原	平成20年12月16日	8.0m <sup>2</sup>	GL -2.1mまで確認。弥生時代後期の上坑および遺物包含層を検出。同期の弥生土器多量出土。発掘調査実施(No24)。
21 若江北遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目41-2,41-3の一部番地	菅原	平成21年1月9日	1.7m <sup>2</sup>	GL -1.3mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
22 千手寺山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東石切町3丁目372,375の一部番地	菅原	平成21年1月23日	2.3m <sup>2</sup>	GL -0.9mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
23 水走氏館跡確認調査 (個人専用住宅)	五条町1329の一部番地ほか3筆	菅原	平成21年2月9日	2.7m <sup>2</sup>	GL -1.3mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
24 上小阪遺跡第8次発掘調査 (賃貸共同住宅)	若江西新町4丁目17-1番地	菅原	平成21年3月4日着手予定	108m <sup>2</sup>	詳細は次年度報告予定。



東大阪市内の遺跡分布図

## 第2章 瓜生堂遺跡隣接地の試掘調査

### (瓜生堂遺跡第54次発掘調査)

#### 1)はじめに

瓜生堂遺跡は、東大阪市下小阪5丁目から瓜生堂2丁目にかけて広がる、弥生時代から室町時代の集落跡である。遺跡の範囲は、東西約1120m南北約760mの規模と推定されている。本遺跡は標高約3m前後の沖積低地に位置し、旧大和川に属する諸河川が形成する自然堤防上の微高地に立地する。

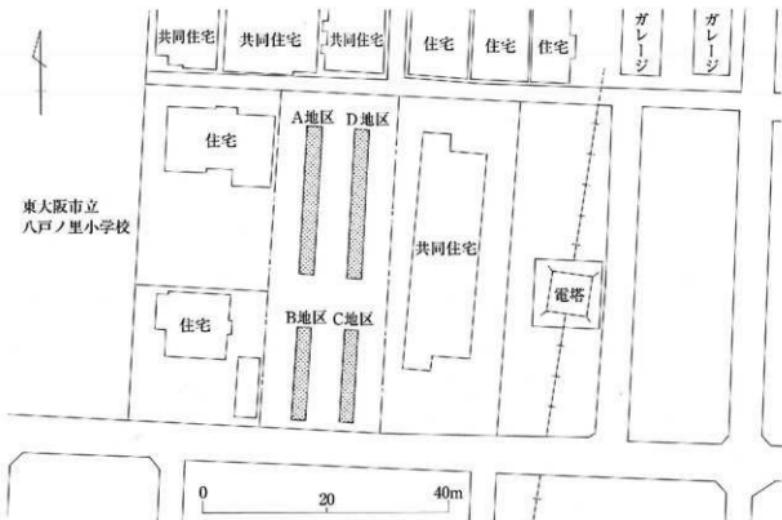
平成19年9月、東大阪市下小阪5丁目41-2番地において、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出された。当時、申請地の南東隅をかすめる形で遺跡のラインが走っており、建築物本体は遺跡の範囲外であった。同月19日に申請地北側(遺跡外)で調査を実施したところ、平安時代の遺物包含層を検出した。しかし調査箇所に制約があり、遺物包含層の面的な広がりなどは不明であった。このため協議を重ね、瓜生堂遺跡隣接地における埋蔵文化財の詳細なデータを得るために、再度試掘調査を実施することになった。調査は平成19年10月31日から翌11月15日まで行った。調査の結果、後述するように、平安時代の構造面が良好かつ濃密に遺存していたため、依頼者から法96条に基づく遺跡発見の届出書が提出された。平成20年1月22日、大阪府教育委員会から遺跡発見の通知書が送付され、調査地内外は周知の瓜生堂遺跡の範囲となった。今回はこの通知を受けて、本稿を瓜生堂遺跡第54次発掘調査として報告する。

#### 2)既往の調査成果と今回の調査方法

瓜生堂遺跡は河内湖南岸に営まれた弥生時代中期後半の拠点集落として学史上著名で、とくに広大な方形周溝墓は墳丘上の木棺墓、土器棺墓の配置状況から家族墓的な性格が考えられ、弥生時代を代



第1図 瓜生堂遺跡西部・貝竹遺跡と第54次調査地の位置



第2図 調査トレンチの位置と調査地周辺の状況

表する方形周溝墓として、中学校・高等学校の教科書にしばしば登場している。いっぽう、弥生時代遺構面の上層には、古墳時代～古代の遺構面が広く覆う箇所がある。遺物包含層だけでなくピット・井戸・土坑・溝など集落の居住域を示す遺構が集中するのは、遺跡西部・遺跡中央部・遺跡南東部・遺跡北東部の4箇所でまとまりが見られることは既に指摘されている。このうち、本調査にかかわる遺跡西部の様相を見てみたい。

第24次調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物5棟・井戸2基・焼土坑が検出された。とくに9世紀前半の井戸から銅鏡9枚・木製櫛が出土した。隣接する第32次調査でも同時期の溝・ピットが発見されている。第24次調査地の北約200mの地点にあたる第51次調査では飛鳥～奈良時代の土坑・溝・ピット・古墳時代後期初頭～中葉の溝・ピット・落ち込み、古墳時代中期末～後期初頭の土坑・溝・ピット・落ち込みが見つかっている。瓜生堂遺跡の西端から西へ約150mの箇所に呉竹遺跡が位置する。平成19年に発掘調査が行われ、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物2棟・溝・土坑・奈良～平安時代の土坑・溝が検出された。遺構の時期は瓜生堂遺跡とほぼ重なり、集落の営みに強い関連をもっていたことが想定される。

第54次調査地の調査トレンチと周辺の状況を第2図に示した。調査地は市立八戸ノ里小学校のすぐ東側に位置している。今回、幅2mの南北方向のトレンチを東側に2本、西側に2本の合計4本設定した。当初、計画した調査面積は158m<sup>2</sup>であった。盛土から遺物包含層の上面までを重機で除去、以下を人力で掘削し、遺構・遺物の検出につとめた。排水を場内に仮置きする関係で、調査の工程を二分し、西側トレンチから調査を開始した。調査の進行に併せて、便宜的に北西トレンチをA地区、南西トレンチをB地区、南東トレンチをC地区、北東トレンチをD地区とした。なおC地区で井戸を検出したため、依頼者と協議し、井戸の全形を調査するためC地区南側を一部西側へ拡張した。

### 3) 各地区的調査

A 地区から順に、各地区的層位と検出遺構について説明する。ただし、遺構検出は C 地区が先、A 地区が後になったため、遺構番号の順序が逆転している。了解いただきたい。

#### ① A 地区の調査(第3・4図)

今回の調査で最も遺構・遺物が集中して検出された地区である。確認した層位は次のとおりである。

第1層 旧耕土層である。土色・土質の違いから3層に区分できた。

第1A層 暗青灰色(10BG4/1)粗粒砂混じり粘土。

第1B層 暗緑灰色(5G4/1)粗粒砂混じりシルト。

第1C層 オリーブ灰色(5GY5/1)粗粒砂混じりシルト。

第2層 オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂混じりシルトを主体に暗青灰色(5BG4/1)シルトが小ブロック状に混入。第1層の下部に堆積する。上面は硬く床土層をなす。古墳～平安時代の土器を含む。

第2層の下部、第3層の上部に土質が近似した別のブロック上が堆積していた。これを第2'層とした。

第2'層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂主体に暗青灰色(5BG4/1)シルトが小ブロック状に混入。

第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細緻混じりシルト。平安時代の遺物を含む。断面観察に拠ったが、一部のピットは第3層上面を遺構面とすることが知られた。第3層の土質に近似する層が上下に認められた。これを第3'層、第3L層とした。いずれも A 地区の南側のみ認められた。

第3'層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細緻混じり粘土質シルト。

第3L層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混じり細粒砂。

第4層 褐色(7.5YR4/4)～オリーブ色(5Y5/6)粘土。上面は遺構面をなす。下部の第5層に貼り付くようにきわめて薄く堆積。古墳時代の須恵器を微量に含む。

第5層 上層は黄褐色(10YR5/6)中粒砂～細粒

第1表 A地区ピット一覧表

遺構番号	平面形態	規模(cm)			埋上	出土遺物
		長径	短径	深さ		
SP8	円形	20+	14+	7	A	須
SP9	椭円形	51+	14+	7	A	師
SP10	円形	49	45	18	A	師
SP11	円形	35	30+	11	A	師
SP12	円形	43	19+	12	A	簡・須
SP13	円形	34	34	18	A	師
SP14	方形	69+	60	18	B	師
SP15	円形	43	29	10	A	(なし)
SP16	円形	23	21	6	B	(なし)
SP17	円形	33	30	5	B	(なし)
SP18	椭円形	85+	26+	9	B	師
SP19	円形	31	31	6	B	簡
SP20	円形	38	36	8	B	(なし)
SP21	方形	39+	13+	7	B	(なし)
SP22	円形	20	11+	5	A	(なし)
SP23	円形	53	45+	8	B	(なし)
SP24	円形	54	41+	9	B	須
SP25	長橿円形	85+	56	20	A	師・須
SP26	椭円形	76	56	9	B	(なし)
SP27	円形	35+	13+	6	C	(なし)
SP28	椭円形	59+	53	10	A	(なし)
SP29	椭円形	43+	34	12	A	(なし)
SP30	円形	59	56	9	C	(なし)
SP31	椭円形	40+	11+	6	A	(なし)

(規模) +はその数値以上を示す。

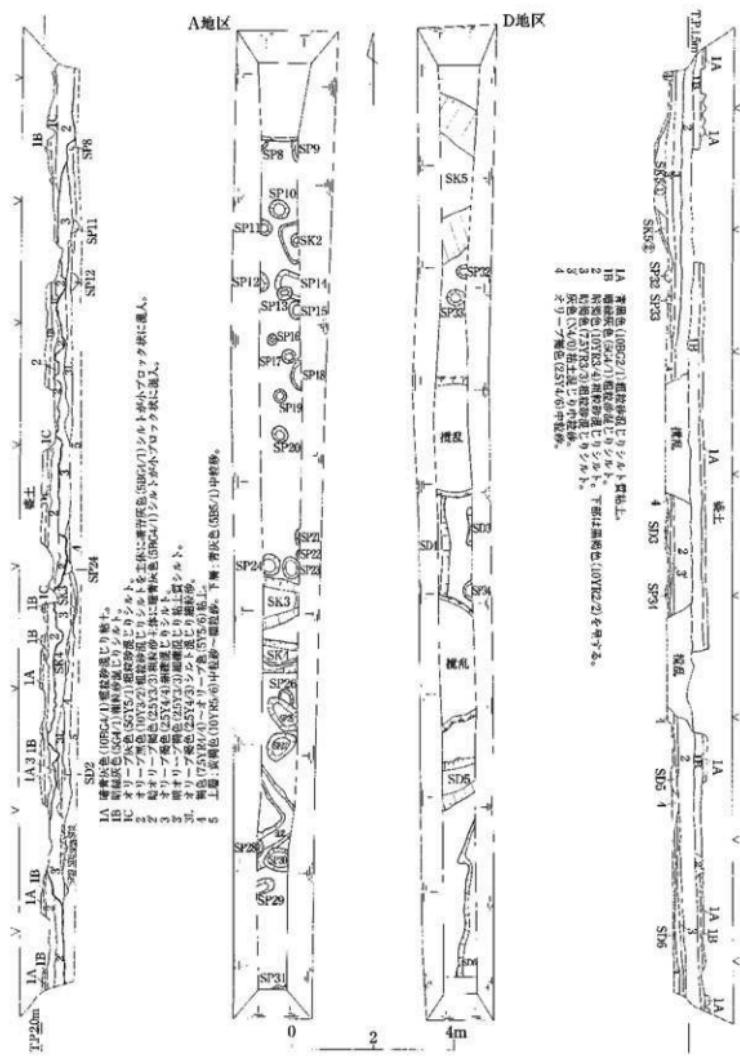
(埋土) A: 暗灰褐色(N3/0)粘土質シルト

B: 灰色(10Y4/1)粘土混じり粗粒砂

C: 青褐色(5B5/1)粘土

ピットは24個検出した。ピットの規模や埋土、

(出土遺物) 師は土師器、須は須恵器を示す。



第3図 A地区・D地区 遺構平面図・断面図

出土遺物については第1表にまとめた。ピットの埋土と切り合い関係を図示したのが第4図である。切り合い関係では暗灰色(N3/0)粘土質シルト[A]を埋土とするピットは、灰色(10Y4/1)粘土混じり粗粒砂[B]を埋土とするピットに全て後出しており、埋土の相違により時期差があることがわかる。いっぽう、ピット内の出土遺物はわずかであるため詳細な時期決定は不明だが、埋土AをもつSP25、BをもつSP24とも奈良時代～平安時代初頭の土器を含んでおり、少なくとも出土遺物の上から、埋土の相違による時期差が小さいことが知られた。これらのことと総合すると、埋土A・埋土Bのピットとも当該期に造られたものと判断できる。

今回、掘立柱建物の認定には至らなかつたが、中央のSP20からSP21までと南端のSP29からSP31までは各約2m隔たつておらず、位置関係から3グループに区分できる。これをピットのまとまりとみれば、これらのまとまりの中に掘立柱建物が存在する可能性が指摘できる。

土坑は3基検出した。SK2は方形を呈し、長径1.00m 短径0.49m以上、深さ0.18mを測る。土坑の中央部でピット状の凹みがある。埋土は暗灰色(N3/0)粘土質シルト[A]である。土師器が出土した。SK3は不定円形を呈すると思われる。長径1.27m 短径0.84m以上、深さ0.23mを測る。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫混じりシルトである。土師器・須恵器が出土した。SK4は方形を呈すると思われる。長径0.79m以上、短径0.73m、深さ0.17mを測る。土坑の南側が凹む。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)粘土混じりシルトである。土師器が出土した。

A地区の南側で、L字状に屈曲する溝SD2を検出した。断面は浅い皿状を呈する。幅0.42m 深さ0.04mを測る。土師器・須恵器が出土した。

## ② B地区の調査(第5図)

確認した層位は次のとおりである。

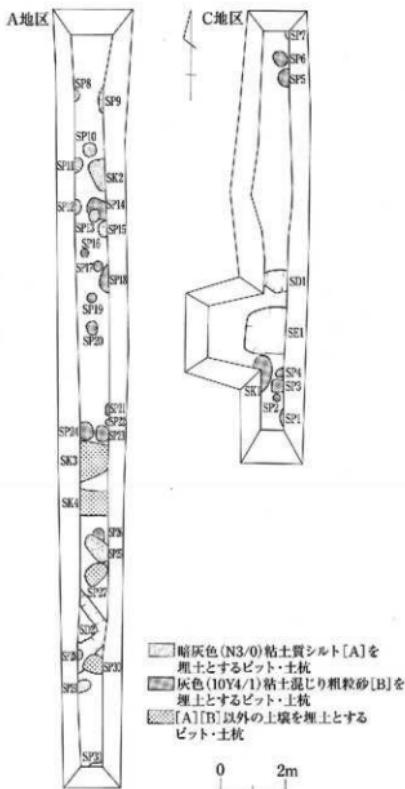
第1層 旧耕土層である。土色・土質の違いから6層に区分できた。

第1A層 緑黒色(10GY2/1)粗粒砂混じりシルト。

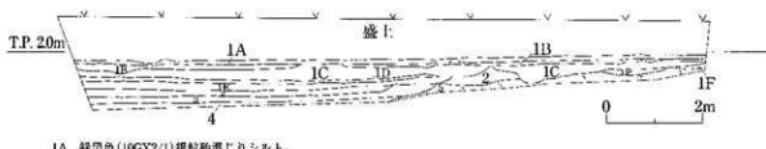
第1B層 暗緑灰色(7.5GY4/1)細礫混じりシルト。

第1C層 暗緑灰色(10GY3/1)シルト混じり細礫。

第1D層 暗緑灰色(7.5GY4/1)中粒砂混じりシルト質粘土。



第4図 A地区・C地区ピット・土坑の埋土の分布



- 1A 緑黒色(10GY2/1)粗粒砂混じりシルト。  
 1B 暗緑灰色(10GY4/1)細粒砂混じりシルト。  
 1C 暗緑灰色(10GY3/1)シルト混じり細粒。  
 1D 暗緑灰色(7GY4/1)中粒砂混じりシルト質粘土。  
 1E 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂混じりシルト質細粒砂。  
 1F 暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂混じり細粒。  
 2 暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂とオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトの混合土。  
 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを主体に暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂が少量混じる。  
 4 暗緑灰色(5G4/1)粘土。  
 5 黄褐色(10YR5/6)～灰白色(10YR7/1)中粒砂～粗粒砂。

第5図 B地区断面図

- 第1E層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂混じりシルト質細粒砂。  
 第1F層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂混じり細粒。  
 第2層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂とオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトの混合土。整地層である。瓦質土器の小片を含む。  
 第3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを主体に暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂が少量混じる。整地層である。  
 第4層 暗緑灰色(5G4/1)粘土。  
 第5層 黄褐色(10YR5/6)～灰白色(10YR7/1)中粒砂～粗粒砂。

A地区層位と比較すると、B地区第5層とA地区第5層、B地区第1層各層とA地区第1層各層に相当するのは明白であるが、そのほかの対応関係は不明である。第5層はB地区の北端から南側へ約0.7m傾斜し、その傾斜面に第4層から第2層が重なっている。第1層が6層に区分できたことから、B地区周辺では断続的に耕作が行われたことがわかる。耕作面を平坦にする必要があったために第5層の傾斜面を整地したことが考えられる。遺物は第2層から微量出土したのみであり、傾斜面以外の遺構は確認されなかった。

### ③ C地区的調査(第6図)

A地区と同様に、第5層上面でビット7個・土坑1基・井戸1基・溝1条を検出した。まず確認した層位は次のとおりである。

第1層 旧耕土層である。土色・土質の違いから4層に区分できた。

- 第1A層 青黒色(10BG2/1)粗粒砂混じりシルト質粘土。  
 第1B層 暗緑灰色(5G4/1)粗粒砂混じりシルト。  
 第1C層 緑灰色(5G5/1)細粒砂混じりシルト。  
 第1D層 緑灰色(5G5/1)細粒砂混じりシルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混じりシルトの混合土。  
 第2層 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂混じりシルト。下部は黒褐色(10YR2/2)を呈する。

第3層 暗褐色(7.5YR3/3)粗粒砂混じりシルト。平安時代遺物包含層。C地区的北側では第3層の下部に土質が近似する層が堆積していた。これを第3'層とした。

- 第3'層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混じりシルト。  
 第4層 褐色(7.5YR4/4)～オリーブ褐色(5Y5/6)粘土。中央部の一部にのみ遺存。  
 第5層 黄褐色(10YR5/6)中粒砂～細粒砂。

第1層と第2層は後述するD地区の層位に近似する。第3層・第4層・第5層はそれぞれA地区の各層に相当する。C地区の中央に巨大な擾乱があり、A地区のような島畠状耕作地の痕跡は見出せなかった。

平面・断面ともに第4層を上面とする遺構は見られなかつたが、部分的に第4層が遺存していることから、遺構面はA地区と同様と考えられる。遺構面のレベルは、北端 T.P.1.30m、南端 T.P.1.00m で0.3m の傾斜面をもつ。

ピットは7個検出した(第2表)。埋土 A をもつピットは SP7のみで、他は埋土 B であった。A地区で埋土 B をもつピットが南よりで見つかったことと符合すると思われる。

土坑 SK1はC地区の南側で検出。平面形は梢円形を呈する。長径1.12m、短径0.59m、深さ0.14mを測る。埋土は灰色(10Y4/1)粘土混じり粗粒砂である。遺物は出土しなかつた。

井戸 SE1はSK1のすぐ北側で検出。掘形の平面形は隅丸方形を呈する。掘形の規模は、東西1.24m、南北1.44mで、井戸検出面から井筒底面までの深さは0.67mを測る。井筒は上部が方形の枠組、下部が曲物を用いている。井筒検出面から底面まで約0.3mを測るため、井戸枠はさらに1段分組まれていた可能性がある。井筒の平面形は整った方形を呈し、規模は東西0.79m、南北0.71mを測る。井筒の埋土は2層に区分され、①層は褐色(7.5YR4/4)～オリーブ色(5Y5/6)粘土に暗灰色(N3/0)シルト質粘土が混じる層であった。土師器・須恵器が出土した。

溝SD1は中央で検出。断面浅い皿状を呈する。トレーン幅の制約があり、検出が溝の一部にとどまつたため、流向はわからない。最大幅0.73m、深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)粘土混じりシルトであった。土師器・須恵器が出土した。

第2表 C地区・D地区ピット一覧表

遺構番号	地区	平面形態	長径	短径	規模(cm)	埋土	出土遺物
SP1	C地区	梢円形	52+	11+	10	B	師
SP2	C地区	円形	24	24	4	B	(なし)
SP3	C地区	方形	40	37+	10	B	(なし)
SP4	C地区	円形	32	30+	8	B	(なし)
SP5	C地区	円形	58	30+	29	B	師
SP6	C地区	円形	50	48	10	B	師
SP7	C地区	円形	20+	11+	25	A	(なし)
SP32	D地区	円形	33	22+	13	D	(なし)
SP33	D地区	円形	45+	38	12	D	(なし)
SP34	D地区	円形	44	21+	6	D	(なし)

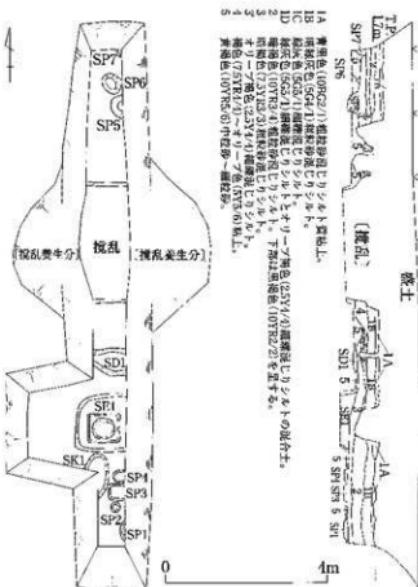
(規模) はその数値以上を示す。

(埋土) A: 暗灰色(N3/0)粘土質シルト

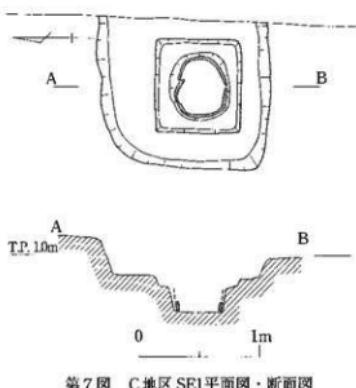
B: 灰色(10Y4/1)粘土混じり粗粒砂

D: オリーブ褐色(25Y4/6)や粗砂に灰色(N4/0)粘土が  
ブロック状侵入

(出土遺物) 師は土師器、須は須恵器を示す。



第6図 C地区平面・断面図



第7図 C地区 SE1平面図・断面図

ト。第3層の下部に土質が近似する層が堆積していた。これを第3'層とした。

第3'層 灰色(N4/0)粘土混じり中粒砂。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂。

第1層・第2層はC地区と同質ないし近似する。D地区の第4層は、A地区・C地区の第5層に相当すると思われるが、締まりがなくやや粒径も大きい。造構面のレベルは、北端T.P.1.10m、南端T.P.1.20mではほぼ平坦だが、西側のA地区と比べて約0.2m低い。A地区とC地区を結ぶラインに高まりがあり、これより東側は傾斜面をもつことがわかる。

ピットは3個検出した。いずれも埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂に灰色(N4/0)粘土がブロック状に混入する層で、A地区・C地区的ピットの埋土と大きく相違する。また、造構の断面ラインはピットの肩から直に落ちず、緩やかな傾斜であることから、D地区的ピットは柱穴とは考えがたい。

土坑SK5は北側で検出した。平面形は円形を呈するものと考えられる。土坑の南北方向で最大約4.2mの規模をもつ。大型の土坑である。大きさからみて井戸とも考えられるが、後述の事情で掘削を中断したため、現状では土坑としておく。造構面となる第4層の上位が湧水点になり、D地区壁面の崩落が予想されたため、検出面から深さ0.52mまで確認し、以下の掘削は断念した。埋土は2層に区分される。①層はオリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土混じり細粒砂である。②層はオリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂を主体に少量のオリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土混じり細粒砂が混じる層である。土師器・須恵器が出土した。

溝は4条検出した。いずれも埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂に灰色(N4/0)粘土がブロック状に混入する層である。またSD6の平面形状にみられるように、人為的な溝ではなく、面の底部に流れた自然流路と考えられる。SD3はごく一部のラインを検出したのみであるが、すぐ西側のSD4と同様の落ちが見られることから、溝と判断した。SD3・SD4とも断面形は浅い皿状を呈する。SD3の深さは0.08m、SD4の深さは0.05mを測る。SD3から土師器・須恵器が、SD4から土師器・須恵器・瓦器が出土した。SD5は、断面形が鎌鉢形を呈する。最大幅1.03mを測る。SD3・SD4よりも深く0.13mの規模をもつ。溝底面は平坦である。遺物は出土しなかった。SD6は南側で検出したもので、断面形は浅い皿状を呈する。現状で幅0.49m、深さ0.12mを測る。溝底面のレベル差から、北から南へ流下したものである。遺物は出土しなかった。

#### ④ D地区の調査(第3図)

D地区では、第4層上面でピット3個・土坑1基・溝4条を検出した。後述のように、造構面の状況はA地区・C地区と比べて大きく異なる。確認した層位は次のとおりである。

第1層 旧耕土層である。土色・土質の違いから2層に区分できた。

第1A層 青黒色(10BG2/1)粗粒砂混じりシルト質粘土。

第1B層 暗緑灰色(5G4/1)粗粒砂混じりシルト。

第2層 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂混じりシルト。下部は黒褐色(10YR2/2)を呈する。

第3層 暗褐色(7.5YR3/3)粗粒砂混じりシルト。

#### 4) 出上遺物

古墳時代～中世期の遺物が遺構および遺物包含層から出土した。奈良～平安時代の遺物が多い。各層位および遺構ごとに分けて説明を記す。文章の末尾に時期を記していない資料は奈良～平安時代初めのものである。後述する C・D 地区も同様である。

##### ① A 地区出土遺物（第 8～11 図 1～76）

第 4 層（第 8 図 1・2）須恵器と土師器がある。

1 は須恵器の杯である。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。ハの字状に高く高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。

2 は土師器の壺である。体部は内傾して立ち上がる。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁端部に青海波の当て具痕が残る。古墳時代。

第 3 層（第 8～11 図 3～68）土製品、土師器、須恵器、陶器、製壺土器がある。

3 は土鉢である。片端を欠く。中央に孔を穿つ。中世期。

4～51 は土師器である。高杯・杯・椀・皿・鉢・甕・壺・羽釜の器種がある。

4 は高杯である。柱状部から裾部が残る。裾部はゆるやかに立ち上がり、裾端部は丸く終わる。外表面はナデ調整する。柱状部内面に指頭圧痕が残る。飛鳥時代。

5～18 は杯である。体部が内湾気味に立ち上がるものがほとんどである。外表面はナデ調整する。口縁端部を内側へ巻き込むものと丸く終わるものがある。5・7～12・18 は口縁部がゆるく外反する。6 は体部が外上方へ伸び、口縁部はゆるく外反する。

19～23 は椀である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部が丸く終わるものと内側へ巻き込むものがある。19・23 は体部外面に指頭圧痕が残る。20～22 は外表面をナデ調整する。

24～29 は皿である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側へ巻き込む。口縁部がゆるく外反するものと直立するものがある。25 は内面に放射状の暗文を施す。体部外面の下半はハラケズリ調整する。その他は内外面をナデ調整する。

30～33 は鉢である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部が丸く終わるものと面を持つものがある。31・33 は口縁部が外反する。30 は体部外面をハラケズリ調整する。32 は体部外面に指頭圧痕が残る。31 は外表面をナデ調整する。33 は口縁部を外へ折り曲げた片口状の注口を持つ。内外面はナデ調整する。片口の下部に指頭圧痕が残る。

34～44 は甕である。口縁部は外反する。体部が張るものと張りの小さいものがある。34～38 は頸部と体部の境に稜が付く。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。39～44 は口縁端部を上方へ摘み上げる。体部内面はナデ調整、外面はハケメ調整する。41・44 は口縁部内面をハケメ調整する。44 は体部外面に三角形状の把手が付く。

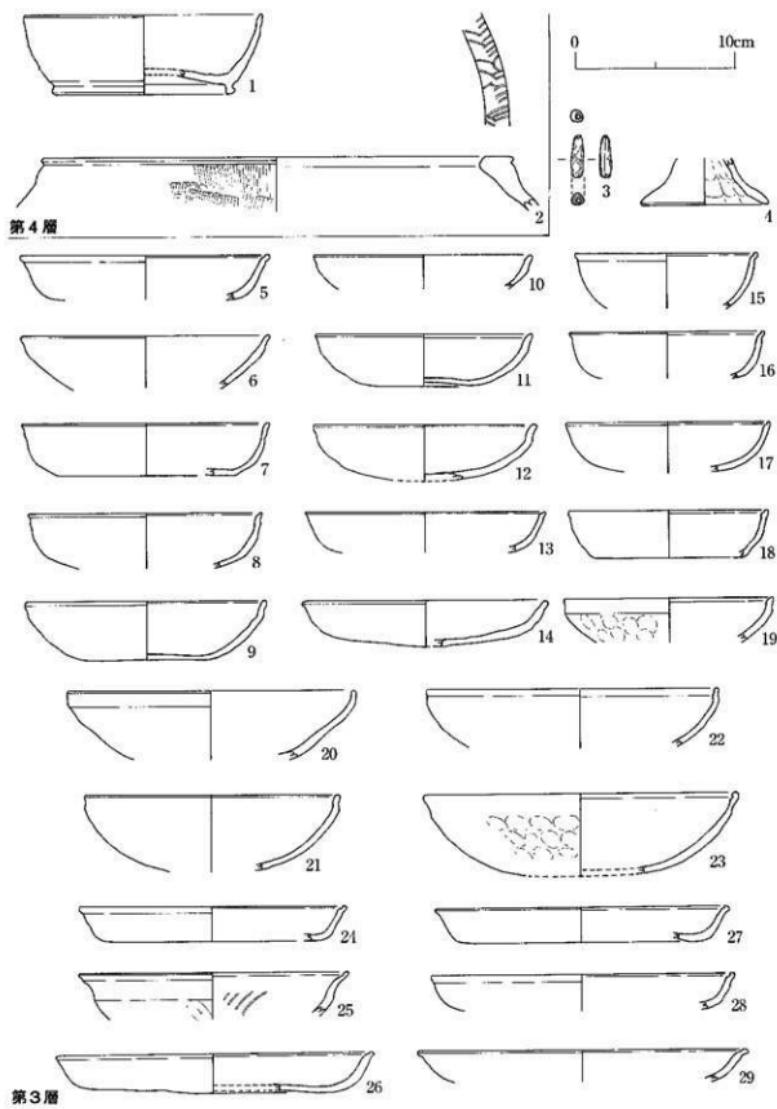
45 は壺の底である。外表面はナデ調整する。内面は被熱によりやや黒ずんでいる。

46～51 は羽釜である。長胴の羽釜である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。鶴は水平方向へ近づく。46・47 は外表面をナデ調整する。48 は体部内面に指頭圧痕が残る。49 は体部外面をハケメ調整する。内面に指頭圧痕が残る。50・51 は内面をハケメ調整する。

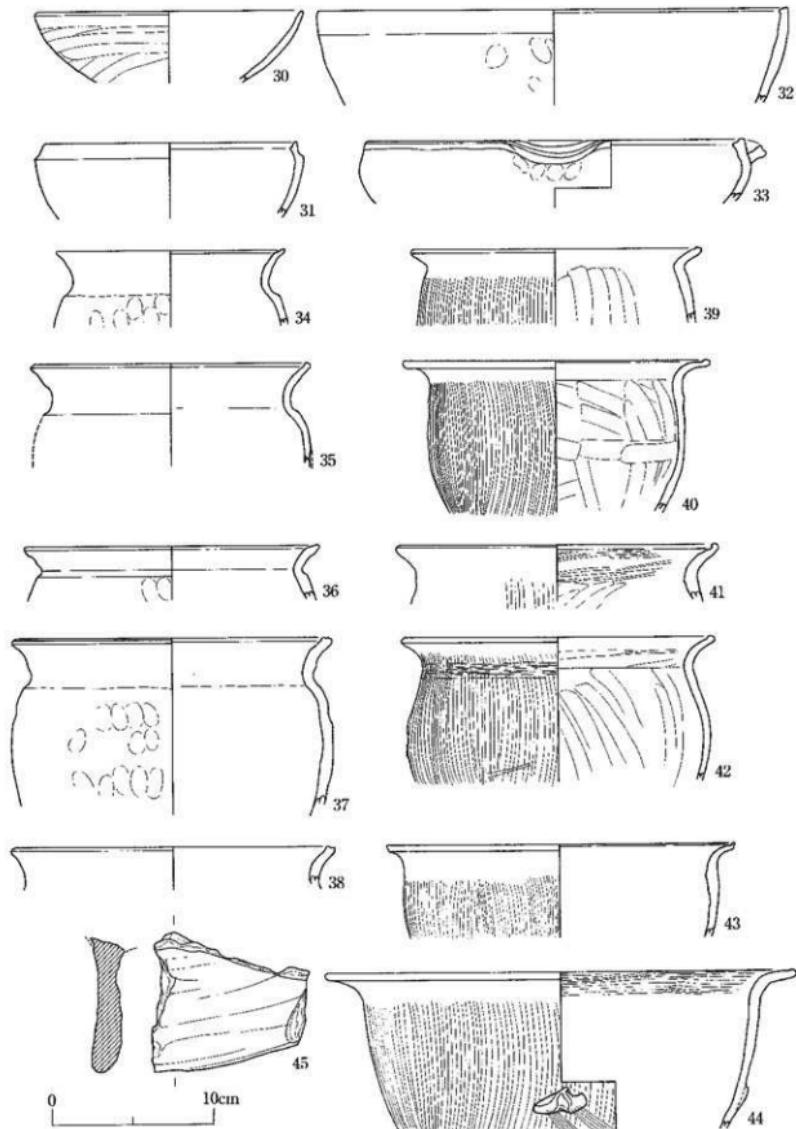
52～58 は須恵器である。底部・杯・壺・蓋杯・壺の器種がある。

52 は底部である。底部は平底を呈し、やや内傾する高台が付く。外表面は回転ナデ調整する。

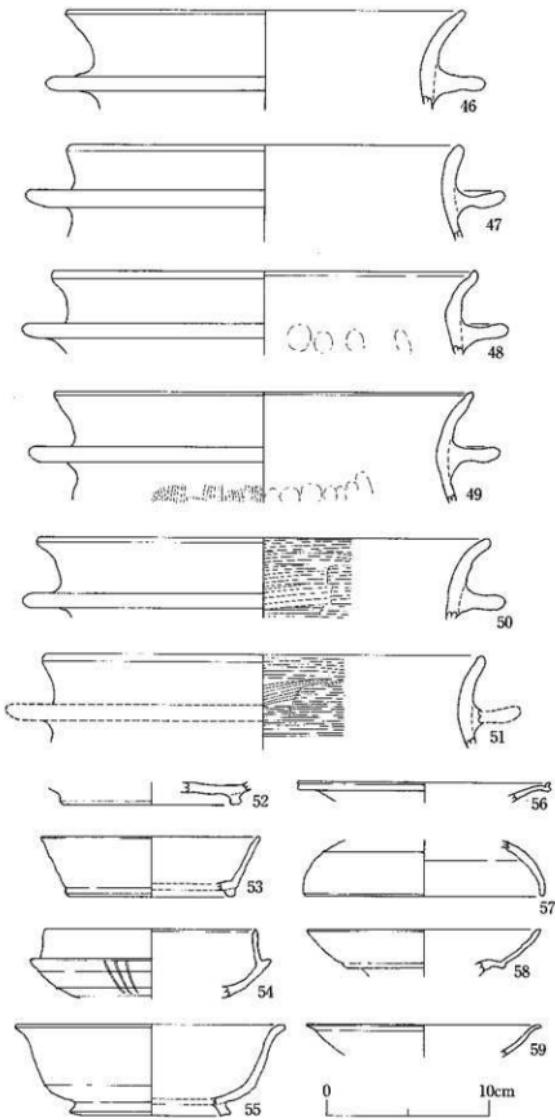
53～55 は杯である。53 は平底で蒲鉾状の高台が付く。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外表面は回転ナデ調整する。54 は体部がやや内傾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はやや外反して伸び、口縁端部に浅い沈線をめぐらす。体部下半は回転ハラケズ



第8図 A地区第3層・第4層出土遺物実測図



第9图 A地区第3层出土物实测图



第10図 A地区第3層出土遺物実測図

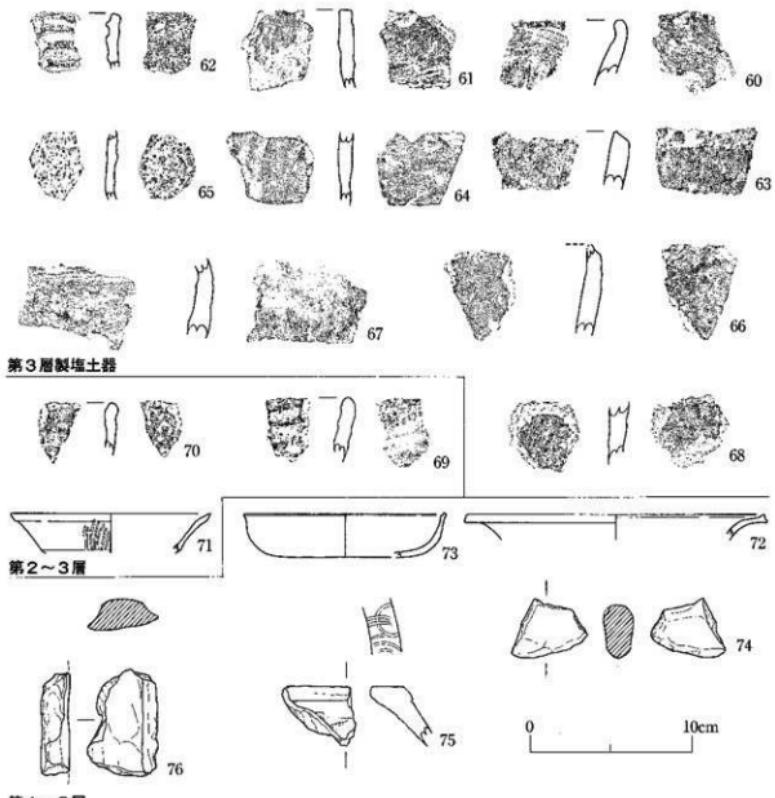
り調整、他は回転ナデ調整する。体部外面に3条のヘラ記号がある。古墳時代。55は平底でハの字状に開く高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

56は壺である。口縁部は大きく外方へ伸び、口縁端部は上方へ摘み上げる。内外面は回転ナデ調整する。

57は蓋杯である。口縁部と天井部の境が不明瞭である。天井部は丸く、口縁部はやや内傾する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

58は甌である。口類部は大きく外反した後、外上方へやや内傾しながら立ち上がる。口縁部と口類部の境に段がつく。口縁端部はやや尖り気味に終わる。外面は回転ナデ調整する。内面は降灰による自然釉が付着しており、調整法は不明である。飛鳥～奈良時代。

59は陶器である。体部は大きく外上方へ立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部はやや尖り気味に終わる。内面に自然釉が疎らに残る。いわゆる



第11図 A地区第3層、第2～3層、第1～2層出土遺物実測図

山茶椀である。中世期。

60～67は製塩土器である。外面はナデ調整する。内面はナデ調整するものと布压痕が残るものがある。61・62・64・65は薄手であり、他は厚手である。65は二次焼成により調整法は不明である。66は須恵質、他は土師質である。

第2～3層（第11図 69～71） 製塩土器と須恵器がある。

68～70は製塩土器である。口縁部は外傾し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。

71は須恵器の邊である。口縁部が大きく外上方へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁

部外面に縦方向の櫛描沈線を施す。内外面は回転ナデ調整する。占墳時代。

第1～2層（第11図 72～76）須恵器と土師器がある。

72は須恵器の壺である。口縁部が大きく外方へ伸び、口縁端部は上方へ摘み上げる。内外面は回転ナデ調整する。

73～76は土師器である。杯・把手・壺の器種がある。

73は杯である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外側へ肥厚する。内外面はナデ調整する。

74は把手である。短い牛角状を呈する。端部は外上方へ立ち上がる。表面はナデ調整する。

75～76は壺である。75は口縁部である。体部は内傾して立ち上がる。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁端部に青海波の当て其痕が残る。占墳時代。76は炊き口の側縁部である。剥落しているため内面部分のみが残る。表面はナデ調整する。

② C地区出土遺物（第12・13図 77～102）

SE1（第12図 77～86）

77～86は土師器である。椀・壺・高杯・羽釜の器種がある。

77～79・81～83は椀である。体部が内湾気味に立ち上がるるもの、外上方へ大きく立ち上がるもの、内湾気味に立ち上がり口縁部が外反するものがある。底部は丸底に近い平底を呈する。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整する。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。77は掘形内、78・79は非筒内、81～83は非戸埋上内より出土した。

80は壺である。体部は大きく張る。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。口縁部外面はヨコナデ調整する。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。井筒内より出土した。

84は高杯である。柱状部から裾部が残る。裾部はゆるやかに立ち上がり、裾端部はやや尖り気味に終わる。外面はナデ調整する。柱状部内面にしづり痕跡が残る。戸埋土内より出土した。

85・86は長胴の羽釜である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。鋤は水平方向へ延びる。外面はナデ調整する。井戸埋土内より出土した。

第3層（第12図 87～94）

87～94は土師器である。底部・椀・壺・壺の器種がある。

87は底部である。断面三角形の高台が付く。外面は摩滅が著しく、調整法は不明である。

88～90は椀である。体部が外上方へ大きく立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部内面をナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。89は口縁部が外反する。

91～93は壺である。体部が大きく張るものとあまり張らないものがある。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。91は頸部と体部の境に稜が付く。93は口縁端部に1条の沈線を施す。

94は壺である。炊き口の側縁部である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

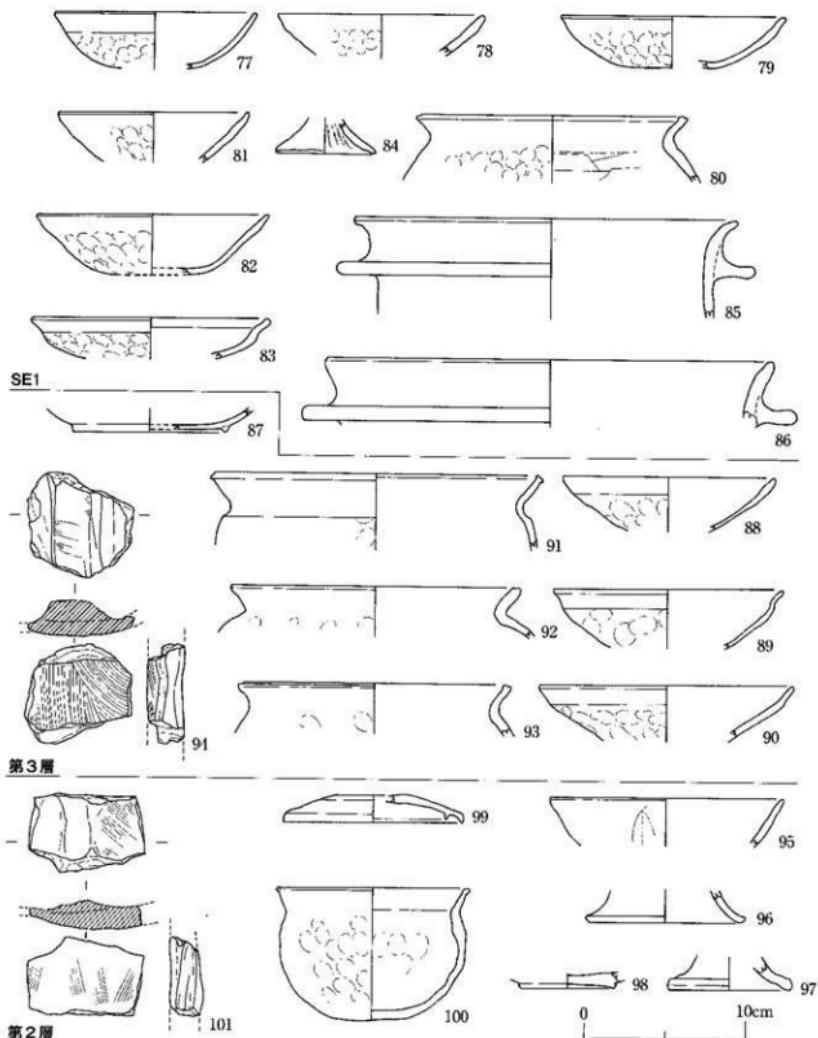
第2層（第12・13図 95～102）磁器、須恵器、陶器、土師器がある。

95は青磁の椀である。体部は外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。外面に鎬蓮弁文を施す。内外面に施釉する。釉薬の色調は浅黄色を呈する。室町時代。

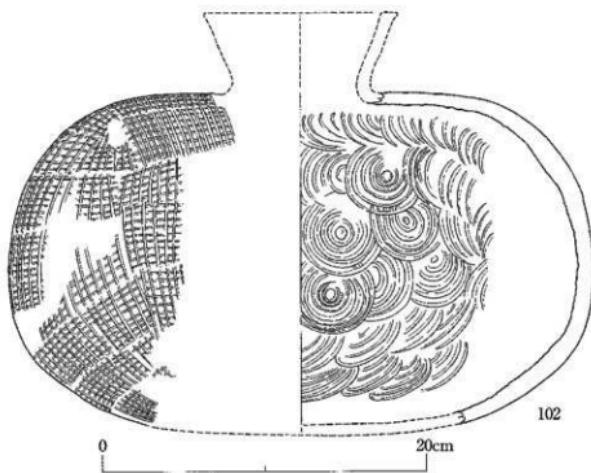
96・97・99・102は須恵器である。脚部・蓋杯・横瓶の器種がある。

96・97は脚部である。裾部がゆるやかに立ち上がる。96の裾端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

99は蓋杯である。天井部が浅く、口縁端部は丸く終わる。内面に内傾するかえりを持つ。内外面は回転ナデ調整する。飛鳥～奈良時代。



第12図 C地区 SEI、第2・3層出土遺物実測図



第13図 C地区第2層出土物実測図

102は横瓶である。横長で俵形を呈する。最大径が体部中心にある。体部外面は格子タタキを施し、内面に青海波の當て具板が残る。

98は縄釉陶器の底部である。底面はやや凹む平底である。全面に施釉する。釉薬の色調はオリーブ色を呈する。平安時代。

100・101は土師器である。壺・竈の器種がある。

100は壺である。体部は大きく張り、口縁部は外反する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。101は竈である。炊き口の側縁部である。外面はハケメ調整する。内面はハケメの後ナデ調整する。

### ③ D地区出土遺物（第14・15図 103～145）

SK5（第14図 103～114）上師器と須恵器がある。

103～111・113・114は土師器である。杯・高杯・椀・ミニチュア壺・竈・把手の器種がある。

103～105は杯である。103は体部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は外側へ肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。104は体部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。内面に放射状の暗文を施す。105は外上方へ大きく立ち上がり、口縁端部は内側へ肥厚する。体部内面に二段の放射状暗文を施す。体部外面はヘラミガキ調整する。

106は高杯である。裾部はゆるやかに立ち上がり、裾端部はやや尖り気味に終わる。外面はナデ調整する。柱状部内面にしばり痕跡が残る。

107・108・110は椀である。107は外上方へ大きく立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。108は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面に放射状

の暗文を施す。110は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面に放射状の暗文を施す。外面に指頭圧痕が残る。

109はミニチュアの壺である。口縁部は強く外反する。頸部と体部の境にゆるい稜が付く。内外面はナデ調整する。

111・113は壺の底部である。柄端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

114は把手である。扁平な短い舌状を呈する。表面はナデ調整する。

112は須恵器の平瓶である。口縁部は中心軸からずらして付けられ、やや外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

第3層（第14・15図 115～139）土師器、須恵器、瓦器、磁器がある。

115～119・121は土師器である。杯・椀・壺の器種がある。

115・117は杯である。115は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。口縁端部は丸く終わる。摩滅が著しく調整法は不明である。117は体部がやや内傾して立ち上がり、口縁端部はわずかに内側へ肥厚する。内面はナデ調整する。外面は摩滅のため調整法は不明である。

116は椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。

118・119・121は壺である。118は庄内期の壺である。口縁部が二重口縁を呈する吉備系の壺である。体部内面はヘラケズリ調整し、器壁を薄く仕上げる。口縁外面に櫛描の振凹線文を施す。119は体部の張りが少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部を上方へ摘み上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整する。121は体部が大きく張り、口縁部は外反する。口縁端部は面を持ち、1条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデ調整する。口縁部と体部の境に稜が付く。体部内面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。

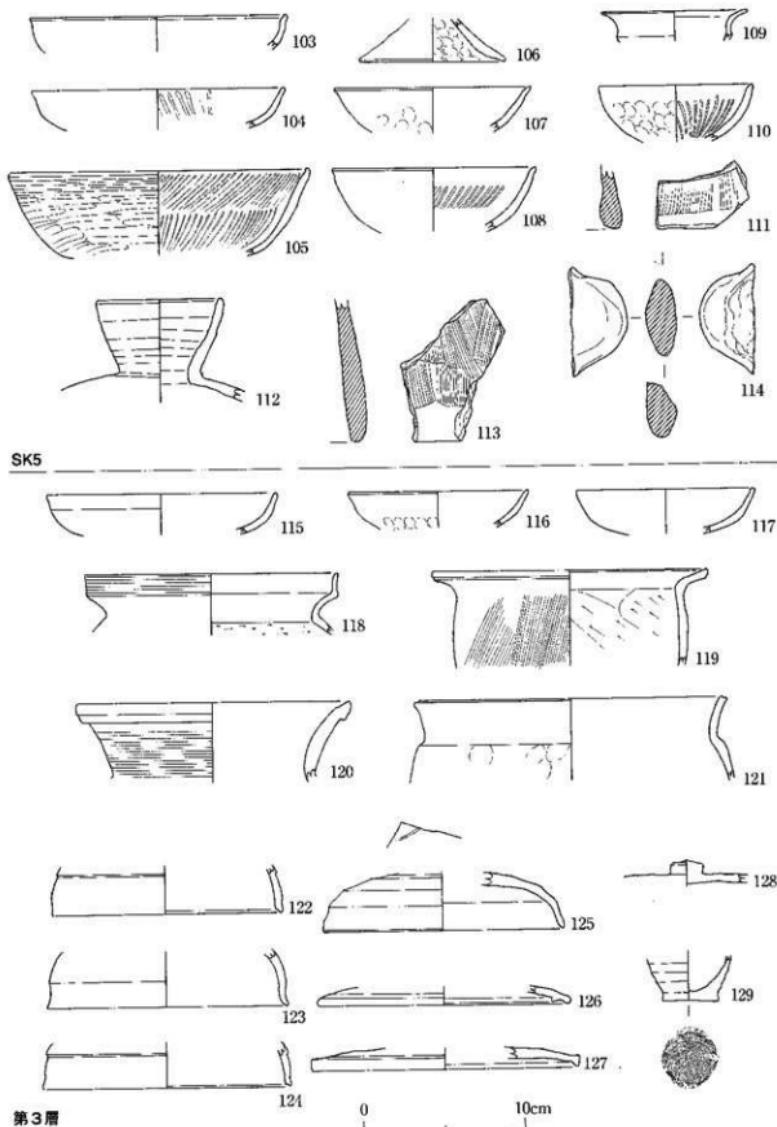
120・122～132は須恵器である。甕・蓋杯・壺・杯の器種がある。

120は壺である。口縁部は強く外反し、口縁端部は面を持つ。口縁部外面は回転ナデの後カキメ調整する。内面は回転ナデ調整する。飛鳥～奈良時代。122～128は蓋杯である。122・124は口縁部と天井部の境に明確な稜が付き、口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。123・125は口縁部と天井部の境が不明瞭である。123は天井部が丸く、口縁部は外反する。内外面は回転ナデ調整する。125は天井部がやや平らで、口縁部はやや内湾する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。外面は降灰による自然釉が残る。天井部に1条のヘラ記号が残る。126は天井部が浅い。口縁端部は丸く終わる。内面に内傾するかえりを持つ。内外面は回転ナデ調整する。127は天井部が平らな面を持つ。口縁端部は外下方へ摘み、段をなす。内外面は回転ナデ調整する。128は円形の摘みが付く天井部である。内外面は回転ナデ調整する。122～124は古墳時代、126は飛鳥～奈良時代。

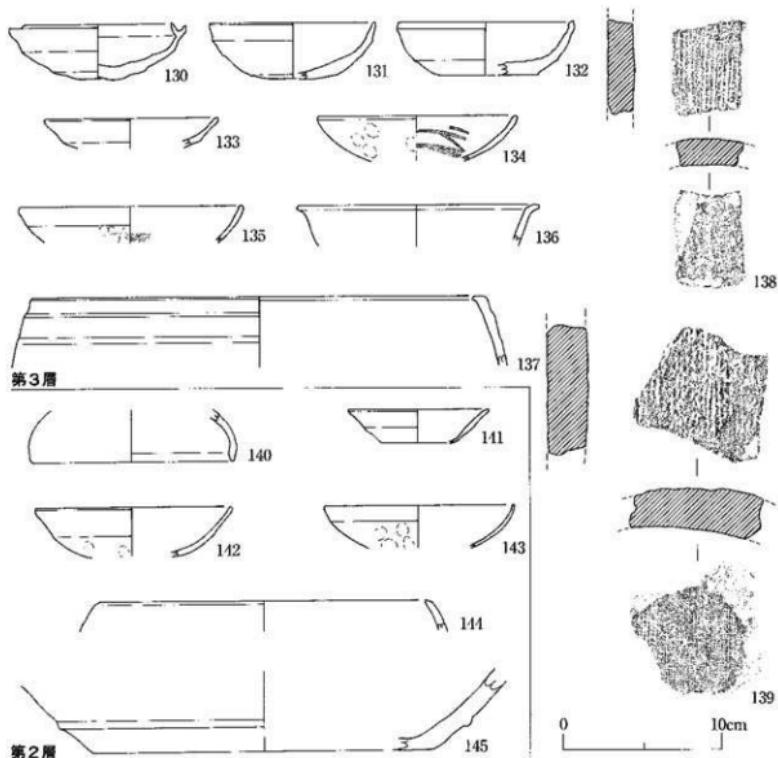
129は小形の壺である。底面に糸切痕が残る。内外面は回転ナデ調整する。いわゆる瓶子である。平安時代。

130～132は杯である。受部を持つものと持たないものがある。130は丸底を呈する。体部は内傾して伸びた後、外反する。受部は上方へ立ち上がる。立ち上がり部は外反し、短い。端部は尖り気味に終わる。内面は回転ナデ調整する。外面は降灰による自然釉が付着しており、調整法は不明である。131は丸みを帯びた平底を呈する。体部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。132は平底を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁端部はやや尖り気味に終わる。130は飛鳥時代、131・132は飛鳥～奈良時代。

133～135・137は瓦器である。



第14図 D地区 SK5、第3層出土遺物実測図



第15図 D地区第2・3層出土遺物実測図

133～135は椀である。133は体部が浅く、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。134・135は体部がやや浅く、口縁部がやや内傾する。口縁端部は丸く終わる。内面はナデ調整の後、螺旋状の暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。鎌倉時代。

137は羽釜である。口縁部は内傾する。口縁端部は面を持つ。口縁部外面に2条のゆるい段が付く。室町時代。

136は青磁の椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部は強く外反する。全面に施釉する。釉薬の色調は明緑灰色を呈する。室町時代。

138・139は平瓦である。凸面は繩目のタタキ調整する。凹面に布圧痕が残る。

第2層（第15図 140～145）須恵器、土器、瓦器がある。

140・144は須恵器である。蓋杯・鉢の器種がある。

140は蓋杯である。口縁部と天井部の境が不明瞭である。天井部は丸い。口縁部はやや内傾し、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

144は鉢である。口縁部は内傾する。口縁端部は尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

141は土師器の小皿である。体部は外上方へ大きく立ち上がる。口縁部はやや尖り気味に終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。室町時代。

142・143・145は瓦器である。椀・火舍の器種がある。

142・143は椀である。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内面はナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。鎌倉時代。

145は火舍である。底部は平底を呈し、体部は外上方へ立ち上がる。底部直上に1条の凸帯が付く。内外面はナデ調整する。室町時代。

## 5)まとめ

今回の調査ではA地区を中心に奈良～平安時代のピット・土坑・溝・井戸などが検出され、同期の土師器・須恵器・製塙土器・瓦など多彩な遺物が出土した。調査成果を列挙しまとめにかえたい。

瓜生堂遺跡での奈良～平安時代集落は、遺跡範囲からみて、遺跡の北東部・中央北部・西部に遺構のまとまりが見られることが指摘されている<sup>(註)</sup>(大阪府文化財センター 2004)。このうち西部では、掘立柱建物5棟以上・井戸2基・焼土坑を検出した第24次調査以外はその様相は不明であった。第54次調査地の西約150mに所在する吳竹遺跡では、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物2棟・溝・土坑、奈良～平安時代の土坑・溝が確認されている。第1章の記述と併せて考えると、東西約300m、南北約120mの範囲に同期の遺構面が広がる可能性がある。第54次調査地では、北西から南東のラインに高まりがあり、このラインではベース層が細粒砂層であり遺構の形成に適っていた。高まりのライン背面にあたるD地区はA地区より一段低く、自然流路が重なって流下していたようである。

次に、出土遺物の所属時期について考えてみたい。A地区では第3層から多量の遺物が出土した。土師器杯・皿(第8図5～29)は体部内面のヘラミガキの喪失、口縁端部の形状から、一部平城宮V期(以下「平城V」と略記)のものがあるが概ね長岡京期(平城VI・平安京I期古)に併行する時期と見られる。この年代観は土師器甕(第9図34～44)の所属時期とも矛盾しない。胴部より口縁部径が大きい43・44はその典型である。第4層出土上器(第8図1・2)は奈良時代ないし以前であることから、A地区的遺構はほぼ長岡京期におさまると考えられる。したがって作出した製塙土器(第11図60～68)のうち粗製厚手のタイプは同期の所産である。C地区のSE1出土土器では土師器椀(第12図77～79、81～83)が粗製杯にあたり、10世紀前半代と考えられる。伴出の羽釜(85・86)はやや古相であることから、粗製杯の年代はC地区SE1の廃絶時期を示すものと考えられる。最後に、報告書作成にあたり、吳竹遺跡の調査成果をご教示いただいた小川裕見子氏(大阪府教育委員会)に感謝申し上げます。

(注)同書では遺跡南東部にも遺構のまとまりを想定しているが、南東部は小規模なトレンチ調査であり、本書では北東部・中央北部・西部の3箇所とする。

## 【参考文献】

古代の土器研究会編1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』

財团法人古代学協会・古代学研究所1994『平安京提要』、角川書店

財团法人大阪府文化財センター 2004『東大阪市所在 瓜生堂遺跡2』

大阪府教育委員会2009『吳竹遺跡』

図版 1 瓜生堂遺跡第54次調査  
遺構



図版2 瓜生堂遺跡第54次調査 遺構



B地区 第5層上面の傾斜面検出状況  
(南東から)



B地区 第5層上面検出状況(東から)



B地区 西壁・南壁断面(北から)

図版 3 瓜生堂遺跡第54次調査  
遺構



A地区 第4～5層上面遺構検出状況  
(南から)



A地区 第4～5層上面遺構掘削後状況  
(南から)



C地区 第5層上面遺構検出状況  
(北から)



C地区 第5層上面遺構掘削後状況  
(北から)

図版4

瓜生堂遺跡第54次調査  
遺構



A地区 第5層上面検出遺構[北側]  
(南西から)



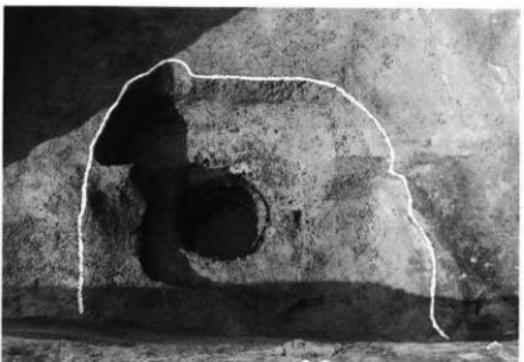
A地区 第5層上面検出遺構[南側]  
(北西から)



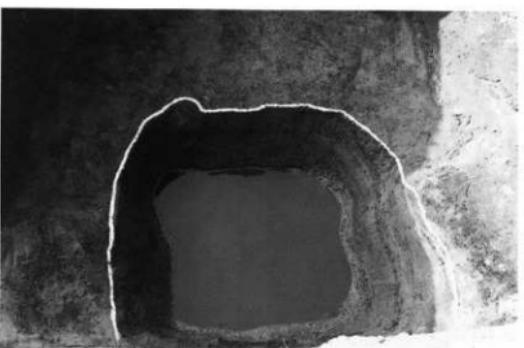
A地区 SD2と周辺のピット  
(北西から)



C地区 SE1 井筒上部枠組検出状況  
(東から)



C地区 SE1 井筒下部曲物検出状況  
(東から)



C地区 SE1 完掘後(掘形掘削後)状況  
(東から)

図版 6

瓜生堂遺跡第54次調査  
遺構



D地区 第4層上面遺構検出状況（南から）



D地区 第4層上面遺構掘削後状況（南から）



D地区 第4層上面遺構掘削後状況（北から）



D地区 SK5と周辺のピット（北から）

図版 7 瓜生堂遺跡第54次調査  
遺構



A地区 西壁断面（東から）

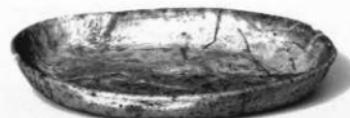


C地区 東壁断面（西から）



C地区 SE1 断面（西から）

圖版 8 瓜生堂遺跡第54次調查  
遺物



26



14



12



9



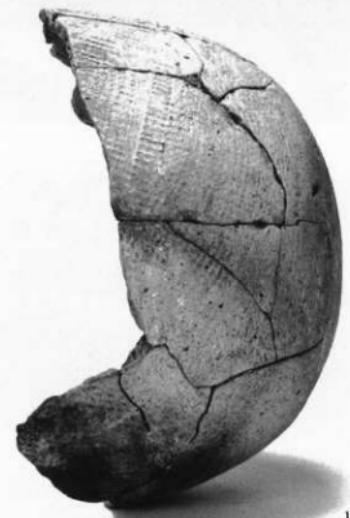
100



77



1



102



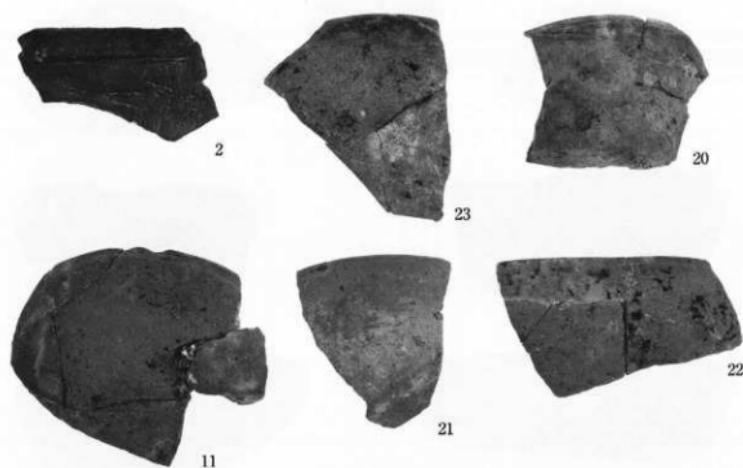
130



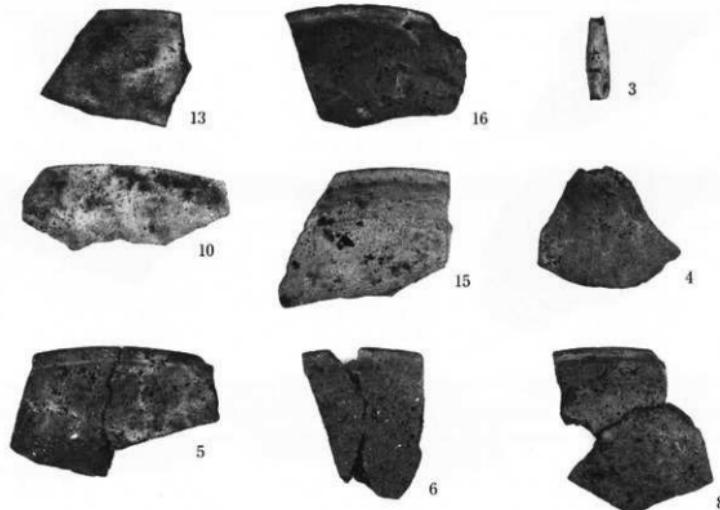
112

A地区第4層出土須恵器 杯、第3層出土土師器 杯・皿、C地区SE1出土土師器 梶、  
第2層出土須恵器 橫瓶、土師器 瓢、D地区SK5出土須恵器 平瓶、第3層出土須恵器 杯

図版9 瓜生堂遺跡第54次調査  
遺物

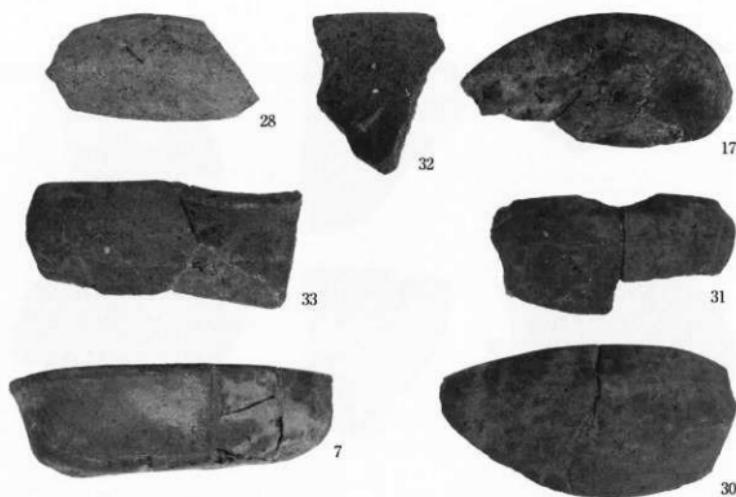


1. A地区第4層出土土師器 瓢、第3層出土土師器 杯・椀

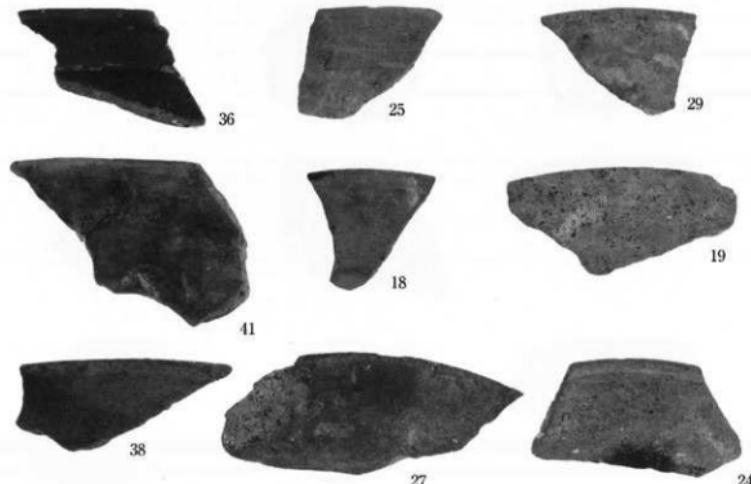


2. A地区第3層出土土製品 土錘、土師器 高杯・椀

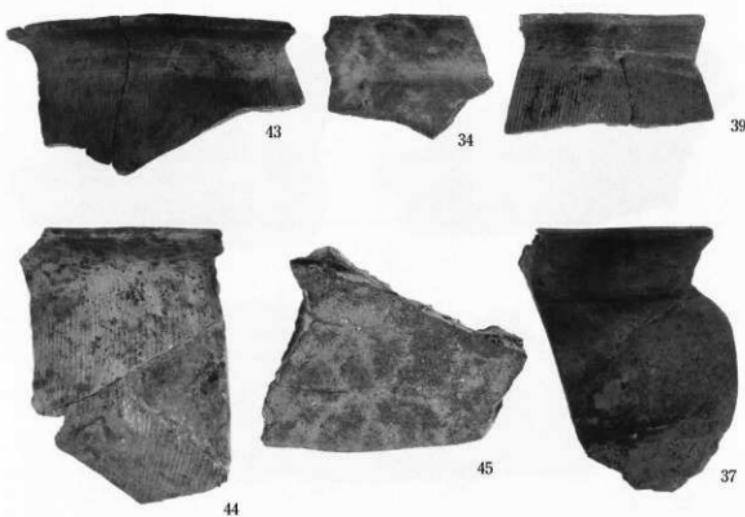
圖版 10  
瓜生堂遺跡第54次調查  
遺物



1. A地区第3層出土土師器 杯・皿・鉢



2. A地区第3層出土土師器 杯・皿・鉢



1. A地区第3層出土土師器 壺・壺

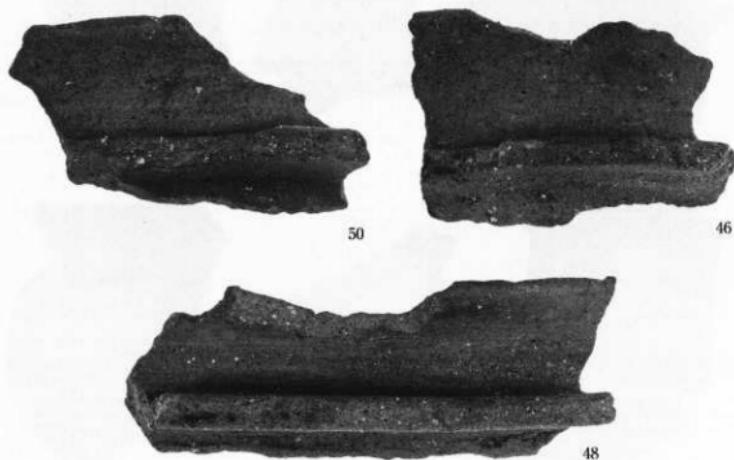


2. A地区第3層出土土師器 壺

圖版  
12

瓜生堂遺跡第54次調查

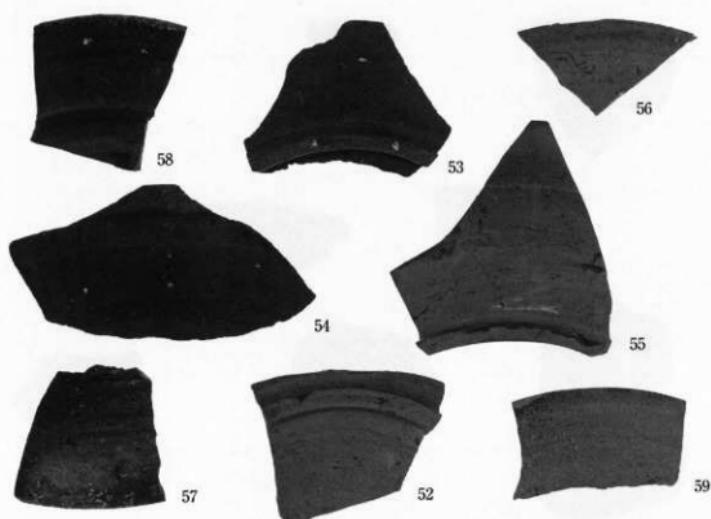
遺物



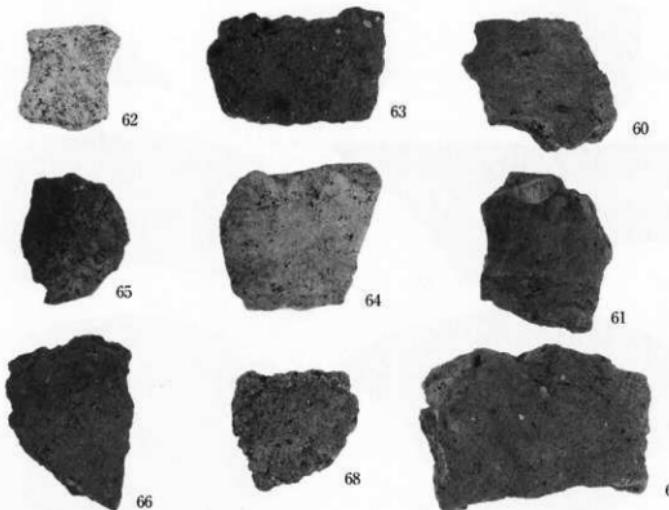
2. A地区第3層出土土師器 羽釜



1. A地区第3層出土土師器 羽釜



1. A地区第3層出土須恵器 杯・壺・蓋杯・甌、陶器 山茶椀

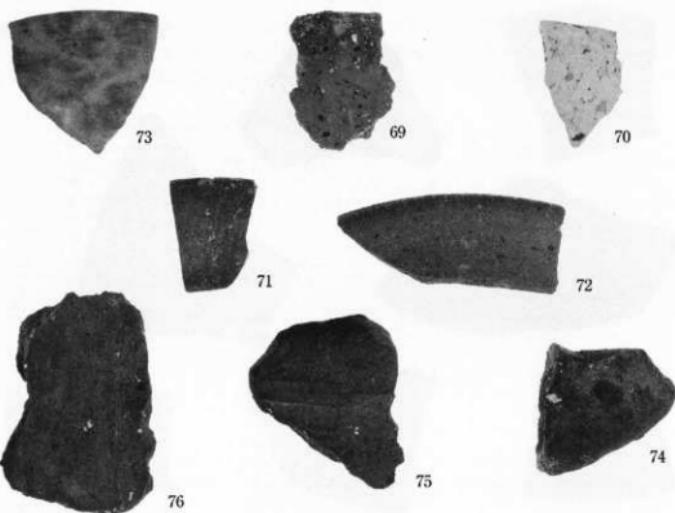


2. A地区第3層出土製塙土器

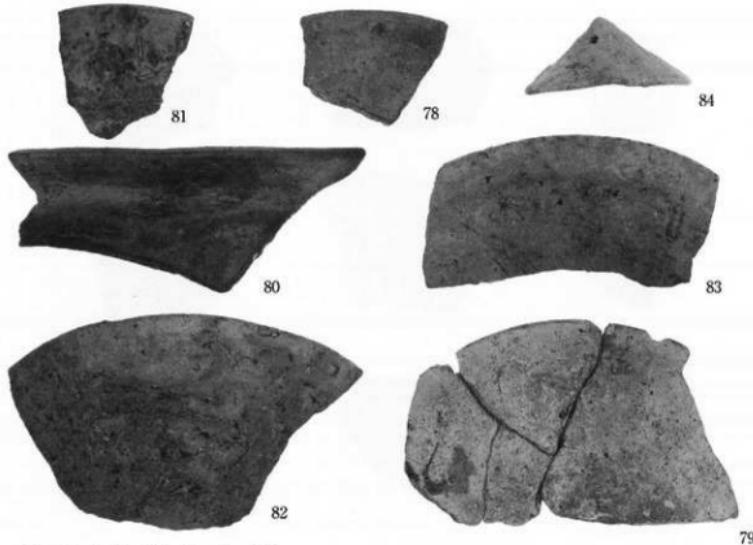
圖版  
14

瓜生堂遺跡第54次調查

遺物

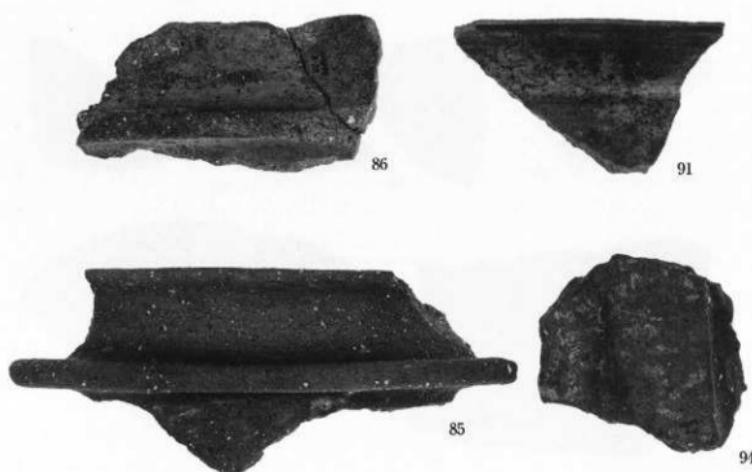


1. A 地區第2～3層出土須惠器 鏟、製塙土器、第1～2層出土須惠器 壺、土師器 杯・把手・壺

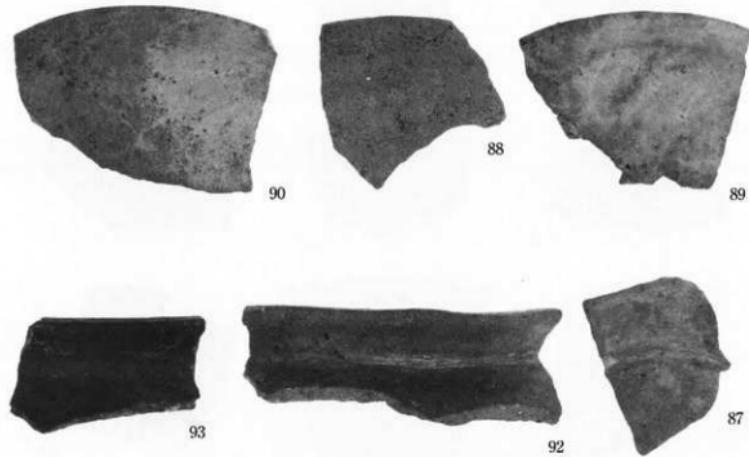


2. C 地區 SE1 出土土師器 梵・壺・高杯

圖版 15 瓜生堂遺跡第54次調查  
遺物



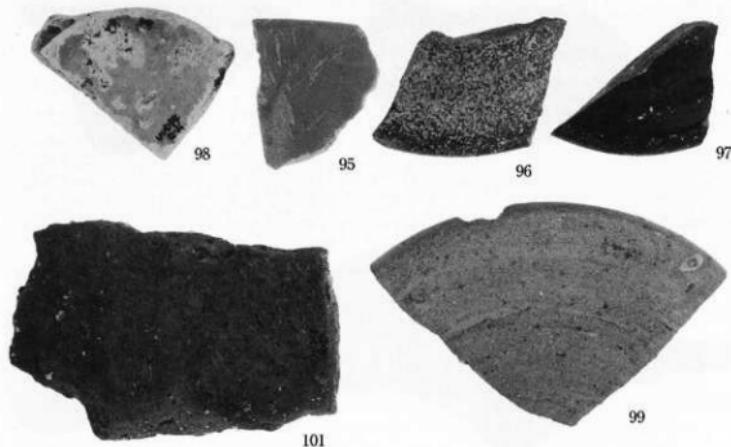
1. C地区SE1出土土師器 羽釜、第3層出土 土師器 麥・遼



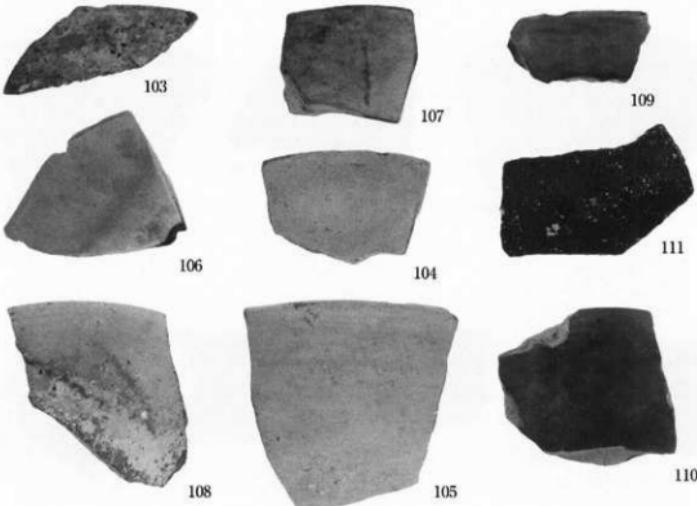
2. C地区第3層出土土師器 底部・輪・蓋

図版  
16

瓜生堂遺跡第54次調査  
遺物

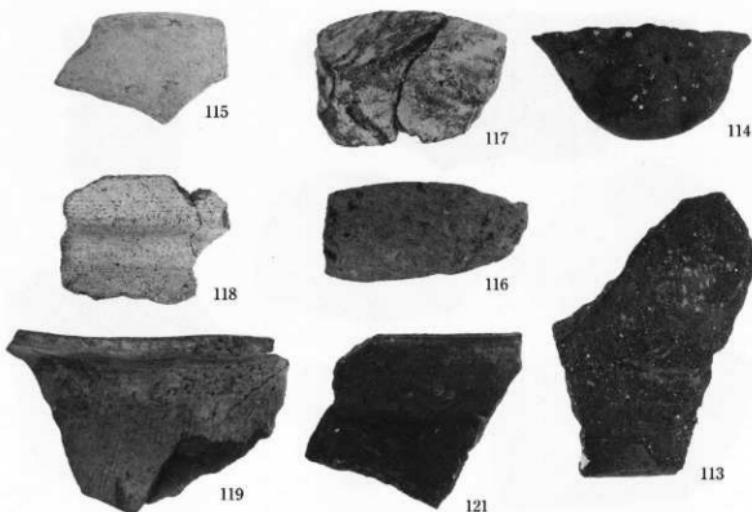


1. C地区第2層出土磁器・青磁碗、陶器・綠釉陶器底部、須恵器・脚部・蓋杯、土師器・甕

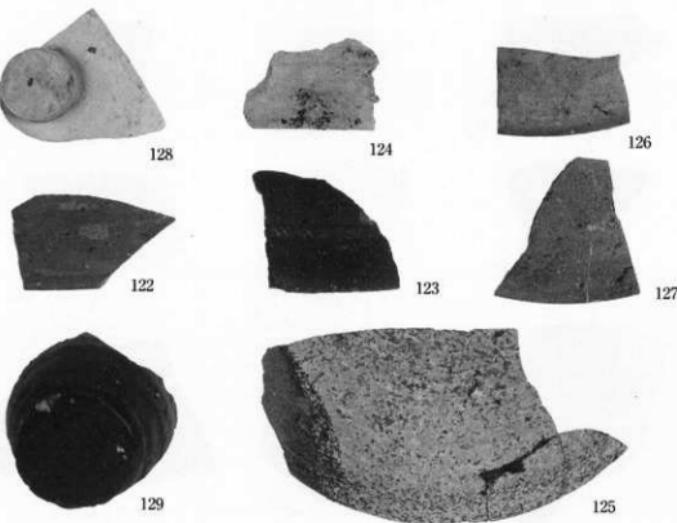


2. D地区SK5出土土師器・杯・高杯・碗・甕、ミニチュア土器・甕

圖版 17  
瓜生堂遺跡第54次調查  
遺物



1. D地区SK5出土土師器 瓢・把手、第3層出土土師器 杯・椀・甕

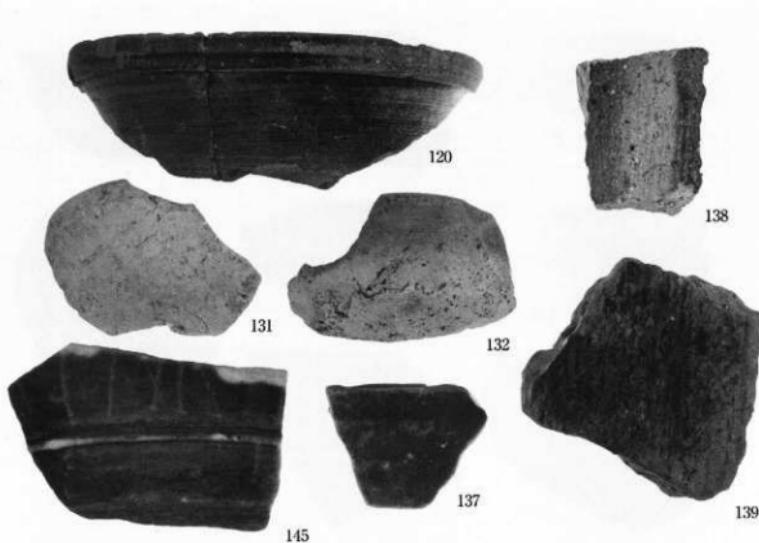


2. D地区第3層出土須恵器 盖杯・小型甕

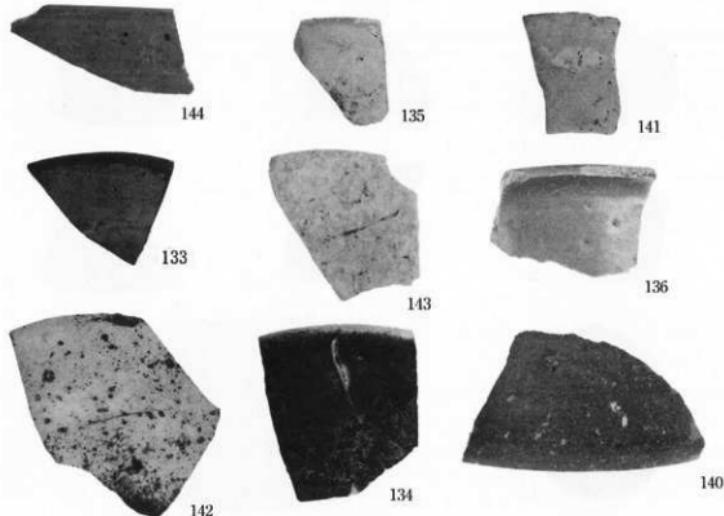
圖版 18

瓜生堂遺跡第54次調查

遺物



1. D 地區第3層出土須惠器 壺・杯、土師器 羽釜、瓦、第2層出土瓦質土器 火舍



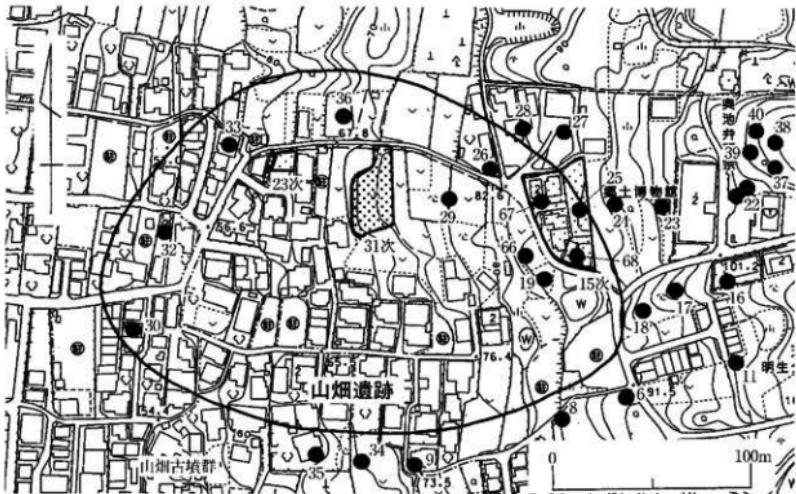
2. D 地區第3層出土瓦器 壺、磁器 青磁壺、第2層出土須惠器 蓋杯・鉢、土師器 瓦、瓦器 壺

### 第3章 山畠遺跡第31次発掘調査

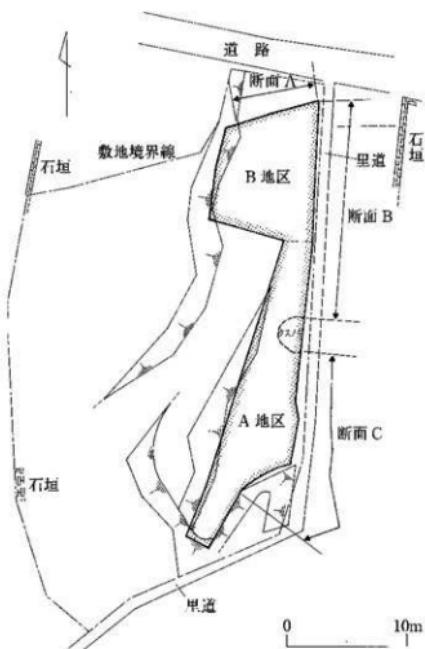
#### 1) はじめに

山畠遺跡は、東大阪市上四条町の市立郷土博物館の西方に広がる、縄文時代から弥生時代の集落跡、散布地である。遺跡の範囲は、東西約270m 南北約180m の規模と推定されている。本遺跡は標高約60～90m の斜面地に立地する。高所に立地する弥生時代集落は、中国の史書に見える、倭国内の地域間の緊張関係を背景に出現した、高地性集落と捉えられている。山畠遺跡もそのひとつであり、学史上著名である。昭和38年に小規模な発掘調査が行なわれ、方形の竪穴住居の一部が検出された。同43年には切り通しの道路断面から、竪穴住居が発見され、弥生土器のはか、石鐵などが出土した。平成2年の第15次調査では、横穴式石室をもつ古墳、および径5.8m の弥生時代中期末の竪穴住居が1棟検出された。いっぽう、山畠遺跡は山畠古墳群に包摂される。山畠古墳群は東大阪市瓢箪山町とその周辺に広がる、6世紀後半から7世紀初頭にかけての市内最大の群集墳である。古墳は標高30～150m の山地斜面から扇状地高位面に分布し、現在まで68基が確認されている。副葬品として馬具類が多いのが特徴で、馬銚部を統率した河内氏が築いたものかと考えられている。

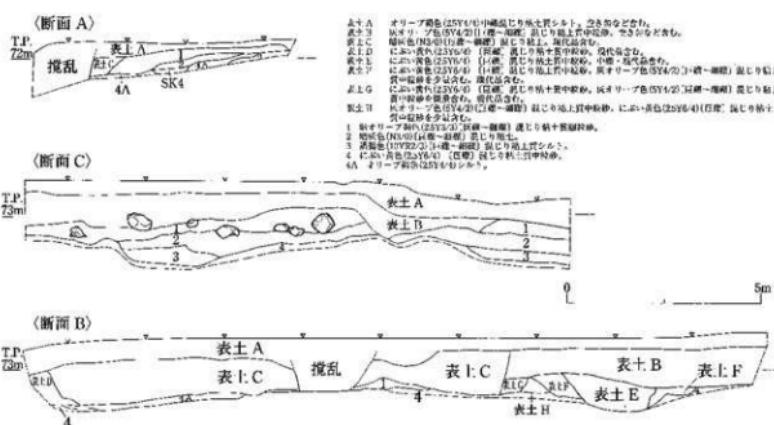
平成20年1月、東大阪市上四条町1709番地において、個人から整地工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。整地工事には大規模な切土工事を伴うものであったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を平成20年2月1日に実施したところ、弥生～古墳時代の遺物包含層が検出された。この結果を受けて取扱いを協議し、整地工事により埋蔵文化財が破壊される部分を対象として、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。発掘調査は平成20年3月5日から3月25日まで行った。調査面積は188.96m<sup>2</sup>であった。



第1図 調査地の位置と周辺の古墳



第2図 調査地トレンチ位置図



第3図 土層断面図

## 2) 調査方法と層位

調査は確認調査の結果に従い、表土を重機で除去し、以下を人力で掘削した。堆土を場内に仮置きする関係と重機の移動を確保するため、調査対象地を二分し、南側の三角形状を呈する地区から調査を開始し、その終了後に北側を調査した。便宜的に南側をA地区、北側をB地区と呼んでいる。またA地区の中央北よりに、東側の里道に接してクスノキの巨木があり、それを除去すると里道および東側畠地に影響が出るため、撤去した。ただしクスノキの根の周囲に取り付く遺物包含層は人力で全て掘削し、遺物の採集につとめた。

検出した層位は次のとおりである。

表土層 調査に着手する前までの雑木林の堆積土、あるいはそれ以前の開墾による堆土を含めて表土とした。土地の開墾に伴う堆土中には、遺物包含層のブロック土が混じり、一見しただけでは紛らわしいものがあるが、近現代の廃棄物を含むものは全て重機で除去した。B地区では一部第1層が遺存した箇所以外は、

表土 A オリーブ褐色 (25Y6/4) 売り出し土質シルト、土色のなどあり。  
表土 B 黒褐色 (N5/0) (15Y3/4) 売り出し土質粘土、土色のなどあり。  
表土 C 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質砂質粘土、土色のなどあり。  
表土 D にふり出しき色 (25Y6/4) (15Y3/4) 売り出し土質砂質粘土、土色のなどあり。  
表土 E にふり出しき色 (25Y6/4) (15Y3/4) 売り出し土質砂質粘土、土色のなどあり。  
表土 F にふり出しき色 (25Y6/4) (15Y3/4) 売り出し土質中軟岩、黄オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 G 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 H 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 I 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 J 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 K 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 L 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 M 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 N 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 O 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 P 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 Q 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 R 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 S 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 T 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 U 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 V 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 W 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 X 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 Y 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。  
表土 Z 黄褐色 (15Y4/6) (10Y5/4) 売り出し土質中軟岩、灰オリーブ色 (3Y6/2) (3Y6/4) 売り出し土質粘土が少しある。

後述の遺構面まで表土層であった。これは、調査地の北側で東西に走る道路に向かって、もと傾斜面があり、それを埋めるための盛土と考えられる。東側里道の地表面はT.P.約71mを測る。

第1層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)〔巨礫～細礫〕混じり粘土質細粒砂。弥生～古墳時代の遺物を多く含むが、B地区の第1層で近世の陶器片が伴出するため、近世期以降の二次堆積層であることがわかる。

第2層 暗灰色(N3/0)〔L-礫～細礫〕混じり粘土。弥生～古墳時代の遺物包含層。

第3層 黒褐色(10YR2/3)〔巨礫～細礫〕混じり粘土質シルト。弥生～古墳時代の遺物包含層。遺物包含層の堆積状況については後述する。

第4層 にぼい黄色(2.5Y6/4)〔L-礫〕混じり粘土質中粒砂。地山層。B地区北側では、第4層の上面に薄く、同様の色調をもつ層が堆積していた。これを第4A層とした。

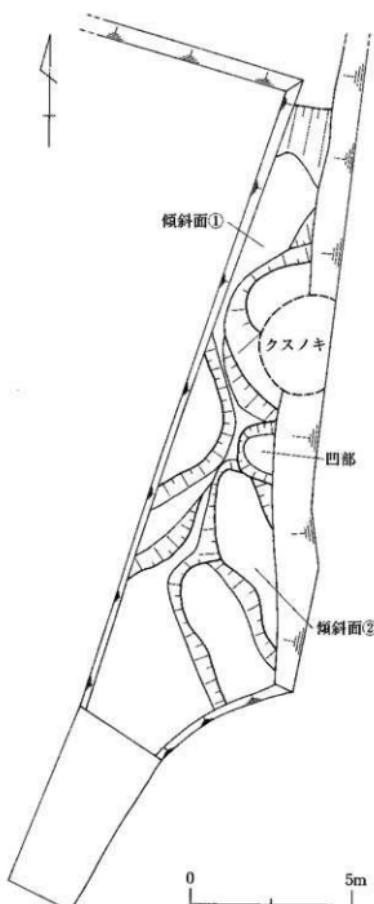
第4A層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト。第4層に貼り付くように堆積していた。上面は遺構面を形成する。

### 3) 遺物包含層と遺構

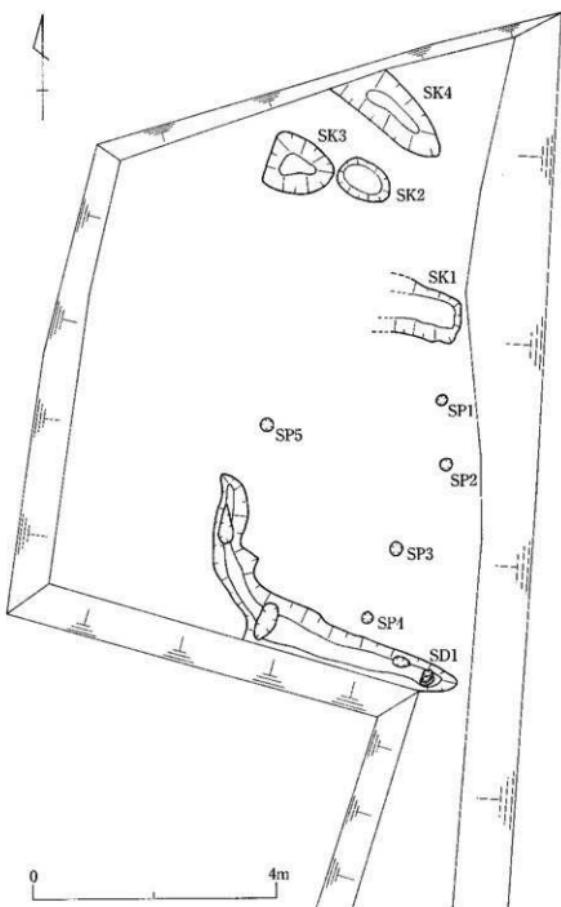
A地区での遺物包含層の堆積状況と旧地形、B地区の遺構について、一括して説明する。

A地区では、遺物包含層が堆積する前段階の旧地形を検出した(第4図)。A地区での旧地形は、①北端からクスノキの幹部を、S字を描く構造に巡るもの、②中央南側を頂点として、北東および北西に向かって、比高約0.8mの傾斜面をなすもの、に区分できる。①②の傾斜面が接する、クスノキのすぐ南側に南北約2.0m東西約1.0mの凹部がある。凹部上面を精査したが、人為的な掘り込みに伴うラインは見出せず。

遺構とは考えられない。第3層は凹部にのみ堆積し、凹部の断面形は鐘鉢状を呈する。凹部の北側には人頭大の巨礫が密集していたが、古墳の痕跡はうかがわれなかった。第2層・第3層とともに弥生土器と須恵器・円筒埴輪が混在して出土した。量的には弥生土器が優勢であり、須恵器・円筒埴輪の出土は少量であった。しかし、凹部底面の地山層である第4層と接する箇所から円筒埴輪が出土したことにより、古墳時代あるいはそれ以降に弥生土器が再堆積したことが考えられる。ただ、須恵器・円筒埴輪の破面に見られる風化は小さく、古墳時代から大きく下った時期とは考え難い。



第4図 A地区旧地形の傾斜面実測図



第5図 B地区第4A層上面検出遺構平面図

字状、断面蕭鉢状を呈する。溝の西側、中央、東側の3箇所にピット状の凹みがある。とくに溝中央の凹みは方形を呈する。溝中央で幅0.7m 深さ0.18m を測る。埋土は黒色(10Y2/1)細緻混じりシルトであった。

これらの遺構は内部から遺物が出土しなかったため、詳細な所属時期は不明である。ただし、周辺の調査状況から、弥生時代あるいは古墳時代の集落に伴う遺構とは考えられない。遺構面直上まで表土が覆っていたことから、遺構の時期は近代まで下る可能性を考える必要がある。

B地区では、第4層上面で、ピット5個・土坑4基・溝1条を検出した。遺構内から遺物は出土しなかった。

ピットはB地区中央で検出。全て円形を呈する。径は15cm前後、深さは浅いもので4cm、深いもので21cmを測る。杭穴状を呈する。埋土は全て共通し、暗灰色(N3/0)粗粒砂混じり粘土で、第4層のブロックを少量含む層であった。

上坑はB地区の北側で検出SK1が方形、長径1.0m以上短径0.9m 深さ0.38m、SK2が楕円形、長径0.9m短径0.6m深さ0.15m、SK3が方形、長径1.1m短径0.95m深さ0.38m、SK4が長楕円形、長径2.0m以上短径0.8m深さ0.31mをそれぞれ測る。埋土はSK1・3・4が暗灰色(N3/0)粗粒砂混じり粘土で、第4層のブロックを少量含む層、SK2が黒色(10Y2/1)細緻混じりシルトであった。

SD1はB地区的南端で検出した。平面はL

#### 4) 出土遺物

弥生時代～中世期の遺物が出上した。遺物は土器、埴輪、土製品、石器などがある。弥生時代の土器が大部分を占める。遺物は風化が著しく調整法は不明なものが多い。わかるものは本文中に調整法を記す。口縁部と裾端部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。弥生土器は胎土中に石英・長石・角閃石・玄母を含むものを生駒西麓産とし、それ以外は非河内産で記す。以下、遺物ごとに説明する。

##### ① 弥生土器

弥生土器は中期に属し、第Ⅲ～Ⅳ様式である。各層に分けて説明する。

第1層出土土器（第6・7図1～35）

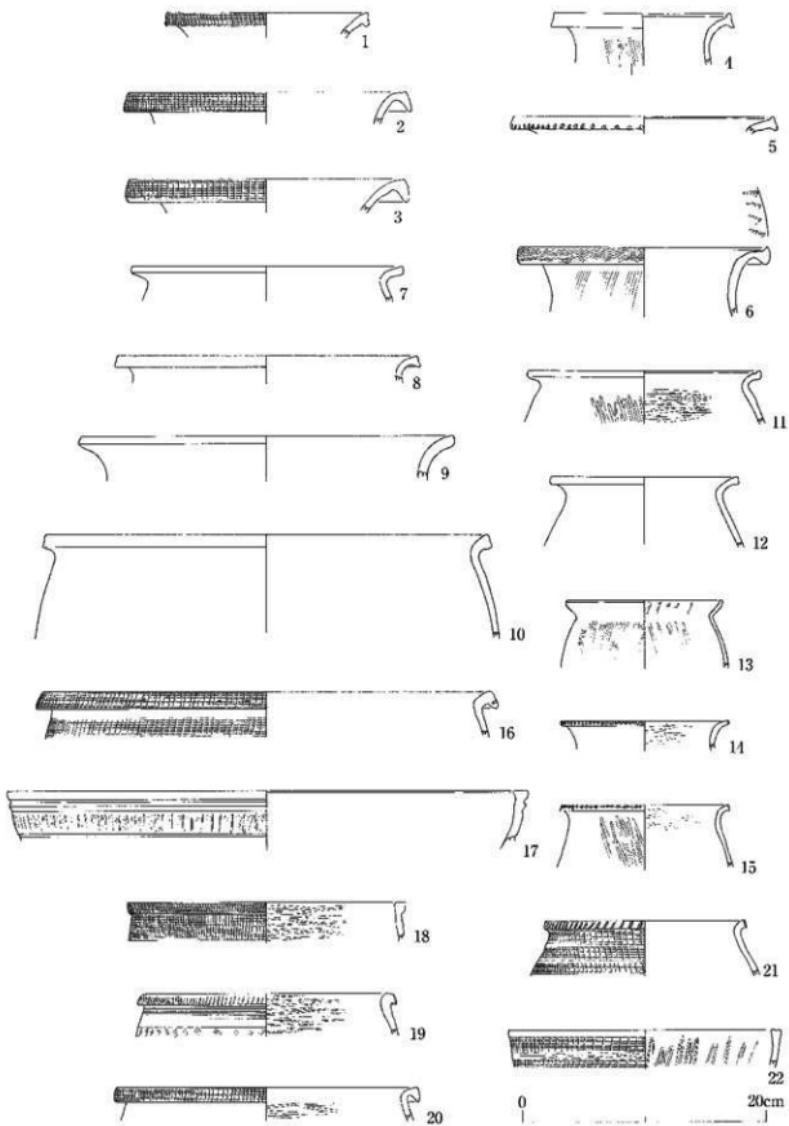
壺・甕・鉢・高杯・甕蓋・壺蓋・台付鉢の器種がある。

1～6は壺である。1～3は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に1帯の櫛描簾状文を施す。1は頸部内外面をナデ調整する。その他は風化が著しく調整法は不明である。4～6は口縁部が大きく外反し、口縁端部をわずかに上下へ拡張する。4は頸部外面をハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。5は口縁端部下端に刻み日を施す。頸部外面はナデ調整する。6は口縁端部に櫛描波状文、口縁端部内面に扇形文を施す。頸部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

7～15は甕である。7・9・12・13は体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁端部が面を持つものと丸く終わるものがある。13は体部外面をハケメ調整、内面をヘラミガキ調整する。口縁部内面はハケメ調整の後、ヨコナデ調整する。その他は風化が著しく調整法は不明である。8・10は体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁端部を下方へ拡張する。頸部外面はナデ調整する。11は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整する。14・15は体部の張りが少なく、口縁部が外反する。口縁端部が面を持つものと丸く終わるものがある。口縁端部に刻み日を施す。14は頸部外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。15は体部外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。生駒西麓産。

16～22は鉢である。16・19～21は体部が内傾し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。16は口縁端部に1帯の櫛描簾状文と円形刺突文を施す。体部に1帯の簾状文が残る。体部内面は風化が著しく調整法は不明である。19は口縁端部に櫛描列点文、口縁部直下に直線文を施す。体部は直線文を描いた後、その上に扇形文を施す。体部内面はヘラミガキ調整する。20は口縁端部に櫛描簾状文を施す。体部内面はヘラミガキ調整する。21は口縁端部に刻み日、体部に櫛描簾状文を施す。3帯が残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。17・22は口縁部がやや内湾し、椀状を呈する。口縁端部は面を持つ。17の体部は順に2条の凹線文と表面が摩滅して止まり部分しか残っていないが櫛描簾状文、その下に1条の凹線文を施す。体部内外面はハケメ調整する。22は体部に櫛描簾状文を施す。2帯が残る。文様帯間は研磨する。体部内面はヘラミガキ調整する。18は体部が内傾する。口縁部が直立し、口縁端部は段を持つ。口縁端部に1帯の櫛描簾状文を施す。体部にも1帯が残る。体部内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

23～33は高杯である。23～28は杯部である。23～27は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、浅い椀状を呈する。口縁端部は面を持つ。23の体部は順に1条の凹線文、ヘラ状工具による刻み日、1条の凹線文を施す。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。口縁部内面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。25・26は3条の凹線文を施す。体部内外面はハケメ調整の後、ナデ調整する。28は口縁部が水平方向へ伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する。4条の凹線文を施す。体部内外面



第6図 第1層出土石器尖端圖

はヘラミガキ調整する。29～31は脚部である。29・31は裾部が急に立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。裾端部が面を持つ。31の脚部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラケズリ調整する。30は裾部の立ち上がりは緩く、裾端部が面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。29・30は裾端部の内面にリング状の煤が付着していることから壺蓋に転用したと思われる。23は非河内産、その他は生駒西麓産。

32・33は壺蓋である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つものと丸く終わるものがある。33は裾部外面をヘラミガキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。生駒西麓産。

34は壺蓋である。裾部の立ち上がりは緩く、裾端部が面を持つ。口縁部付近に小孔を穿つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。口縁端部の内面に煤が付着する。生駒西麓産。

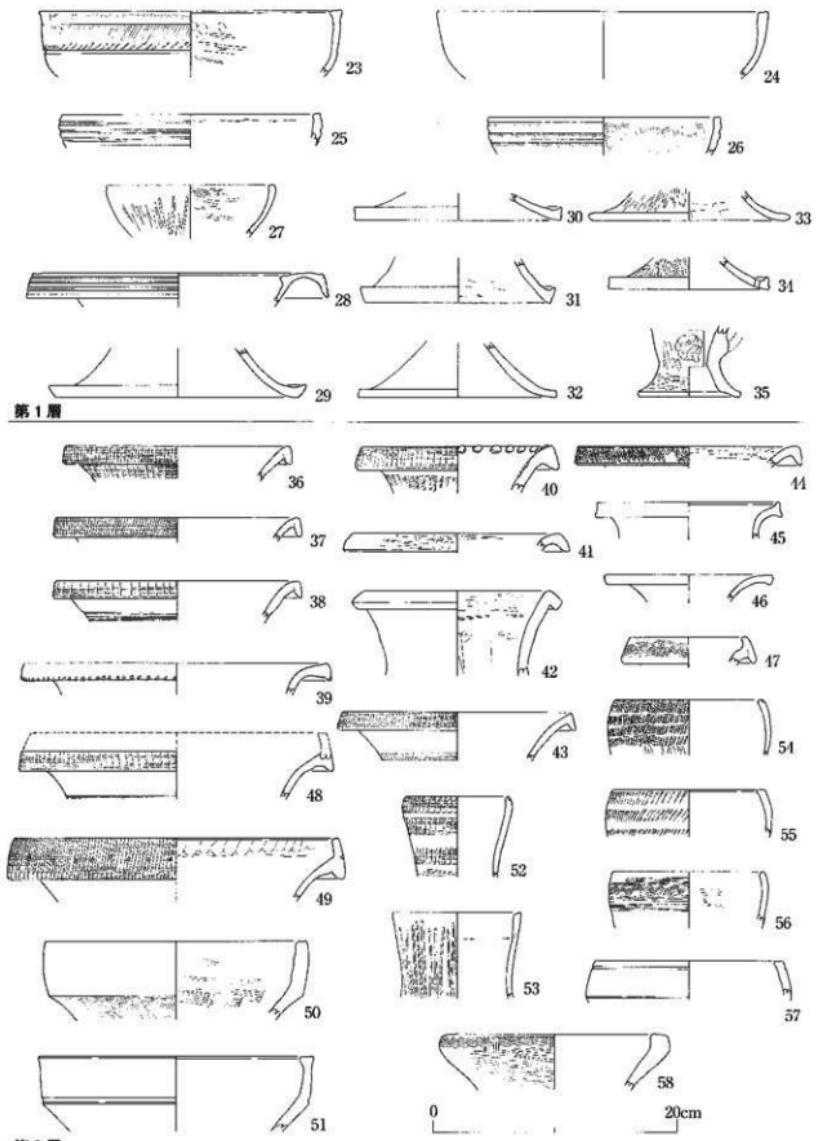
35は台付鉢の脚部である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。体部に握手の一部が残る。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

## 第2層出土土器（第7～9図36～97）

壺・細頸壺・壺蓋・鉢・高杯・壺蓋の器種がある。

36～51は壺である。36～38・40～44は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。36・40・43は口縁端部に1帯の櫛描箇状文を施す。頸部にも1帯が残る。風化が著しく調整法は不明である。40は口縁部内面に円形浮文を貼り付ける。37は口縁端部に1帯の櫛描箇状文を施す。頸部外面はナデ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。38は口縁端部に1帯の櫛描箇状文、頸部に直線文を施す。頸部外面はナデ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。41は頸部外面をナデ調整する。口縁端部外面はヘラミガキ調整する。42は頸部外面をナデ調整する。内面上半はハケメ調整、下半は板状工具によるナデ調整する。44は口縁端部に1帯の櫛描波状文を施す。頸部外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。39・45は口縁部が大きく外反し、口縁端部はわずかに上へ拡張する。39は口縁端部下端に刻み目を施す。頸部外面はナデ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。46は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。47～49は口縁部が大きく外反し、口縁端部を大きく上下へ拡張する。口縁端部は幅広の面を持つ。47は口縁端部に1帯の櫛描波状文を施す。風化が著しく調整法は不明である。48は上部を欠損しているが口縁端部に櫛描箇状文、頸部に直線文を施す。風化が著しく調整法は不明である。49は口縁端部に2帯の櫛描波状文と円形刺突文を施す。頸部外面はナデ調整する。口縁部内面は粘土紐の接合痕とユビオサエによる指頭压痕が顯著に残る。50・51は口縁部がほぼ直立し、口縁端部を上方へ大きく拡張する。口縁端部は幅広の面を持つ。50は頸部外面をハケメ調整する。内面はハケメ調整の後、ナデ調整する。51は口縁部に1条の凹線文を施す。頸部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はナデ調整する。生駒西麓産。

52～58は細頸壺である。口縁部は内湾するものが多い。一部上方へ直線的に長く伸びるものもある。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。52は口縁部に刻み目、頸部に櫛描箇状文を施す。3帯が残る。文様帶間は研磨する。頸部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。53は頸部外面をヘラミガキ調整する。内面はナデ調整し、粘土紐の接合痕が残る。54は頸部に櫛描列点文を施す。4帯が残る。その後、口縁端部に刻み目を施す。文様帶間は研磨する。頸部外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。55は頸部に櫛描列点文を施す。3帯が残る。風化が著しく調整法は不明である。56は頸部に櫛描直線文と波状文を交互に施す。直線文2帯、波状文1帯が残る。文様帶間は研磨する。頸部内面はヘラミガキ調整する。57は大型の細頸壺である。口頸部が大きく内湾し、口縁端部は面を持つ。口縁部に1帯の凹線文を施す。頸部外面はナデ調整する。



第7図 第1層・第2層出土弥生土器実測図

58は受口状の口縁部を持つ。口頭部が大きく外反し、口縁端部は内湾しながら直立する。口縁端部は面を持つ。口縁部に1帯の櫛描波状文を施し、その後、縱方向の直線文を数箇所に加える。頭部外面は粗いハケメ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。39・46・54・56・58は非河内産、他は生駒西麓産である。

59～78は壺である。59～63・69～72・76～78は体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁端部が面を持つものと丸く終わるものがある。体部外面はナデやハケメやヘラミガキ調整し、内面は板状工具によるナデやハケメやヘラミガキ調整する。75は体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整する。64～68・73・74は体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁端部を下方へ拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整する。ユビオサエによる指頭圧痕や粘土紐の接合痕が残るものもあるが、ほとんどのものは風化が著しく調整法は不明である。67は口縁端部に円形刺突文を施す。生駒西麓産。

79～83は鉢である。79は体部の張りが少なく、口縁端部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面は粗いハケメ調整する。80～82は体部が内傾し、口縁部が丸く外反する。口縁端部は面を持つ。80は口縁端部に1帯の櫛描波状文、体部に簾状文を施す。2帯が残る。文様帶間は研磨する。81は口縁端部に1帯の櫛描簾状文を施す。体部にも1帯が残る。体部内面はハケメ調整する。82の体部は順に櫛描列点文、簾状文、ヘラ描列点文を施す。それぞれ1帯ずつ残る。内面は口縁部をヘラミガキ調整、体部をナデ調整する。83は体部が内傾する。口縁部が直立し、口縁端部は段を持つ。口縁端部に1帯の櫛描簾状文を施す。体部にも1帯が残る。体部内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

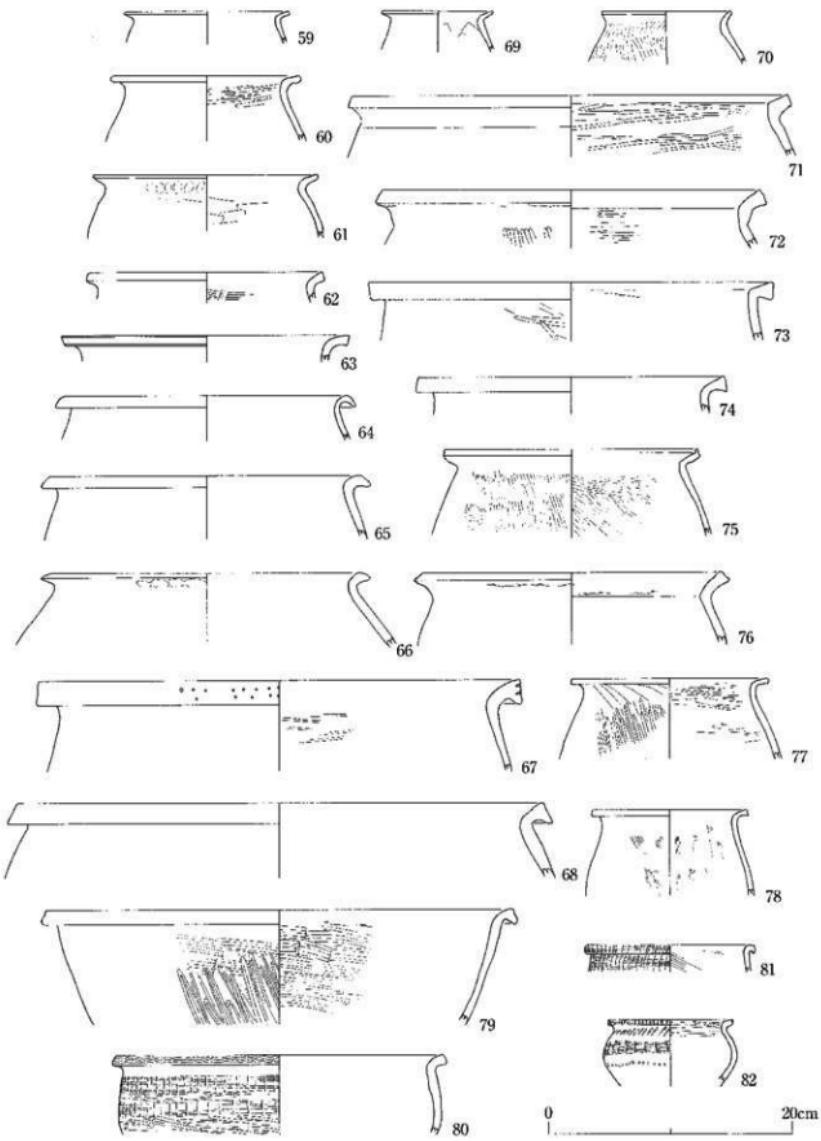
84～92は高杯である。84～88は杯部である。84・85は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、浅い椀状を呈する。口縁端部は面を持つ。84は口縁部に3条の四線文を施す。85は口縁部に櫛描列点文、その下に扇形文を施す。84・85は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。86～88は口縁部が水平方向へ伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁端部は幅広の面を持つ。口縁部と体部の内面の境に凸帯を貼り付ける。体部内外面はヘラミガキ調整する。89～92は脚部である。89・91・92は裾部が急に立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。89は脚部に竹管文を施す。2帯が残る。脚部内外面はナデ調整する。91は脚部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。92は脚部に5条の四線文を施す。脚部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。90は裾部の立ち上がりは緩く、裾端部が面を持つ。脚部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。また、裾端部の内面にリング状の煤が付着していることから、壺蓋に転用したと思われる。生駒西麓産。

93～95は壺である。93は中央に円形のつまみが付く。つまみ部外面にユビオサエによる指頭圧痕が顕著に残る。風化が著しく調整法は不明である。口縁端部の内面に煤が付着する。94・95は体部外面をヘラケズリ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。生駒西麓産。

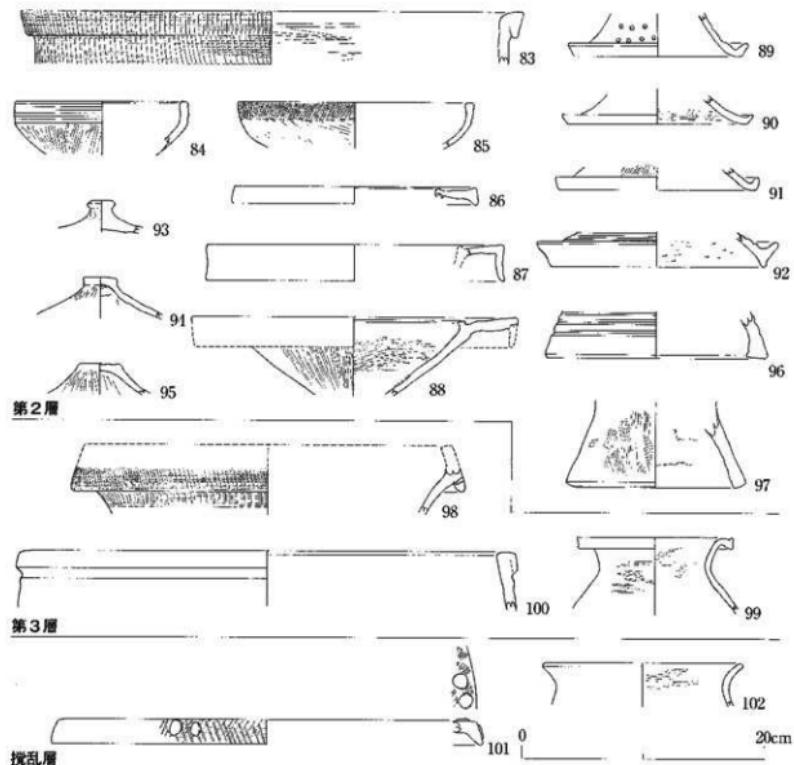
96・97は脚部である。台付無頸壺か台付鉢の可能性がある。96は内湾気味に立ち上がり、裾端部が面を持つ。脚部に3条の四線文を施す。97は脚部の立ち上がりが強い。ハの字形の裾部形態を持ち、裾端部は丸く終わる。脚部外面はハケメ調整、内面は粗いナデ調整する。脚部内面に粘土紐の接合痕が残る。96は非河内産、97は生駒西麓産。

### 第3層出土土器（第9図98～100）

98・99は壺である。98は口縁部が大きく外反し、口縁端部を大きく上下へ拡張する。口縁端部は幅広の面を持つ。上部は欠損しているが、口縁端部に1帯の櫛描簾状文と円形刺突文を施す。頭部にも1帯が残る。風化が著しく調整法は不明である。99は口縁部が大きく外反し、口縁端部をわずかに上



第8図 第2層出土弥生土器実測図



第9図 第2層・第3層・擾乱層出土弥生土器実測図

下へ拡張する。体部外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整の後ナデ調整する。生駒西麓産。

100は鉢である。体部は内傾する。口縁部が直立し、口縁端部は段を持つ。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

#### 擾乱層出土土器（第9図101・102）

101は壺である。口縁部が大きく外反し口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部は櫛描斜格子文を施した後、2個1単位の円形浮文を貼り付ける。口縁部内面にも2段の刷毛文を施した後、2個1単位の円形浮文を貼り付ける。口縁端部内面はナデ調整しユビオサエによる指頭圧痕が残る。生駒西麓産。

102は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が外反する。口縁部は面を持つ。頸部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

#### ② 古墳時代以降の土器・埴輪

第1・2・3層出土上器・埴輪（第10図103～123）

須恵器・瓦質土器・埴輪がある。

須恵器は杯身・高杯・器台がある。

103・106は杯身である。103は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終わる。体部内外面は回転ナデ調整する。TK46型式に該当する。7世紀後半。106は体部がやや深く、丸底に近い平底の底部である。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部は長く内傾し、口縁端部は丸く終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。TK10型式に該当する。6世紀中葉～後半。104は高杯の脚部である。裾部は緩く立ち上がり、裾端部は面を持つ。形状は不明であるが、透かし孔を穿つ。脚部内外面は回転ナデ調整する。TK43～TK209型式に該当する。6世紀末～7世紀初。105は器台の杯部である。浅い椀状を呈し、口縁端部が段を持つ。体部外面は擬格子のタキキを施した後、カキメ調整する。内面は回転ナデ調整する。TK10型式に該当する。6世紀中葉～後半。

107は瓦質土器の擂鉢である。口縁部内面が外側にわずかに膨らみ、面を持つ。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。15世紀後半。

埴輪は全て円筒埴輪と思われる。全て破片である。遺存状態が悪く表面は剥離して調整法がわからないものが多い。一部、ハケ調整が観察できる程度である。いずれも無黒斑の土師質のものである。

108～123は円筒埴輪である。108は口縁部である。上方へ伸びて口縁端部が面を持つ。体部外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整する。色調はにぶい橙色を呈する。109は基底部である。「S」字状に若干外反して立ち上がる。底面は面を持ち、ワラ状の圧痕が残る。体部内外面はナデ調整する。内面にはユビオサエによる指頭压痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。110～123は体部の破片である。調整法はタテハケ、ヨコハケ、ナナメハケ調整のほか、ナデ調整で仕上げるものが多い。110の突帯はやや高く突出する。断面形は台形である。風化が著しく調整法は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。111・118の突帯は高く突出する。断面形は台形である。調整法は体部外面を板状工具によるナデ調整していることから、同一個体である可能性もある。また、118は突帯の直上に円形を呈する透かし孔の痕跡が残る。色調は橙色を呈する。113の突帯はやや高く突出する。断面形は台形である。上方を特に強くなにつける。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面は7条/cmのヨコハケ調整する。色調は橙色を呈する。121の突帯はやや高く突出する。断面形は台形である。体部外面は8条/cmのナナメハケ調整の後、B種ヨコハケ調整する。内面はナデ調整する。色調は明黄褐色を呈する（断面は灰色）。122・123の突帯は低く突出する。断面形はM字状である。復元できる123の直径は約19cmと小さい。体部外面は8条/cmのナナメハケ調整の後、B種ヨコハケ調整する。内面はナナメハケ調整する。色調も明黄褐色を呈する（断面は灰色）ことから、同一個体である可能性もある。調整法、色調、胎土などの特徴から、少なくとも5種類の円筒埴輪があった可能性が高い。108は川西宏幸氏の編年V期に該当する。6世紀。121・122・123は川西宏幸氏の編年IV期に該当する。5世紀後半。その他は風化が著しく調整法が不明のため、詳細な時期は不明である。しかし、突帯のあるものはその形態から同時期とも考えられる。103～105・107・108・110～118は第1層、106・109・119～121は第2層、122・123は第3層から出土した。

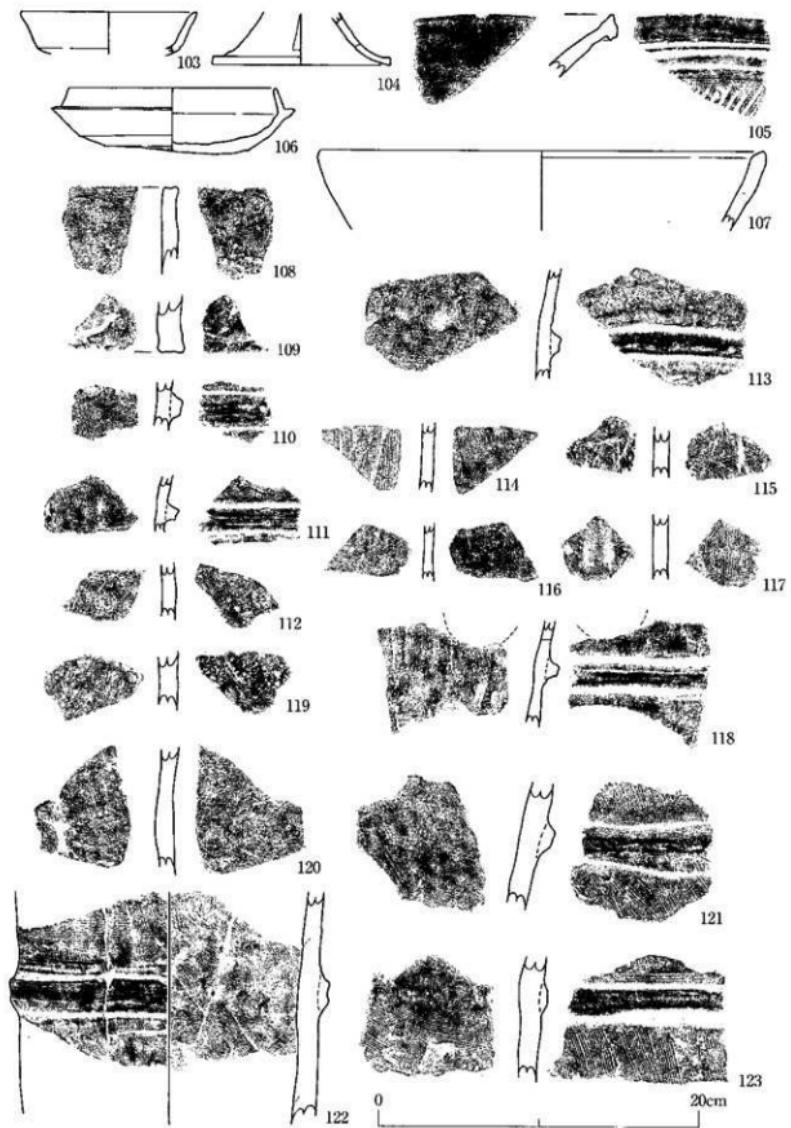
搅乱層出土上器・埴輪（第11図124～128）

須恵器・瓦質土器・埴輪がある。

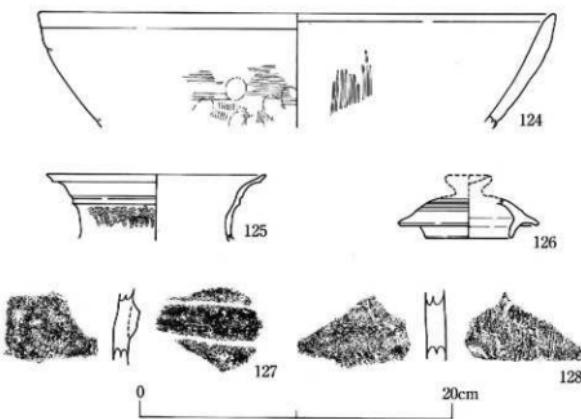
須恵器は壺、壺蓋がある。

125は壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部が面を持つ。頸部に横描波状文を施す。1带が残る。頸部内外面は回転ナデ調整する。TK10型式に該当する。6世紀中葉。

126は壺蓋である。直径5.4cmの小型のもので、脚付長頸壺とセットになる蓋である。天井部がや



第10図 第1層・第2層・第3層出土古墳時代以降土器・埴輪実測図



第11図 掘乱層出土古墳時代以降土器・埴輪実測図

や扁平で、口縁端部は丸く終わる。口縁部はつまみ上げ気味に伸び、天井部につまみがつくと思われる。天井部外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整する。T K 10型式に該当。6世紀中頃。

124は瓦質土器の擂鉢である。口縁部内面が幅広の面を持つ。面は内側に凹む。口縁端部は尖り気味に終

わる。体部外面はハケメ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が顕著に残る。内面はナデ調整の後、4条/cmの櫛状工具で底部から口縁部に向かって擂目を施す。16世紀前半。

127・128は円筒埴輪である。体部の破片である。127の突帯は低く突出する。断面形は台形である。体部内外面は風化が著しく調整法は不明である。色

調は橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。

#### ③ 土製品（第12図129～132）

129～132は円盤状土製品である。土器の体部を転用する。円周部を丸く打ち欠いて円形に整える。径は約2.5～5.8cmを測る。大きさは規格性がない。打ち欠いただけのものが多いが、130は円周部をさらに研磨する。生駒西麓産。129は第1層、130～132は第2層より出土した。弥生時代中期。

#### ④ 石器

##### 磨製石器（第12図133・134）

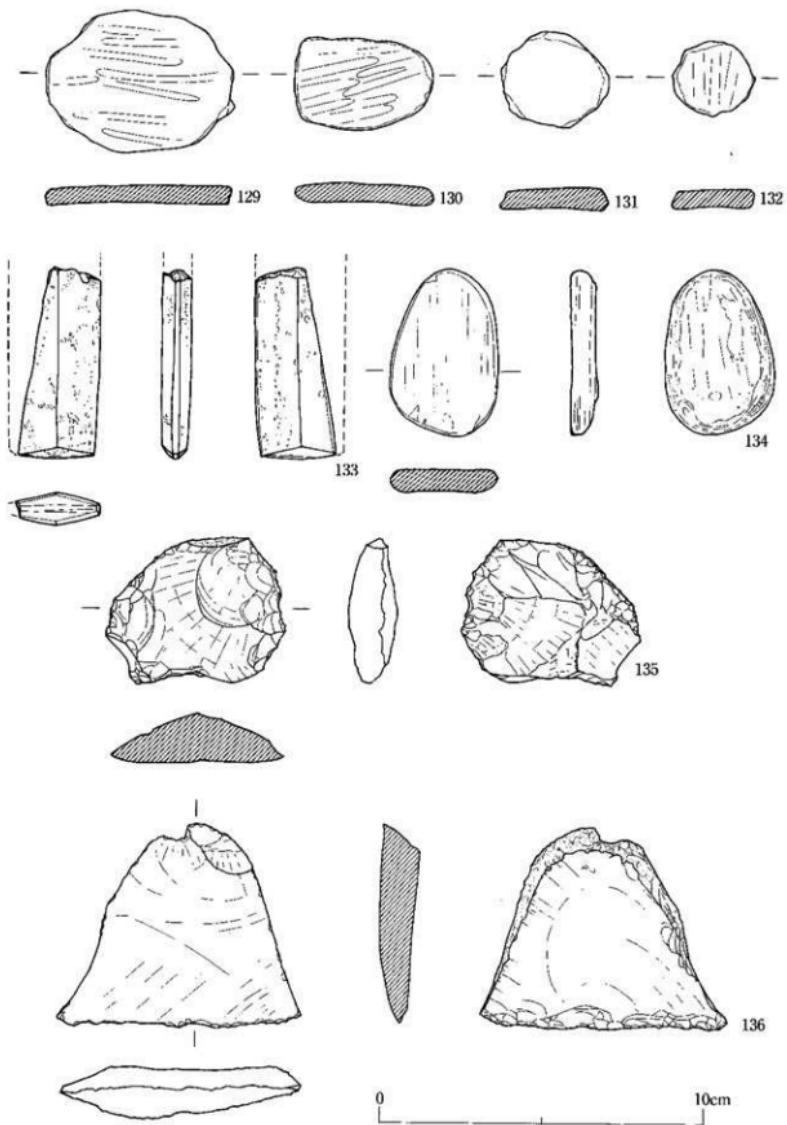
石剣・不明品がある。

133は石剣である。先端部を欠損するが鉄劍形の基部である。基部は平基で、身の両面中央に稜を施す。横断面形が菱形を呈する。全体を丁寧に研磨する。残存長5.9cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmを測る。134は不明品である。紅縞片岩を円盤状に割ったもので、円周部をさらに研磨する。用途は不明であるが、円盤状土製品と形態・加工がよく似ていることから同様の使い方をした可能性もある。残存長5.2cm、幅3.4cm、厚さ0.8cmを測る。弥生時代中期。

##### 打製石器（第12図135・136）

不定形刃器・不定形剥片がある。全てサスカイト製で、一部に現礫面を残す。

135は不定形剥片である。大きな剥離面が残る。残存長5.6cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmを測る。



第12圖 土製品・石器実測図

136は不定形刃器である。片縁は押圧剥離によって刃部を仕上げている。残存長7.6cm、幅6.3cm、厚さ1.2cmを測る。133は第3層、134は第1層、135・136は第2層より出土した。弥生時代中期。

## 5) まとめ

今回の調査では、A地区で遺物包含層の堆積にかかる旧地形、B地区で土坑4基・溝1条・ピット5個を検出した。調査成果について付近の調査状況を交えて、まとめとしておきたい。

まず、B地区的土坑以下の遺構については、遺構内部から遺物が出土しなかったため、詳細な時期決定は困難である。ただ第3図の上層断面図に示したように、クスノキより北側では地山層の直上面まで現代品を含む表上層が覆っていること、遺構の埋土が表土層と類似すること、などから、出土遺物の所属時期である弥生時代ないし古墳時代の築造とは考えられず、近現代に近い時期が推定される。

いっぽう、A地区的旧地形による凹部周辺からは、多量の弥生土器が出土した。発掘調査に先立つ確認調査でも一定量の弥生土器の出土があり、後述する第15次調査の状況と同じく、弥生時代中期の竪穴住居跡の検出が期待されたが、調査の結果、その痕跡を見出すことはできなかった。

今回の調査地から東へ約100mの地点に位置する第15次調査では、弥生IV期の竪穴住居跡1棟がほぼ完全な形で検出されている。竪穴住居跡は円形を呈し、直径5.8m、深さ0.4mを測るものである。また第15次調査地の付近では、昭和38年、同43年にも竪穴住居跡の存在が確認されたことがあり、周辺では、弥生時代の集落が形成されていたことが知られる。遺構面の標高をみると、第15次調査の竪穴住居跡検出面がT.P.約87m、今回の調査地での第2層上面がT.P.約72mと約15mの比高があることから、多量の弥生土器は、東側に存在した集落からの流れ込みによるものと考えられよう。

弥生土器とともに円筒埴輪が少量認められる。微量の須恵器とともに出土したことから、弥生土器の再堆積の時期が少なくとも古墳時代以降であることが判明すると同時に、属する円筒埴輪の型式が5世紀代にさかのばるものがあることが注目される。元来、山畠古墳群で埴輪を伴う古墳は少なく、現在までのところ、道路を挟んで今回の調査地の北側に所在する36号墳と、西へ約1kmに位置する51号墳(成山古墳)が知られているにすぎない。出土した円筒埴輪を山畠古墳群の生成との関連で、どのように位置付けるかは、周辺の調査状況を待って今後の課題としたい。

## 【参考文献】

- 東大阪市教育委員会 1973 「山畠古墳群 I」  
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会)  
田辺昭三 1981 「須恵器大成」、角川書店  
寺沢薰・森岡秀人編 1989 「弥生土器の様式と編年 近畿編 I」、木耳社  
平井勝 1991 「弥生時代の石器」、ニューサイエンス社  
田中清美 1996 「畿内第III様式土器」「畿内第IV様式土器」(大川清・鈴木公雄・工楽善道編「日本土器事典」、雄山閣出版)  
財団法人東大阪市文化財協会 1999 「山畠遺跡第15次発掘調査概要」  
東大阪市教育委員会 2001 「東大阪市の古墳」

図版 1 山畠遺跡第31次調査 遺構



調査前の状況（北から）



A地区 第2層内須恵器杯  
出土状況（南から）



A地区 作業風景（北から）

図版2

山畠遺跡第31次調査  
遺構



A地区 旧地形の傾斜面（北から）

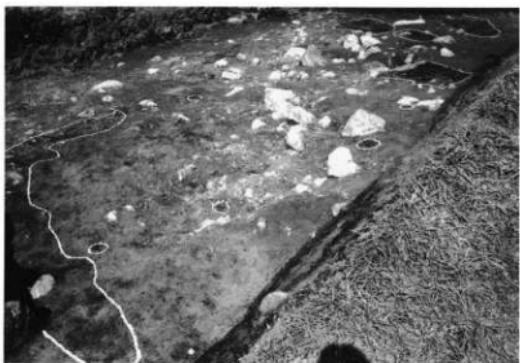


A地区 旧地形の傾斜面（南から）



A地区 旧地形の凹部（西から）

B地区 第4A層上面遺構検出状況  
(南東から)



B地区 第4A層上面遺構掘削後状況  
(南東から)



B地区 SK1～SK4 (北東から)





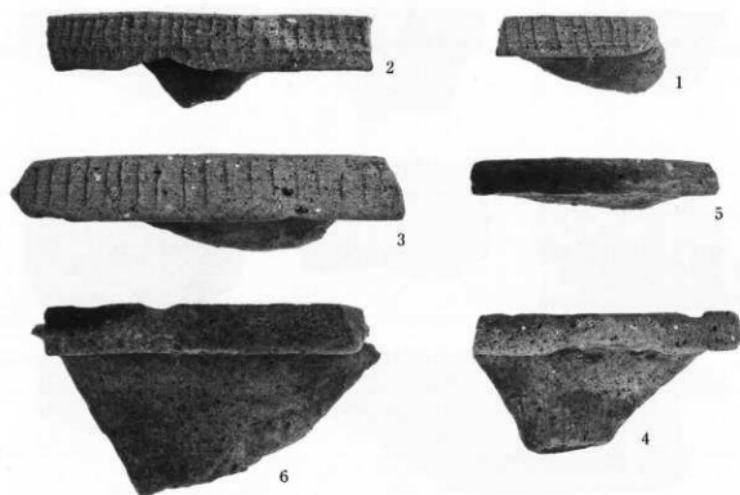
A地区 東壁断面（西から）



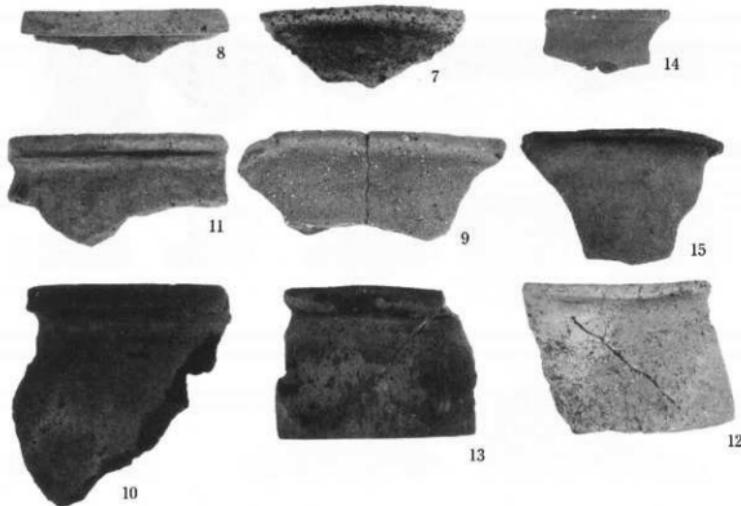
B地区 北壁断面（南から）



B地区 SK1 断面（西から）



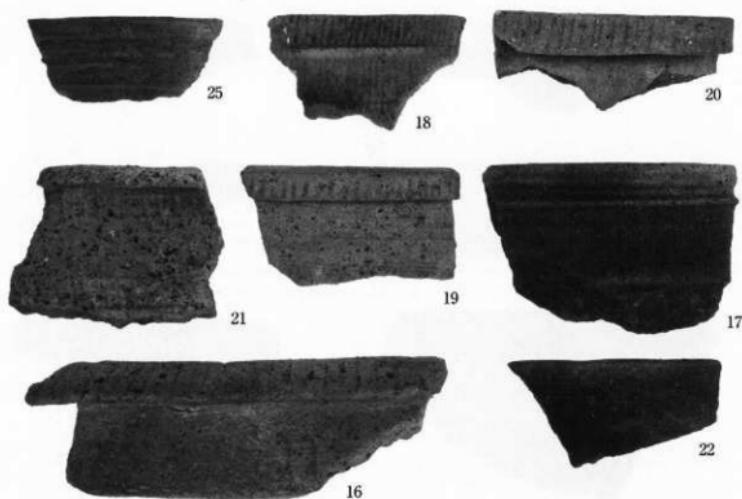
1. 第1層出土弥生土器　壺



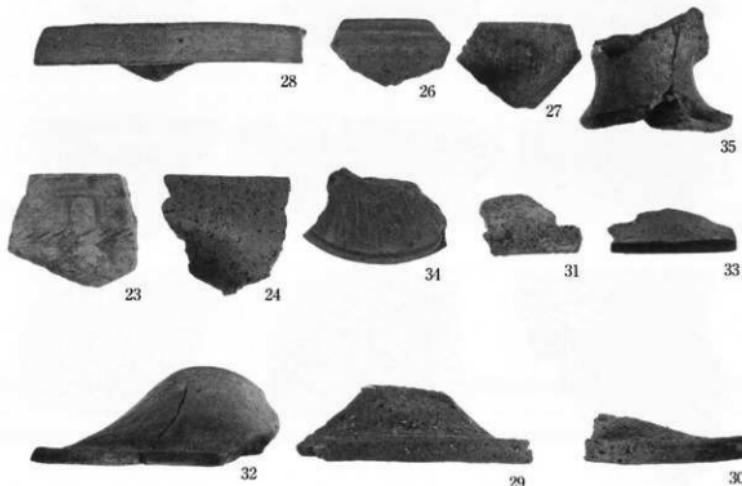
2. 第1層出土弥生土器　甕

図版 6

山畑遺跡第31次調査  
遺物

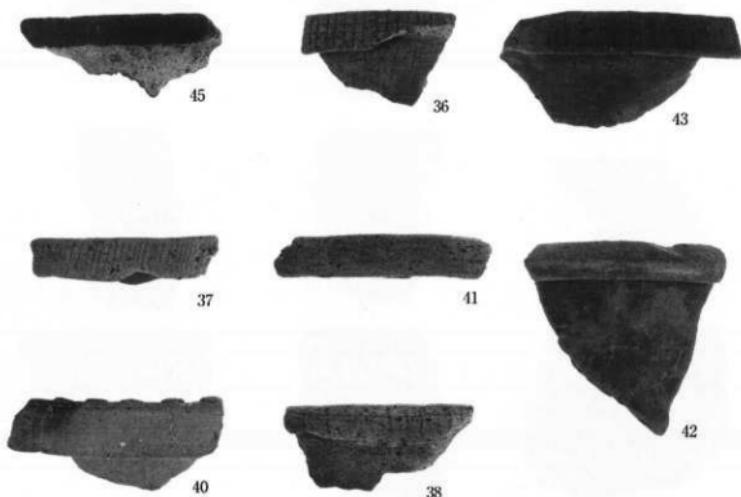


1. 第1層出土弥生土器 鉢・高杯

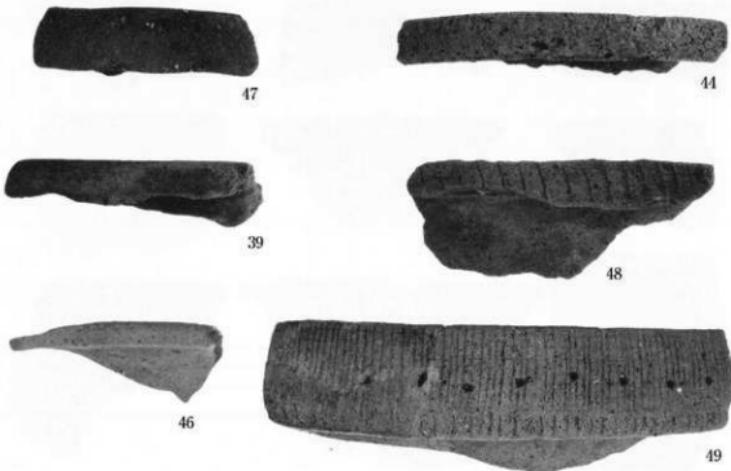


2. 第1層出土弥生土器 高杯・壺蓋・壺蓋・台付鉢

圖版 7  
山烟遺跡第31次調查  
遺物



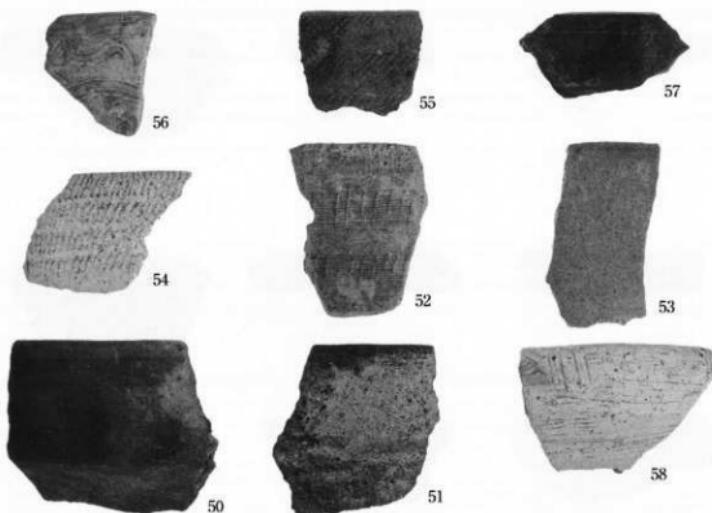
1. 第2層出土弥生土器 瓢



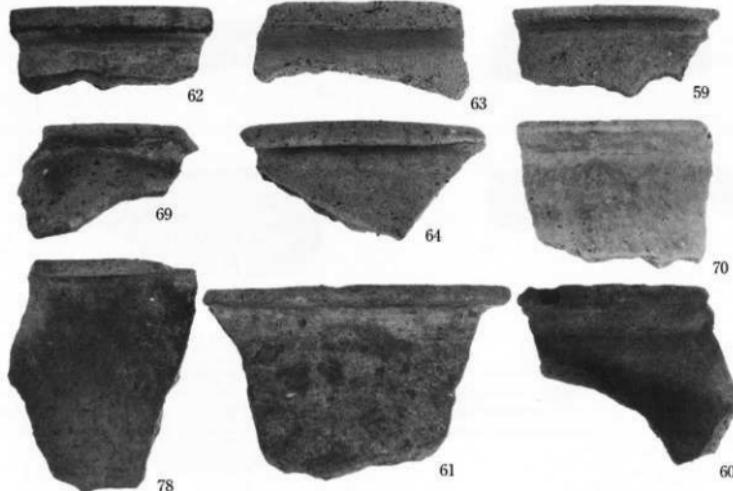
2. 第2層出土弥生土器 瓶

図版 8

山畠遺跡第31次調査  
遺物

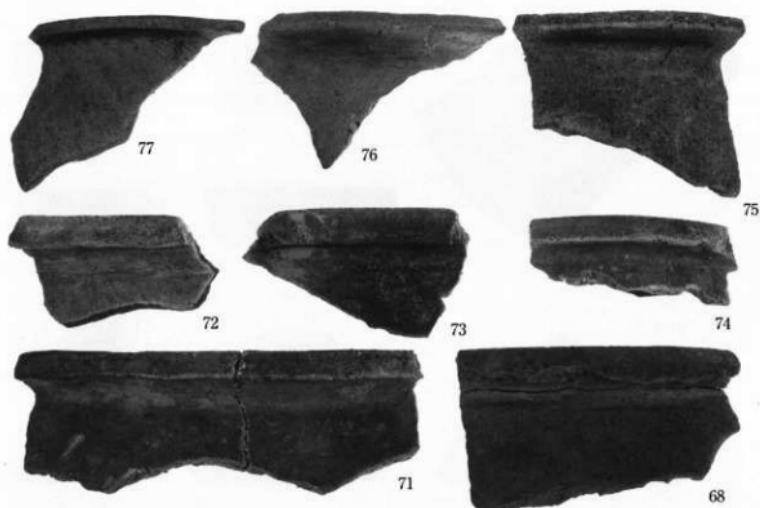


1. 第2層出土弥生土器 瓢・細頸甌

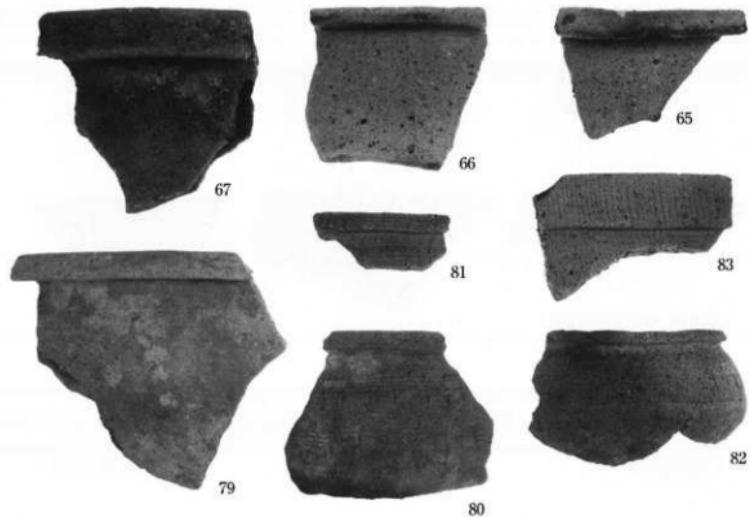


2. 第2層出土弥生土器 瓢

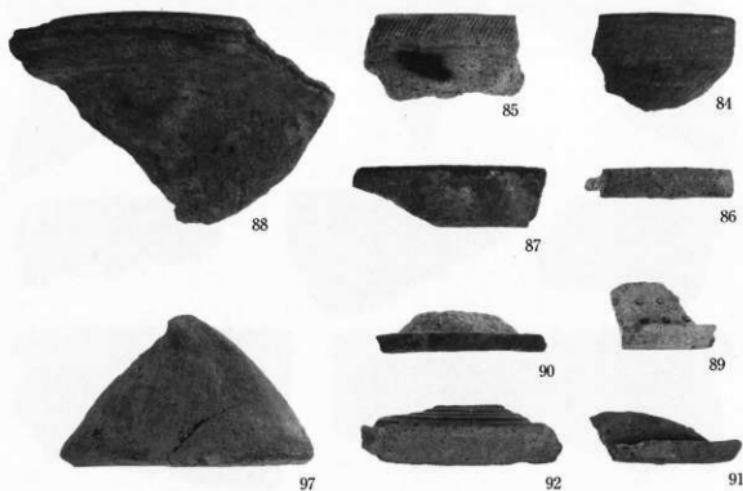
図版9 山畠遺跡第31次調査  
遺物



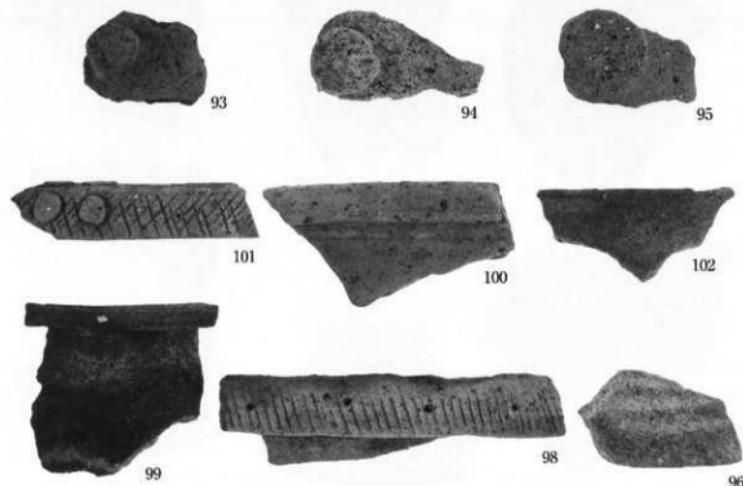
1. 第2層出土弥生土器 壺



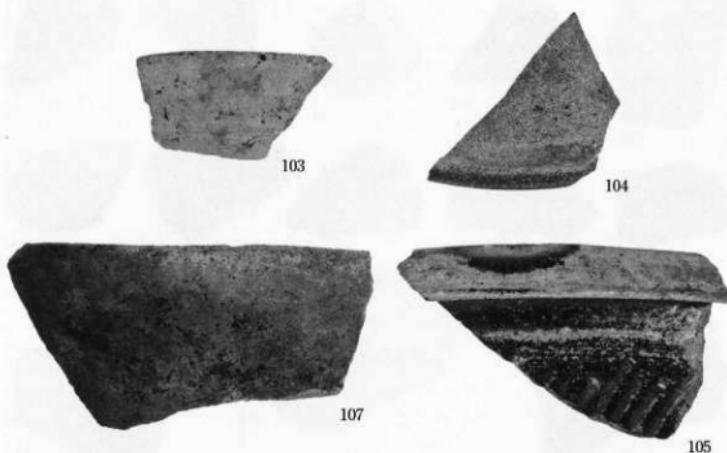
2. 第2層出土弥生土器 壺・鉢



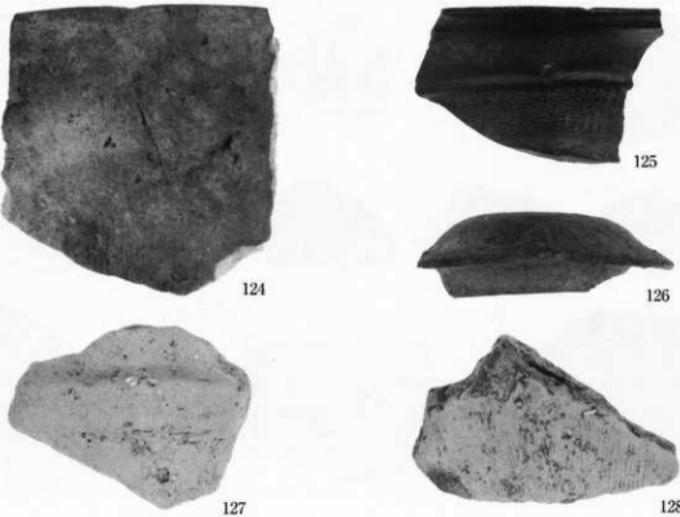
1. 第2層出土弥生土器 高杯・脚部



2. 第2・3・攪亂層出土弥生土器 蓋・脚部・壺・鉢・羹



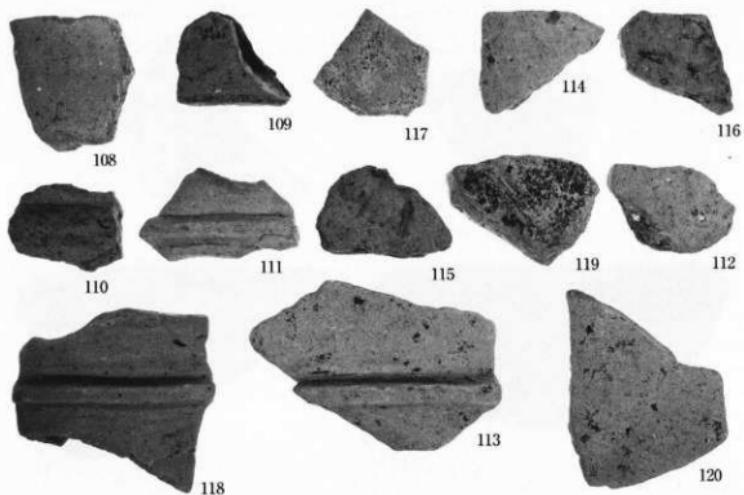
1. 第1・2層出土須恵器 杯身・高杯・器台、瓦質土器 捣鉢



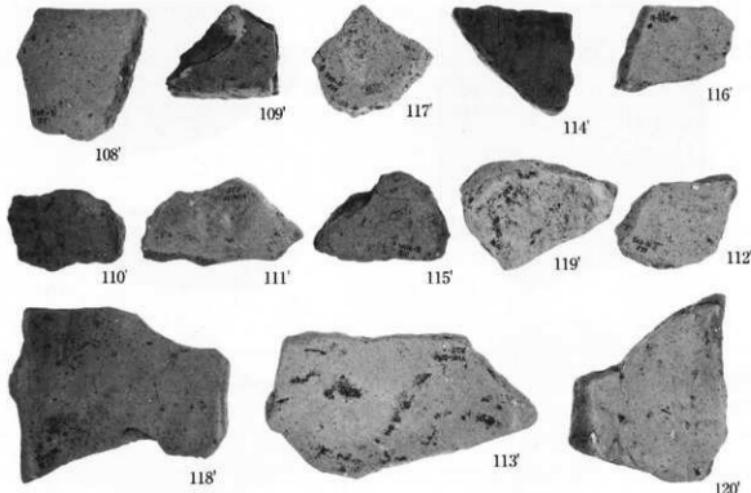
2. 搪亂層出土瓦質土器 捣鉢、須恵器 壺・壺蓋、円筒埴輪

圖版  
12

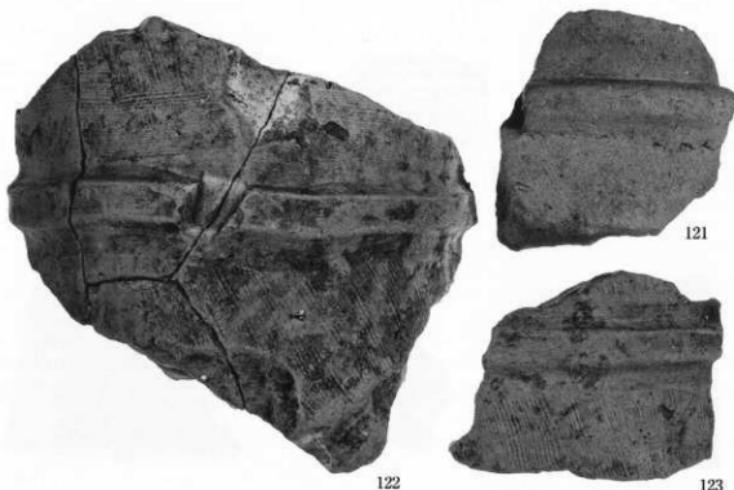
山畠遺跡第31次調査  
遺物



1. 第1・2層出土円筒埴輪（外面）



2. 同上（内面）



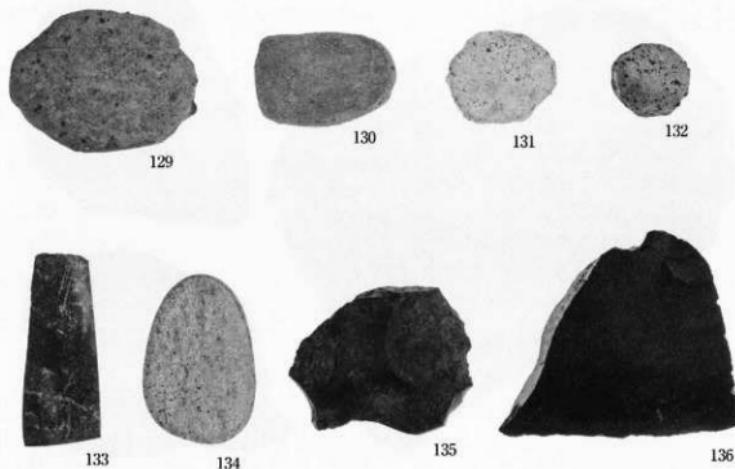
1. 第2・3層出土円筒埴輪（外面）



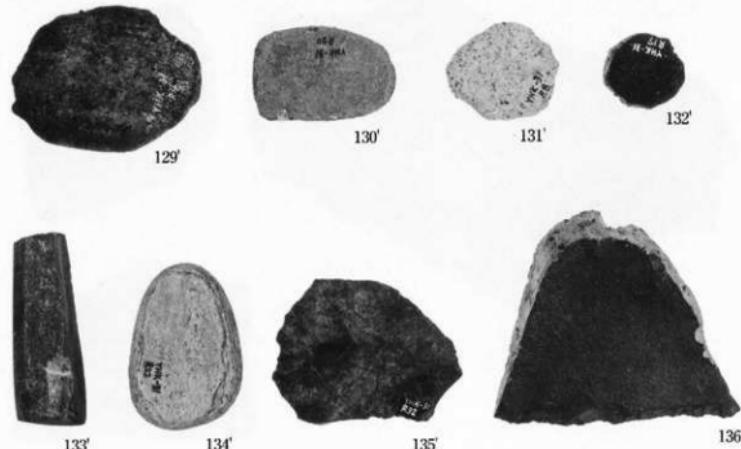
2. 同上（内面）

図版14

山畠遺跡第31次調査  
遺物



1. 土製品・石器 (表)



2. 同上 (裏)

## 第4章 水走氏館跡第4次発掘調査

### 1)はじめに

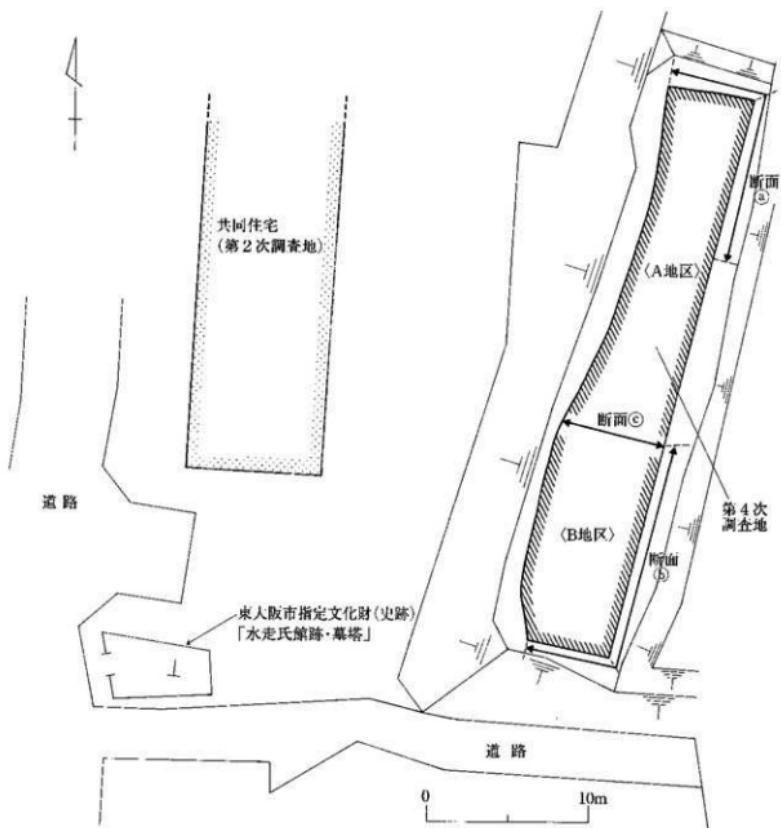
水走氏館跡は、東大阪市五条町に所在する鎌倉時代から室町時代の城館跡である。遺跡の範囲は、東西約250m南北約210mの規模と推定されている。本遺跡は標高約50～100mの山地斜面に立地する。水走氏は平安時代末期から現在の東大阪市・大東市・八尾市にかけて活躍した有力な在地豪族で、枚岡神社の祠官を勤めた。「水走文書」藤原康高譲状写に、「五条屋敷一所」として、(寝)殿・廊・懇門・中門・上屋・厩屋・倉・雜舎が見え、豪族居館を構成する建物の状況を知る貴重な史料となっている。今回の調査地西に水走氏墓塔があり、平成13年11月に東大阪市の史跡に指定された。

水走氏館跡では、昭和48年度にトレント調査(第1次調査)が行なわれて以来、調査例がなかったが、平成12年度に共同住宅建設に伴う発掘調査(第2次調査)が実施された。第1次・第2次調査の結果、室町時代後半以降の遺構は確認されたが、文献史料に頻出する鎌倉時代の遺構は検出されていない。

むしろ、調査地周辺で近世期に大規模な整地が行われた結果、当該期の遺構が滅失した可能性が考



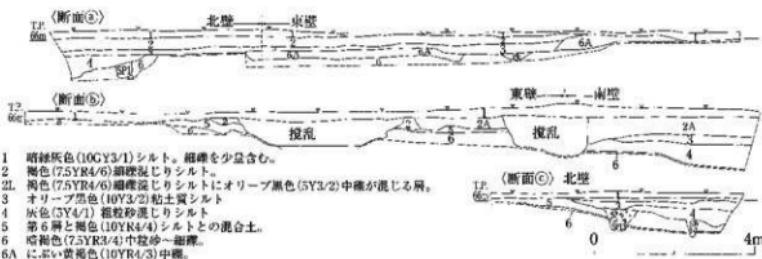
第1図 水走氏館跡第4次調査地と周辺の遺跡



第2図 第4次調査地の位置と周辺の状況  
〔断面図位置④～⑥は第3図に対応〕

えられている。第3次調査は擁壁工事に伴う立会調査で、初めて鎌倉時代の遺構が発見された。ただし立会調査の制約があり、遺構の広がりや性格については不明である。

平成20年2月、東大阪市五条町1317-1番地、1322-1番地の一部において、個人から露天資材置場造成工事に伴う「埋蔵文化財發掘の届出」が提出された。造成工事には切土工事を伴うものであったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を平成20年3月6日に実施したところ、中世期の落ち込みや遺物包含層が検出された。この結果を受けて取扱いを協議し、造成工事により埋蔵文化財が破壊される部分を対象として、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。発掘調査は平成20年5月26日から6月19日まで行った。調査面積は288.51m<sup>2</sup>で、88.51m<sup>2</sup>分の機械掘削・人力掘削に要する経費は調査依頼者が負担した。



第3図 調査地上層断面図

## 2) 調査方法と層位

調査は確認調査の結果に準拠し、第1～3層を重機で除去し、以下を人力で掘削した。排土を場内に仮置きする関係と重機の移動を確保するため、調査対象地を二分し、北側から調査を開始し、埋戻しの終了後に南側を調査した。便宜的に北側(第2回断面⑤以北)をA地区、南側(同以南)をB地区と呼んでいる。なおA地区では東から西へ、B地区では北西から南東へ、ともに傾斜面へ流下する溝状の落ち込みが計2箇所見られたが、その内部に現代品を含んでいたため、擾乱として取り扱った。検出した層位は次のとおりである。

第1層 暗緑色(10GY3/1)シルト。細礫を少量含む。木の根が多い。調査地は近年まで耕地として利用されており、その耕土にあたる。人為的な現代の盛土層は認められなかった。

第2層 褐色(7.5YR4/6)細礫混じりシルト。床土層である。第2層の分布は局所的で、調査地の東側では、第1層の下部に直接第6層(地山層)が露出する箇所が多く見られた。B地区の南側のみ第2層の下部に別の層が堆積していた。これを第2L層とした。

第2L層 褐色(7.5YR4/6)細礫混じりシルトにオリーブ黒色(5Y3/2)中礫が混じる層。

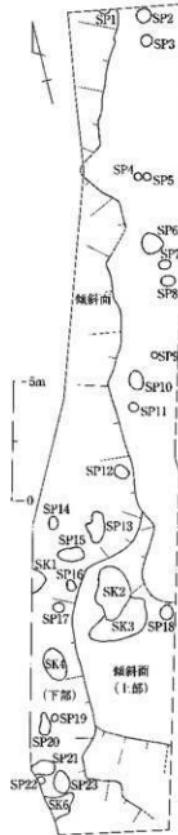
第3層 オリーブ黒色(10Y3/2)粘土質シルト。調査地西側で検出した傾斜面に伴う整地層である。古墳時代から室町時代までの遺物を含む。

第4層 灰色(5Y4/1)粗粒砂混じりシルト。第6層のブロック土を少量含む。傾斜面に伴う整地層で西側に分布。古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・奈良時代の土師器を含む。

第5層 第6層と褐色(10YR4/4)シルトとの混合土。上面は遺構面を形成する。古墳時代の土師器・韓式系土器・須恵器・埴輪を含む。埴輪には円筒埴輪のほか、馬形埴輪(第9図54)が見られる。

第6層 暗褐色(7.5YR3/4)中粒砂～細礫。地山層。A地区北側では第6層の上部に別の層が堆積していた。これを第6A層とした。

第6A層 にぶい黄褐色(10YR4/3)中礫。



第4図 検出遺構全体図

第1表 ピット・一覧表

遺構番号	地区	平面形態	規模(cm)			埋土	出土遺物
			長径	短径	深さ		
SP1	A 地区	円形	42+	17+	40	A	(なし)
SP2	A 地区	円形	60	60	16	A	師・須
SP3	A 地区	円形	50	48	9	A	(なし)
SP4	A 地区	円形	30	29	12	A	(なし)
SP5	A 地区	円形	31	30	18	A	(なし)
SP6	A 地区	円形	91	90	44	A	師・瓦
SP7	A 地区	楕円形	47	32	8	A	(なし)
SP8	A 地区	楕円形	57	46	8	B	(なし)
SP9	A 地区	円形	22	21	11	B	(なし)
SP10	A 地区	楕円形	81	61	10	B	人形土製品
SP11	A 地区	円形	38	37	20	B	(なし)
SP12	A 地区	円形	60	60	12	B	(なし)
SP13	A 地区	長楕円形	135	80	57	B	師・須・輪・瓦質・埴輪
SP14	A 地区	楕円形	52	33	43	B	(なし)
SP15	B 地区	長楕円形	104	52	28	A	師
SP16	B 地区	円形	46	40	50	A	師
SP17	B 地区	円形	49	43	47	A	師
SP18	B 地区	円形	59	58	11	C	(なし)
SP19	B 地区	円形	30	26	17	A	(なし)
SP20	B 地区	長楕円形	93	44	27	A	師・埴輪
SP21	B 地区	楕円形	93	63	42	A	師・須・埴輪
SP22	B 地区	円形	32	30+	9	A	(なし)
SP23	B 地区	楕円形	94	71	22	D	(なし)

〔規模〕+はその数値以上を示す。

〔埋土〕A:灰色(N5/0)粗粒砂混じりシルト

B:灰色(N5/0)粗粒砂混じりシルトに第6層がブロック状混入

C:第5層にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトがブロック状混入

D:オーラープ灰色(25GY5/1)細粒砂混じりシルト

〔出土遺物〕師は土師器、須は須恵器、輪は輪式系土器、瓦は瓦、瓦質は瓦質土器を示す。

ピットの規模・出土遺物等は第1表にまとめた。平面形は円形ないし楕円形で、方形を除くものはない。規模では大小あるが、長径で50cmを超えるものが一定量存在する。深さも40cm以上を測るものが7個あることが特徴である。埋土は4種類に分類されるが、埋土Aと埋土Bの相違は第6層の含有の有無があるので、これを同種と見ると、一部以外はすべて埋土AないしBとなる。いっぽう、ピット内の遺物は韓式系土器や埴輪など古墳時代に属するものが目立つが、SP10から16世紀後半の人形土製品、SP13から瓦質土器が出土していることから、埋土が近似するピットの所属時期は戦国時代ないしそれ以降とみるべきと考えられる。古墳時代の遺物は混入品と思われる。

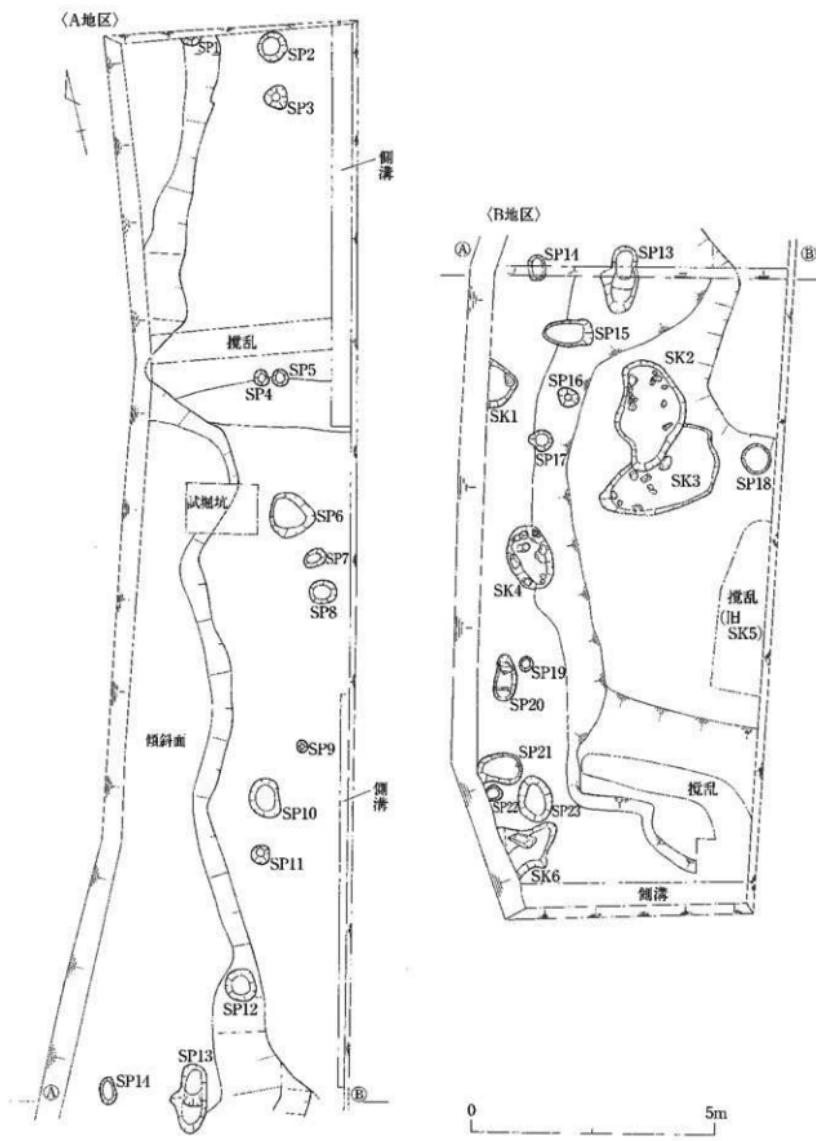
土坑は全てB地区で検出した。SK1は円形を呈すると思われる。現存長で長径1.01m、短径0.61m、深さ0.12mを測る。遺構のラインが調査地外へ延びると判断し、土坑とした。埋土は灰色(N5/0)粗粒砂混じりシルトである。土師器・須恵器・埴輪が出土した。SK2とSK3は長楕円形を呈する。SK2は長径2.25m、短径1.47m、深さ0.13mを測る。埋土は灰色(N5/0)粗粒砂混じりシルトである。土師器・韓式系土器・須恵器が出土した。SK2と切り合ったSK3は、長径2.71m、短径1.47m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土混じりシルトである。SK2、SK3とも上坑内部に拳大の礫を多く含む。SK2の埋土がピットの埋土Aにあたることから、SK3は中世初期段階に造られた可能性がある。SK4は楕円形を呈する。長径1.33m、短径0.89m、深さ0.23mを測る。土坑の肩から底面への傾斜面に人頭大の礫が集積していた。埋土は第5層にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトがブロック状に混入する層である。遺物は出土しなかった。SK6は不定形を呈する。東西1.15m、南北1.10m、深さ0.16mを測る。埋土は灰色(N5/0)粗粒砂混じりシルトである。土師器・瓦質土器が出土した。

## 3) 傾斜面と遺構

A地区・B地区的西側で見られた傾斜面と遺構について、一括して説明する。

A地区的調査では、傾斜面を覆う層が第4層のみで、しかも遺物が少少であったため、第6層まで掘り下げ、傾斜面の検出につとめていた。しかし、B地区では第4層の下部に第5層が遺存し、かつ遺物を中量含んでいたために、第5層上面での遺構検出に切り替えた。

第5～6層上面で、ピット23個・土坑6基を検出した。このうちSK5は扰乱であることが判明したため、遺構から除外した。またピットと土坑の区別は便宜的なものである。



第5図 検出透構平面図

#### 4) 出土遺物

弥生時代～戦国時代の遺物が出土した。遺物は土器、埴輪、上製品、瓦などがある。古墳時代の遺物が多い。以下、遺構および各層位ごとに分けて説明を記す。犬形土製品は末尾に記載した。本文中に調整法を記しているが、口縁部と裾端部のヨコナデ調整は普遍的のであえて記さない。

##### ① 遺構出土遺物

###### SK1出土遺物（第6図 1）

1は円筒埴輪の体部である。突帯は高く突出し、断面形は台形である。風化が著しく調整法は不明である。焼成は土師質で無黒斑である。色調は黄橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。

###### SK2出土遺物（第6図 2～4） 韓式系土器と土師器がある。

2は韓式系上器の変である。胸部の破片と思われる。外面は格子目のタタキ調整する。凹部が一辺0.2～0.3cmの正格子である。内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ消し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。胎土は粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。焼成は軟調で土師質である。色調は橙色を呈する。5世紀中葉～6世紀初頭。

3・4は土師器である。皿と竈の器種がある。3は皿である。『平城宮発掘調査報告X I 本文』（奈良国立文化財研究所1982）の分類における皿Aである。体部はやや上方へ立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚する。風化が著しく調整法は不明である。平城宮II期に該当。8世紀前半。4は竈である。欠損しているが、角状把手と庇を持つ移動式の竈である。体部は内傾して立ち上がり、下方へ大きく広がる。口縁部は三角形状に肥厚する。口縁端部は広い面を持つ。外面は稜線がはしる。口縁部外面の稜線より上位はナデ調整する。下位はユビオサエによる指頭圧痕が残る。胴部外面は15条1単位のハケメ調整、内面はナデ調整する。内面は被熱により黒褐色に変色する。胎土中に0.1～0.3cmの長石、角閃石、石英、雲母を多量に含む。色調は黒褐色を呈する。生駒西麓産。6世紀前半。

###### SP6出土遺物（第6図 10）

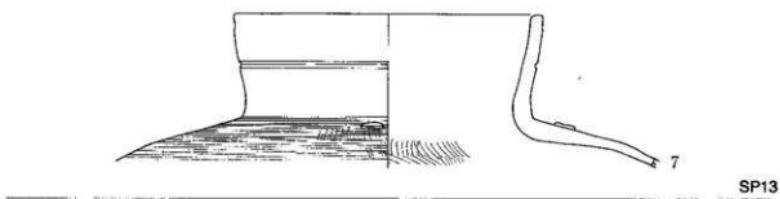
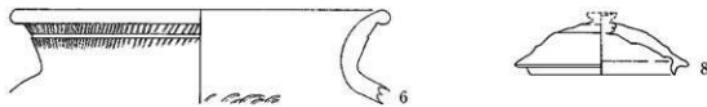
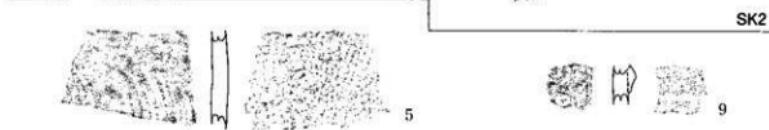
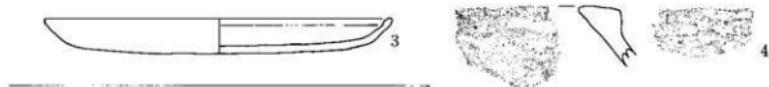
10は平瓦である。凹面に継横6本/cmの布日痕が残る。凸面は繩日のタタキ調整する。側面と凹面側の縁をケズリで面取りする。残存長7.6cm、残存幅6.7cm、厚さ2.4cmを測る。胎土中に0.1～0.4cmの長石・クサリ繊・黒色砂粒を含む。色調は灰色を呈する。白鳳～奈良時代。

###### SP13出土遺物（第6図 5～9） 韩式系土器、須恵器、埴輪がある。

5は韓式系土器の変である。胸部の破片と思われる。外面は格子目のタタキ調整する。凹部が一辺0.2～0.3cmの正格子である。内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ消し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。胎土は粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。焼成は軟調で土師質である。色調は橙色を呈する。5世紀中葉～6世紀初頭。

6～8は須恵器である。壺と蓋の器種がある。6・7は壺である。6は口縁部が外反する。口縁端部は外側へ折り曲げ、丸く肥厚する。口縁部に1条の四線文と櫛描列点文を施す。体部内面は同心円の当て具痕が残る。TK10型式に該当。6世紀後半。7は肩部から体部へ直角に近い角度で鋭く屈曲し、口縁部は直立する。頸部に1条の四線文を施す。肩部は円形浮文を貼り付ける。体部外面は平行のタタキの後、カキメ調整する。内面は同心円の当て具痕が残る。TK43型式に該当。6世紀末。8は脚付長頸壺か瓶とセットになる蓋である。かえりは長く、口縁部より下方へ伸びる。天井部外面は約1/2の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他は回転ナデ調整する。TK10型式に該当。6世紀中葉。

9は円筒埴輪の体部である。突帯は低く突出し、断面形は三角形である。風化が著しく調整法は不明である。焼成は土師質で無黒斑である。色調は橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期



第6図 SK1・2、SP6・13・21出土遺物実測図

は不明である。

SP21出土遺物（第6図 11・12）土師器と円筒埴輪がある。

11は土師器の壺である。焚口部であり、接地部分の破片である。幅1.8cmの付け底を持つ移動式の壺である。体部は直線的に立ち上がり、接地面は面取りする。焚口の周間に幅の広い鶴を庇状に貼り付ける。焚口部の側面端部は面を持つ。庇部はナデ調整する。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面は板状工具によるナデ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。庇部外面の接合部分にも指頭圧痕が残る。胎土中に0.1～0.3cmの長石、角閃石、石英、雲母を多量に含む。生駒西麓産。色調はにぶい赤褐色を呈する。8世紀前半。

12は円筒埴輪の口縁部である。上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。外面はナナメハケ調整する。内面はナデ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。焼成は上師質で無黒斑である。色調は橙色を呈する。川西宏幸氏の編年V期に該当。6世紀。

## ② 遺物包含層出土遺物

第1～3層出土遺物（第7・8図 13～34）弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、埴輪がある。

13は弥生土器の鉢である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はナデ調整の後、ヘラケズリ調整する。内面はナデ調整する。胎土中に0.1～0.3cmの長石、角閃石、石英、雲母を多量に含む。生駒西麓産。畿内第II様式。

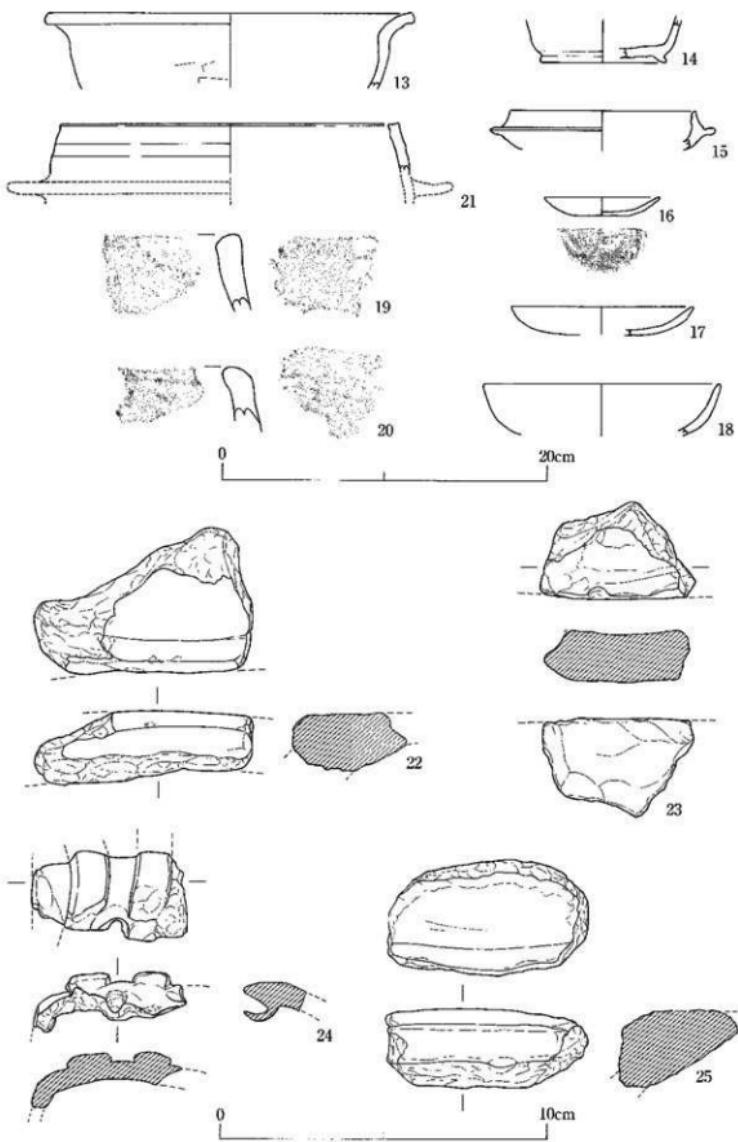
14・15は須恵器の杯身である。14は底部にハの字状の比較的低い高台がつく。体部外面は高台から体部際にかけて回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。MT21型式に該当。8世紀前半～中。15は体部が浅く、口縁部の立ち上がりは短い。内傾して伸びた後、外湾する。受部は外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部内外面は回転ナデ調整する。TK43型式に該当。6世紀末。

16～20は土師器である。皿・壺の器種がある。16～18は皿である。大・中・小の大きさがある。体部は緩やかに内湾し、外上方へ立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。体部外面はナデ調整する。16は底部に右回転の糸切り痕が残る。12世紀後半～14世紀後半。19・20は壺である。体部が内傾して立ち上がる。口縁端部は面を持つものと丸く終わるものがある。風化が著しく調整法は不明であるが、内面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。内面は被熱により暗褐色～黒褐色に変色する。胎土中に0.1～0.2cmの長石、角閃石、石英、雲母を含む。生駒西麓産。色調は褐色を呈する。7世紀末～8世紀前半。

21は瓦質土器の羽釜である。口縁部は内傾し、口縁端部が面を持つ。口縁部外面に2条の緩い段が付く。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。色調は灰白色を呈する。体部外面に煤が付着する。河内・和泉型。15世紀。

22～34は埴輪である。形象埴輪と円筒埴輪がある。22・23・25は形象埴輪と思われるが、器形・部位の特定はできない。22・25は体部内外面をナデ調整する。厚さは1.9～2.1cmを測る。胎土は粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。色調は橙色を呈する。調整、色調、胎土から同一個体の可能性もある。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。23は底部が平らな面を持ち、ワラ状の圧痕が残る。体部外面は板状工具によるナデ調整する。内面はナデ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。厚さは2.1cmを測る。胎土はやや粗く、0.1～0.2cmの長石を多く含む。色調は橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。24は馬形埴輪である。馬具を装着した馬の尻輪部分である。2本の尻輪の間に0.5cmの孔を穿つ。内外面はナデ調整する。0.05cmの長石を若干含むが、胎土は精良である。色調はにぶい黄橙色を呈する。5世紀中葉～6世紀中葉。

26～34は円筒埴輪である。全て焼成は上師質で無黒斑である。26は口縁部である。上方へ伸びる。



第7図 第1～3層出土遺物実測図

口縁端部は面を持つ。体部内外面をナナメハケ調整した後、口縁部内外面を粗いナデ調整する。線刻がある。色調はにぶい橙色を呈する。27は基底部である。底部は平らな面を持ち、外反気味に立ち上がる。体部外面は板状工具によるナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明であるが、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。28～34は体部である。28の突帯は高く突出し、断面形は台形である。風化が著しく調整は不明である。円形か半円形の透かしの孔が一部残存する。色調は明赤褐色を呈する。29の突帯は比較的高く突出し、断面形は台形である。体部外面はタテハケ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。色調は明赤褐色を呈する。30の突帯は低く突出し、断面形は三角形である。風化が著しく調整法は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。31の突帯は比較的高く突出し、断面形はM字状である。風化が著しく調整法は不明である。色調は橙色を呈する。32の突帯は高く突出し、断面形は台形である。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はナナメハケ調整する。色調はにぶい橙色を呈する。33は体部外面をタテハケ調整、内面をナナメハケ調整する。26と同様に体部内外面の上部にナデ調整がみられることから、口縁部に近い部分と思われる。色調はにぶい橙色を呈する。34は体部外面をナナメハケ調整する。内面はナデ調整し、粘土紐の接合痕が顕著に残る。色調はにぶい橙色を呈する。26・29・33・34は川西宏幸氏の編年V期に該当。6世紀。その他も古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。

#### 第3層出土遺物（第8図 35～38）土師器、埴輪、瓦がある。

35は土師器の羽釜である。長胴の羽釜である。口縁部はやや直立気味に外反し、口縁端部は丸く終わる。風化が著しく調整法は不明である。胎土中に0.1～0.3cmの角閃石・長石・石英・雲母を多量に含む。生駒西麓産。色調はにぶい褐色を呈する。7世紀前半。

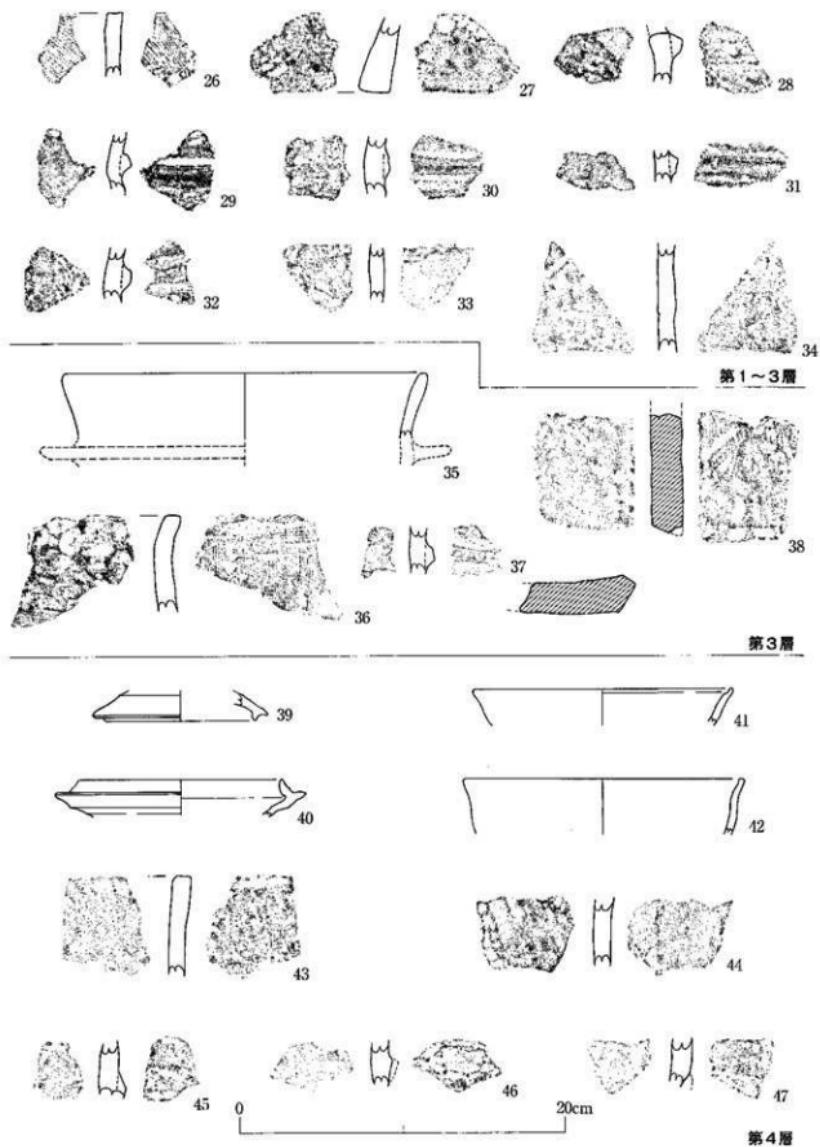
36・37は円筒埴輪である。全て焼成は土師質で無黒斑である。36は口縁部である。やや外反しながら上方に伸びる。口縁端部は面を持つ。体部外面はタテハケ調整した後、B種ヨコハケ調整をする。その後、口縁部に粗いヨコナデ調整する。内面は上部をナデ調整し、粘土紐の接合痕とユビオサエによる指頭圧痕が顕著に残る。下部はナナメハケまたはヨコハケ調整する。色調はにぶい橙色を呈する。川西宏幸氏の編年IV期に該当。5世紀後半。37は体部である。突帯は比較的高く突出し、断面形はM字状である。体部外面はナナメハケ調整、内面はナデ調整する。橙色を呈する。川西宏幸氏の編年V期に該当。6世紀。

38は平瓦である。凹凸面は風化が著しく調整法は不明である。側面と凹面の側縁はケズリで面取りする。残存長7.3cm、残存幅7.2cm、厚さ2cmを測る。胎土中に0.1～0.3cmの角閃石・長石・石英・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。色調はにぶい褐色を呈する。白鳳～奈良時代。

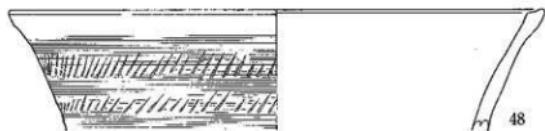
#### 第4層出土遺物（第8・9図 39～48）須恵器、土師器、埴輪がある。

39・40・48は須恵器である。蓋・杯身・壺の器種がある。39は脚付長頸壺か椀とセットになる蓋である。かえりは長く、口縁部より下方へ伸びる。天井部外面は約1/2の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他は回転ナデ調整する。TK10型式に該当。6世紀中葉。40は杯身である。体部は浅く、口縁部の立ち上がりは短い。内傾して伸びた後、外湾する。受部は外上方へ伸びる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。体部外面は受部直下近くから回転ヘラケズリ調整する。その他は回転ナデ調整する。TK43型式に該当。6世紀末。48は大型の壺である。口縁部が大きく開き上方へ直線的に伸びる。口縁端部は内傾し、段状の凹面をなす。頸部は弱いカキメ調整し、その上から獣描列点文を2帯施す。外外面は降灰による自然釉灰が残る。TK217型式に該当。7世紀前半。

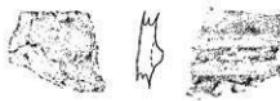
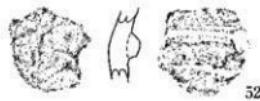
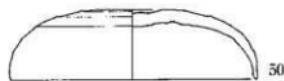
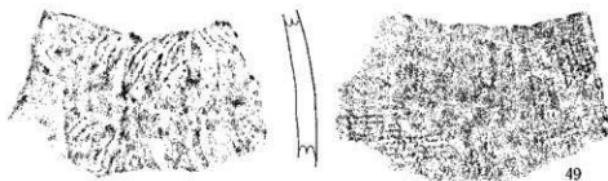
41・42は土師器の杯である。杯Aである（奈良国立文化財研究所1982）。口縁部は弱く外反し、口縁端部を内側に巻き込み肥厚する。端部の肥厚は概して小さい。風化が著しく調整法は不明である。



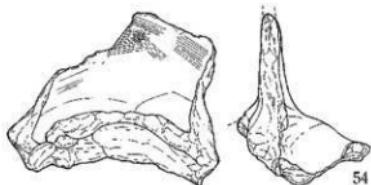
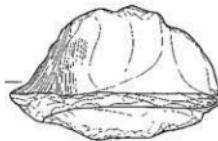
第8図 第1~3層・第3層・第4層出土遺物実測図



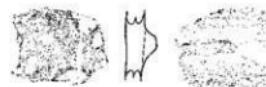
第4層



第5層



0 10cm



0 10cm  
搅乱層

第9図 第4層・第5層・搅乱層出土遺物実測図

平城宮Ⅱ～Ⅲ期に該当。8世紀前半～中葉。

43～47は円筒埴輪である。全て焼成は上師質で無黒斑である。43は口縁部である。上方へ伸びる。口縁端部は面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。44～47は体部である。全て色調は橙色を呈する。44は体部外面をタテハケ調整、内面をナデ調整する。45は突帯が一部欠損しているが、突帯は低く突出し、断面形は三角形に近い。体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整する。46は欠損しているが突帯がつくものである。風化が著しく調整法は不明である。47も欠損しているが突帯がつくものである。体部外面はナメハケ調整する。突帯の部分には貼り付けられたヨコナデ調整が残る。内面はナデ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。44・45・47は川西安幸氏の編年V期に該当。6世紀。その他も古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。

第5層出土遺物（第9図 49～54）韓式系上器、須恵器、上師器、埴輪がある。

49は韓式系土器の甕である。胴部の破片と思われる。外面は格子目のタタキ調整する。凹部が一辺0.2～0.3cmの正格子である。内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ消し、ユビオサエによる指圧痕が残る。外面は黒斑が広範に残る。胎土は粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。焼成は軟調で土師質である。色調は橙色を呈する。5世紀中葉～6世紀初頭。

50は須恵器の蓋杯である。口縁部と天井部の境が不明瞭である。天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描き、口縁端部は丸く終わる。天井部外面は約1/2の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他は回転ナデ調整する。TK10型式に該当。6世紀後半。

51は土師器の甕である。小型の甕である。口縁端部は外反し、端部はやや尖り気味に終わる。風化が著しく調整法は不明である。口縁部内面は煤が付着する。5世紀中葉～6世紀初頭。

52～54は埴輪である。円筒埴輪と形象埴輪がある。52・53は円筒埴輪である。全て焼成は上師質で、無黒斑である。52の突帯は高く突出し、断面形は不整形である。体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整する。色調はにぶい橙色を呈する。川西安幸氏の編年V期に該当する。6世紀。53の突帯は高く突出し、断面形は台形である。体部外面はB種ヨコハケ調整する。色調は橙色を呈する。川西安幸氏の編年IV期に該当する。5世紀後半。54は馬形埴輪である。馬具を装着した馬の前輪または後輪の鞍である。鞍外面は8条/cmのハケメ調整、背部分はナデ調整する。内面はナデ調整し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。5世紀中葉～6世紀中葉。

搅乱層出土遺物（第9図 55～56）55・56は埴輪である。形象埴輪と円筒埴輪がある。

55は形象埴輪と思われるが、器形・部位の特定はできない。内外面はナデ調整する。胎土はやや粗く、0.1～0.2cmの長石を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。56は円筒埴輪である。突帯は高く突出し、断面形は台形である。体部外面はB種ヨコハケ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。焼成は上師質で無黒斑である。色調は黄橙色を呈する。川西安幸氏の編年IV期に該当する。5世紀後半。

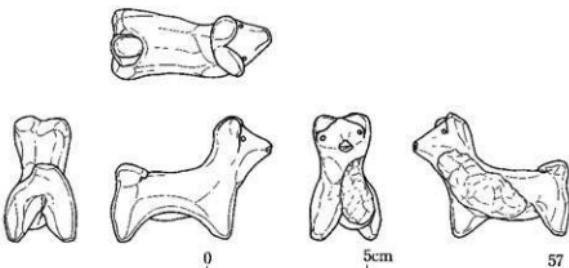
### ③ミニチュア土製品（第10図 57）

57は犬形土製品でSP10出土。手づくね（手びねり）で作られている。円錐形の顔に垂れた耳、横線のみで表現した口、小さな眼窓を持つ。眼窓は0.15cmの刺突によって表現する。胴部は胴長で太く、断面形は円形に近い。尻尾は巻尾を表現している。首をわずかにかしげている。内外面全体は丁寧にナデ調整する。焼成は土師質である。胎土は精良である。色調は灰黄色を呈する。左前脚が欠損しているが、その他は残存している。体長5.0cm、体高3.8cm、体幅2.2cmを測る。16世紀前半。

## 5)まとめ

今回の調査では、ピットと土坑6基を検出した。

出土量は多くはないが、馬形埴輪をはじめとする古墳時代の遺物や戦国時代の犬形土製品などがあり、バリエーションに富んでいる。ここでは、遺構・遺物から今回の調査結果をまとめておきたい。



第10図 犬形土製品実測図

まず遺構についてみてみよう。当初、南北に走る傾斜面は現況崖面に由来するものと考えたが、調査の結果、ピット・土坑に先立つ旧地形であることが判明した。遺構形成時の整地層は第5層で、5世紀中葉～6世紀後半の土器器、韓式系土器、須恵器・埴輪が含まれているが、後述の理由により整地時期は、「水走文書」に見える五条屋敷の造成時期前後まで下る可能性が高い。平成12年度の第2次調査でも後世の層から埴輪が出土しており、屋敷地造成以前に、周辺に古墳が存在したものと考えられる。次にSP1ほか6個のピットは深さ40cm以上で、概ね径も50cm前後を測る。これらのピットは検出した位置関係から、樹列の可能性が指摘できる。ピットはSP2からSP10までは南北に連なり、そこからSP22まではやや西に振りながら南へ続く。樹列の妥当性をひとまずおくとしても、今回の調査地に何らかの館内施設(諸施設の集合を「水走館」と仮称する)があったことがわかる。

それでは、ピットの時期はいつにあるのか。埋土BをもつSP13からは瓦質土器片が見られ、遺構面上部を覆う第1～3層から15世紀代の瓦質土器器が出土した(第7図21)。いっぽう、同じく埋土BのSP10から犬形土製品が出土した。埋土Aと埋土Bの相違は第6層のブロック土の含入有無であることなどから、今回検出したピットは、埋土が全く異なるSP18・23などごく一部を除き、室町時代後期から戦国時代にかけて造られたものと推定できよう。水走左近有忠が織田信長に逐われて大和に走り、「邸舎(水走館—筆者注)ついに壇とな」(『大阪府全志』)ったとされる天正7年(1579)はまさにこの時期にあたる。犬形土製品は手づくねで成形されたミニチュアの土製品である。鶴谷和彦氏(鶴谷2006)に拠ると、犬形土製品は全国で43遺跡が集成されている。このうち38遺跡分について第2表にまとめてみた。城館跡が19遺跡で50%を占める。また近畿地方の遺跡に偏在する傾向が強い。城館跡は文献史料によって廃城時期を押さえられるため犬形土製品の下限が知られる。そうすると、犬形土製品は水走左近有忠の水走館廃絶前後に伴う遺物と考えられよう。江浦氏の大坂城跡出土犬形土製品の分類(江浦2000)によると、小型品(A i類)・極小型品(A ii類)・大型品(B類)とされる中で、本遺跡出土例はA i類に相当する。大坂城跡で最も多く出土するタイプである。では、犬形土製品の性格はいかに位置づけられるであろうか。この点については岡本氏の論考に詳述がある(岡本1993)。これに拠ると、歴史資料や絵画資料、民俗例を駆使され、犬形土製品には安産のお守りの意味のほかに、広く破邪効果が期待されたと考えられた。この点について示唆的であるのが、『春日権現鏡記』で魔除けの横で黒犬が吼える場面である。破邪効果を象徴するように見える。しかし、犬形土製品は大坂城跡や堺環濠都市遺跡を除き1遺跡あたり1点ないし数点の出土にとどまっており、人々の広い願いを表す遺物と考えると、今までの出土量が少ないようと思われる。今後の課題としたい。最後に報告書作成にあたりご教示いただいた鶴谷和彦(堺市)、岡本桂典(高知県)の両氏に感謝いたします。

第2表 犬形土製品出土一覧表

No.	遺跡名	所在地	出土遺物・層位	所属時期およびその参考事項
1	梁川城跡	福島県伊達市	包含層	16世紀前半～文禄(1592-1595)。
2	馬庄城跡	富山県上市町	上部 SK1275	16世紀代。
3	朝日西遺跡	愛知県清須市	大浦 SD11下層	16世紀後半～17世紀初頭。
4	妙空寺遺跡	滋賀県大津市	津 SD465	大室I・II期(1490-1570)。
5	古武城遺跡	滋賀県高島市	集石遺構	16世紀後半。落城は天文11年(1582)。
6	平安京左京一条 三坊十九町	京都府京都市	塚2	II-2条城成立初期内。II-2条城は永祿12年(1569)～元亜4年(1573)分級。
7	赤堀城跡	三重県四日市市	(不明)	落城は天文3年(1575)。
8	田中名遺跡	三重県津市	包含層	(不明)
9	正法寺山莊跡	三重県鈴鹿市	(不明)	15世紀後半～16世紀代。
10	鳳鳴谷船跡	三重県伊賀市	(不明)	15世紀後半～16世紀代。
11	小糸氏船跡	三重県伊賀市	(不明)	天文年間(1573-1591)に取り壊し。
12	神戸周辺	三重県伊賀市	(不明)	(不明)
13	芝ノ前遺跡	奈良県御所市	包含層	16世紀代。瓦質主器共伴。
14	瓦戸森田遺跡	奈良県香芝市	包含層	近世。
15	浮雲遺跡	奈良県奈良市	井戸 SE019	近世陶器伴出。
16	平城京左京一・二・三坊	奈良県奈良市	包含層	中世末～近世。
17	筒井城跡	奈良県筒井郡山市	不明 SX01	16世紀後半。
18	郡山城跡	奈良県大和郡山市	表塚	16世紀～18世紀土器伴出。
19	保津宮古遺跡	奈良県田原本町	包含層	近世以降。
20	太田遺跡	奈良県吉野市	包含層	近世以降。
21	大坂城跡	大阪府大阪市	(※多数)	
22	長原遺跡	大阪府大阪市	地墳層	
23	珊瑚池都山遺跡	大阪府岸和田市	(※多数)	
24	北花田LJ遺跡	大阪府岸和田市	包含層	遺跡は15～18世紀を中心とする聚落跡。
25	長曾根遺跡	大阪府大阪市	包含層	(不明)
26	瓜生堂遺跡	大阪府大阪市	包含層	16世紀代と推定。巴文軒丸瓦ほか共伴。
27	水走氏船跡	大阪府大阪市	SP10	(不明)
28	尼崎城跡	兵庫県尼崎市	土壤	近世尼崎城築城(元和1年、1618)以前。
29	有岡城跡	兵庫県伊丹市	瓦土	表土直下の遺構面は天文7年(1579)施設の有岡城の遺構面に想定。
30	御着城跡	兵庫県相模原市	井戸ほか	落城は天文8年(1580)。
31	大井川区御堂理事業 地内遺跡	兵庫県姫路市	溝 SD01	(不明)
32	姫路城跡	兵庫県姫路市	南北街路下層	(不明)
33	美作保原岡田遺跡	兵庫県尼崎市	溝	15～16世紀。衛前焼鉢が共伴。
34	廣畠城跡	兵庫県姫路市	表塚ほか	天文8年(1580)に魔城。
35	富田城隣道跡群	鳥取県米子市	ピット25	16世紀後半。
36	村田遺跡群	高知県南国市	十塘 SK27	ピットの切り合いから18世紀前半より古い。
37	高畠城跡	高知県南国市	包含層	天文3年(1575)銅瓦出土。
38	草野作遺跡	佐賀県唐津市	包含層	15～16世紀。

(注) (鳴谷 2006)をもとに、(鳴谷 1991)(岡本 1993)(般路市 2006)の成果を加味して作成した。

## 【参考文献】

佐藤虎雄1966「水走文書」(『枚岡市史』第3巻史料編(1))

瀧澤敬三編著1966「絵巻物による 日本常民生活絵引」4、角川書店

川西宏幸1978「円筒埴輪論」(『考古学雑誌』64巻2号、日本考古学会)

田辺昭三1981「須恵器大成」、角川書店

奈良国立文化財研究所1982「平城宮発掘調査報告X I 本文」

鶴谷和彦1991「緒盤期の犬形土製品」(『関西近世考古学研究Ⅰ』、関西近世考古学研究会)

古代の土器研究会編1992「古代の土器Ⅰ 郡城の土器集成」

岡本桂典1993「高知県出土の繩文期の犬形土製品」(『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』2号)

江浦洋2000「大阪城出土の犬形土製品小考」(『大阪文化財研究』18号、(財)大阪府文化財センター)

姫路市埋蔵文化財センター 2006「姫路市内から出土した 犬形土製品たち」[展示パンフレット]

鶴谷和彦2006「戦国時代の犬の土人形」[姫路市埋蔵文化財センター展示会資料]

図版 1 水走氏館跡第4次調査

遺構



水走氏墓塔現状（西から）



調査前の状況（南から）



断面④（北から）

図版2 水走氏館跡第4次調査  
遺構



A地区 第5層上面遺構検出状況  
(南から)



A地区 第5層上面遺構掘削後状況  
(南から)



A地区 北壁断面 (南から)

図版 3

水走氏館跡第4次調査

遺構



B地区 第5層上面遺構検出状況  
(北から)

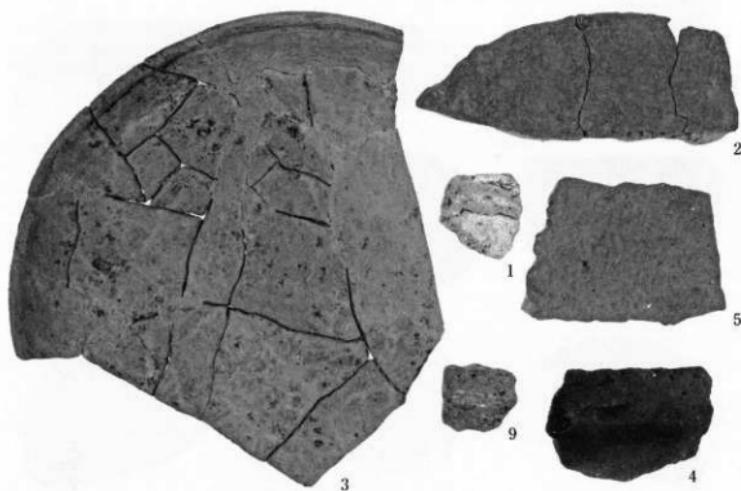


B地区 第5層上面遺構掘削後状況  
(北から)

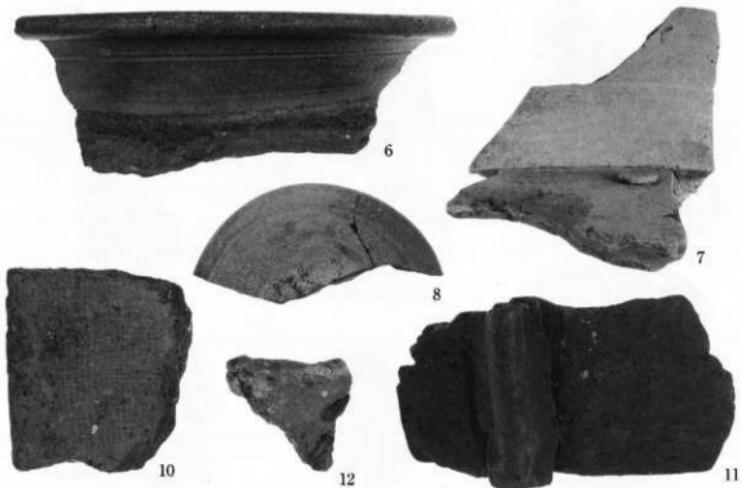


B地区 ピット・土坑の配置 (南から)

図版4 水走氏館跡第4次調査  
遺物



1. SK1・2、SP13出土円筒埴輪、韓式系土器 壺、土師器 盆・壺

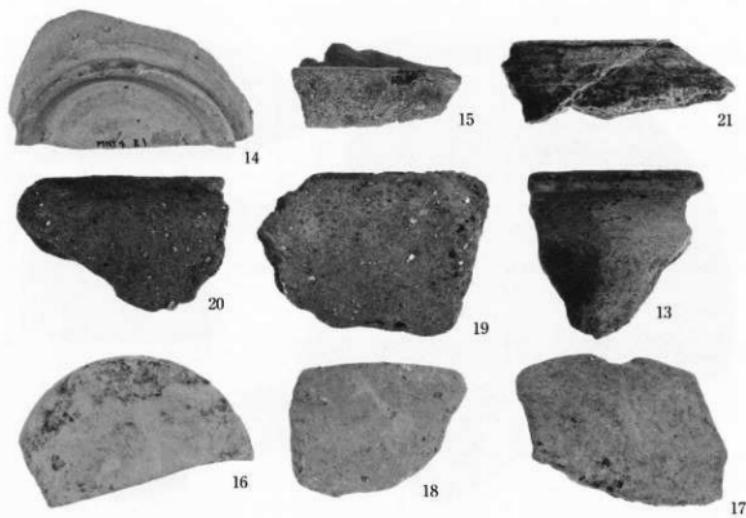


2. SP6・13・21出土須恵器 壺・壺蓋、平瓦、土師器 壺、円筒埴輪

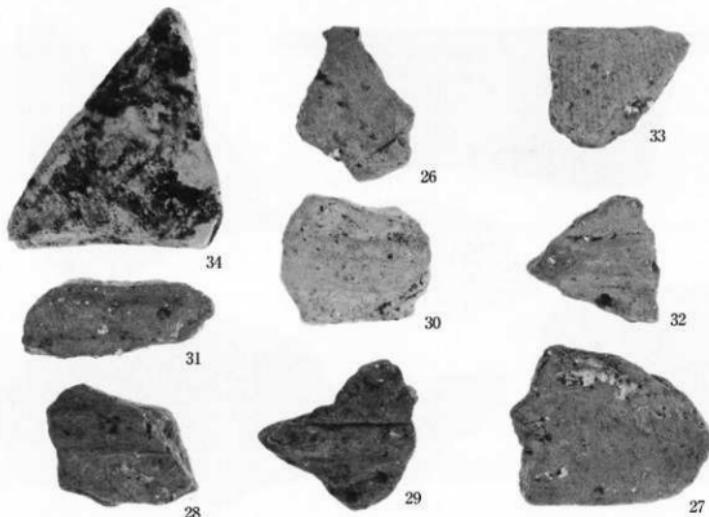
圖版 5

水走氏館跡第4次調査

遺物

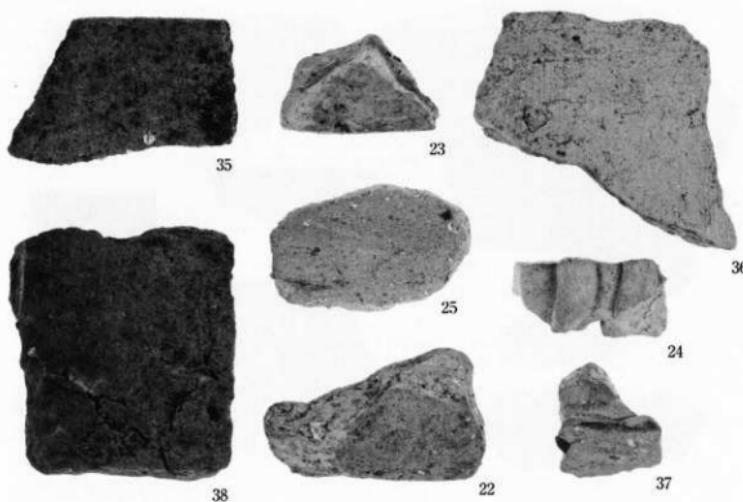


1. 第1～3層出土弥生土器 鉢、須恵器 杯身、土師器 盆・甌、瓦質土器 羽釜

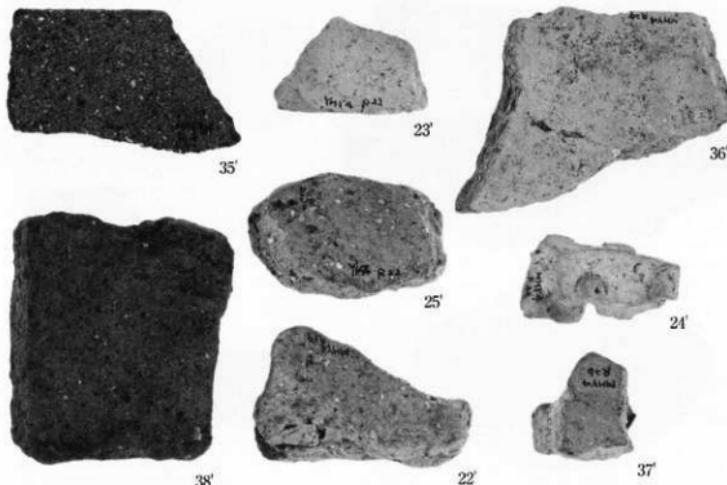


2. 第1～3層出土円筒埴輪

図版 6 水走氏館跡第4次調査  
遺物



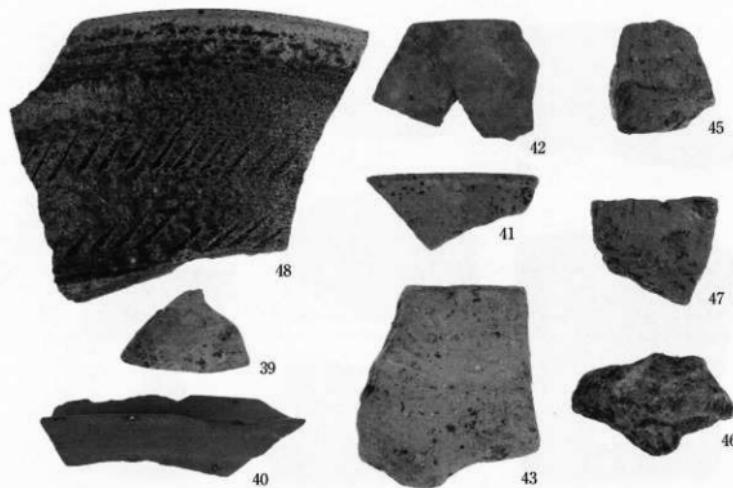
1. 第1～3層・3層出土形象埴輪・円筒埴輪、土師器 羽釜、平瓦（外面）



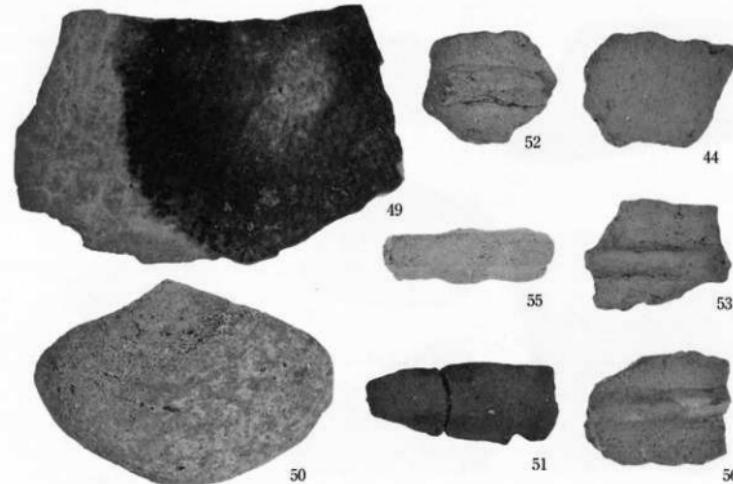
2. 同上（内面）

圖版 7 水走氏館跡第4次調查

遺物

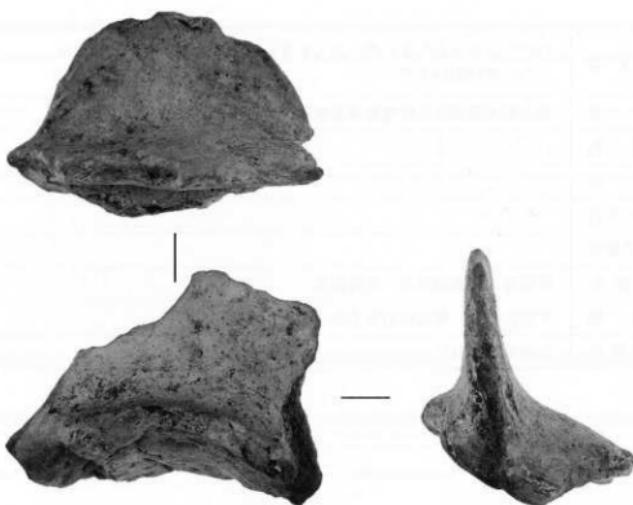


1. 第4層出土須恵器 蓋・杯身・甕、土師器 杯、円筒埴輪



2. 第4・5・6層出土形象埴輪、円筒埴輪、韓式系土器 甕、須恵器 蓋・杯、土師器 甕

圖版 8 水走氏館跡第4次調查 遺物



54

1. 第5層出土馬形埴輪



57

2. SP10 出土犬形土製品

報告書抄録（その1）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう -へいせい20ねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報 -平成20年度-
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太・武田雄志・佐藤由美
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所取遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
瓜生堂遺跡	東大阪市下小阪 5丁目41-2番地	27227	95	平成19年10月31日 ～11月15日	158m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
山畑遺跡	東大阪市上四条町 1709番地	27227	67	平成20年3月5日 ～3月25日	188.96m <sup>2</sup>	整地工事
水走氏館跡	東大阪市五条町 1317-1・1322-1番地	27227	59	平成20年5月26日 ～6月19日	288.51m <sup>2</sup>	露天資材 置場造成 工事

## 報告書抄録（その2）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓜生堂遺跡 (第54次調査)	集落跡 その他の墓	古墳時代 ～平安時代	ピット・土坑・ 井戸・溝	土師器・須恵器・ 製塙土器・土製品・ 輸入磁器・瓦	
山畑遺跡 (第31次調査)	集落跡 散布地 (占墳)	弥生時代 ～古墳時代	ピット・土坑・ 溝・旧地形 傾斜面	弥生土器・須恵器・ 瓦質土器・埴輪 土製品・石器	
水走氏館跡 (第4次調査)	城館跡	古墳時代 ～戦国時代	ピット・土坑・ 傾斜面	弥生土器・土師器・ 韓式系土器・須恵器・ 埴輪・瓦・土製品	馬形埴輪、 犬形土製品が出土

### 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

一平成20年度一

発行日 平成21年3月31日  
 編集・発行 東大阪市教育委員会  
 ℡577-8521  
 東大阪市茨木北一丁目1番1号  
 TEL.06-4309-3283  
 印刷所 株式会社ミラテック

